

市道西尾大井線道路整備事業に伴う発掘調査報告書

魚見塚遺跡 朝酌菖蒲谷遺跡

市道西尾大井線道路整備事業に伴う発掘調査報告書

魚見塚遺跡・朝酌菖蒲谷遺跡

二〇一八年三月

平成30(2018)年3月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

市道西尾大井線道路整備事業に伴う発掘調査報告書

魚見塚遺跡
朝酌菖蒲谷遺跡

平成30(2018)年3月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

例 言

1. 本書は、平成 28、29 年度に委託を受けた、市道西尾大井線道路整備事業に伴う魚見塚遺跡、朝駒菖蒲谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は、松江市都市整備部土木課から松江市教育委員会が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ振興財団（平成 28 年 7 月に公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団に改称）が実施した。
3. 調査の遺跡名称、所在地、現地調査期間、開発面積、調査面積、調査組織は下記のとおりである。

遺跡名	調査区	所在地	開発面積	調査面積	調査期間	
魚見塚遺跡	第 1 次調査区 本調査区	松江市朝駒町 942-1, 960-1	10,000m ²	157.62m ²	H28 年 5 月 12 日～H28 年 7 月 1 日 H28 年 7 月 21 日～H28 年 8 月 8 日	
	第 2 次調査区 T0201・02・03	松江市朝駒町 942-1, 960-1		29.62m ²	H28 年 7 月 4 日～H28 年 7 月 20 日	
	第 3 次調査 T0304・05・06	松江市朝駒町 942-1, 941-2, 940-2, 972-3		18.42m ²	H28 年 8 月 1 日～H28 年 8 月 8 日	
	第 4 次調査 T0407・08・09	松江市朝駒町地内 (旧市道多賀 1 号線)		20.67m ²	H28 年 9 月 12 日～H28 年 9 月 21 日	
	本調査区	松江市朝駒町 999-1 外		1001.83m ²	H28 年 12 月 15 日～H29 年 5 月 24 日	
(1) 現地調査と報告書作成の組織						
【魚見塚遺跡現地調査】平成 28 年度（第 1、2、4 次調査）						
主 体 者	松江市教育委員会 教育長 清水伸夫					
事 務 局	松江市埋蔵文化財調査室 室長 飯塚康行、調査係長 赤澤秀則、主任 徳永隆					
調査指導	国立大学法人島根 大学法文学部 教授 大橋泰夫、松江市文化財保護審議会委員 勝部昭 島根県古代文化センター 専門研究員 平石充、島根県教育庁 文化財課 企画員 守岡利栄					
実 施 者	公益財団法人松江市スポーツ振興財団 理事長 清水伸夫 公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団（平成 28 年 7 月 1 日改称）					
	埋蔵文化財課長 曽田健、調査係長 川西学、調査員 江川幸子、調査補助員 北島和子					
【魚見塚遺跡現地調査】平成 28 年度（第 3 次調査）						
主 体 者	松江市教育委員会 教育長 清水伸夫					
調査指導	島根県教育庁 文化財課 企画員 守岡利栄					
事務局・実施者	松江市埋蔵文化財調査室 室長 飯塚康行、調査係長 赤澤秀則（担当者）、主任 徳永隆					
【朝駒菖蒲谷遺跡発掘調査】平成 28～29 年度						
主 体 者	松江市教育委員会 教育長 清水伸夫					
事 務 局	松江市埋蔵文化財調査室 室長 飯塚康行、調査係長 赤澤秀則、主任 徳永隆					
調査指導	国立大学法人島根大学法文学部 教授 大橋泰夫、島根県教育庁 文化財課 調査監 植真治					
実 施 者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 理事長 清水伸夫、埋蔵文化財課長 曾田健 調査係長 川西学、調査員 徳永桃代、調査補助員 黒田裕司					
【報告書作成業務】平成 29 年度						
主 体 者	松江市教育委員会 教育長 清水伸夫					
事 務 局	松江市埋蔵文化財調査室 室長 飯塚康行、調査係長 赤澤秀則、主任 徳永隆					
指 導 者	国立大学法人島根大学法文学部 教授 大橋泰夫、出雲弥生の森博物館 館長 花谷浩					
実 施 者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 理事長 清水伸夫、埋蔵文化財課長 曾田健 調査係長 川西学、調査員 江川幸子、調査補助員 北島和子					
4. 調査・報告書作成にあたっては次のの方々及び機関から多くなご指導、ご教示、ご協力をいただいた。 記して感謝の意を表す。(敬省略、順不同)。						
【魚見塚遺跡現地調査】文化庁文化財部記念物課、島根県教育庁文化財課、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 多賀神社、朝駒町自治会、近江俊秀（文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門文化財調査官） 佐藤信（国立大学法人東京大学大学院教授）、木本雅康（長崎外国语大学外国语学部教授） 花谷浩（出雲弥生の森博物館館長）、椿真治（島根県教育庁文化財課調整監） 松尾充晶（島根県古代文化センター専門研究員）						

【朝酌菖蒲谷遺跡現地調査】角田徳幸（古代出雲歴史博物館交流普及課長）

5. 本書の執筆及び編集は、松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て江川が行った。
6. 本書における土器区分・分類・編年は以下を参照した。

【土師器・須恵器】

・岡田裕之・土器検討グループ 2010『出雲地域における古代須恵器の編年』『出雲国成立と国府成立の研究』島根県古代文化センター

・稲田陽介 2013「第10章 出土遺物の様相 第2節 土器 1. 須恵器・土師器 3) 出雲国府跡出土土器の型式設定と実年代」『史跡出雲国府跡－9 総括編－』島根県教育委員会

7. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第III系の値である。またレベル値は海拔標高を示す。
8. 本書における遺構ほかの記号は以下のとおりである。

SP：小土坑 SK：土坑 SD：溝 SB：建物 SF：道 SX：性格不明の遺構

ST：墓 SZ：古墳

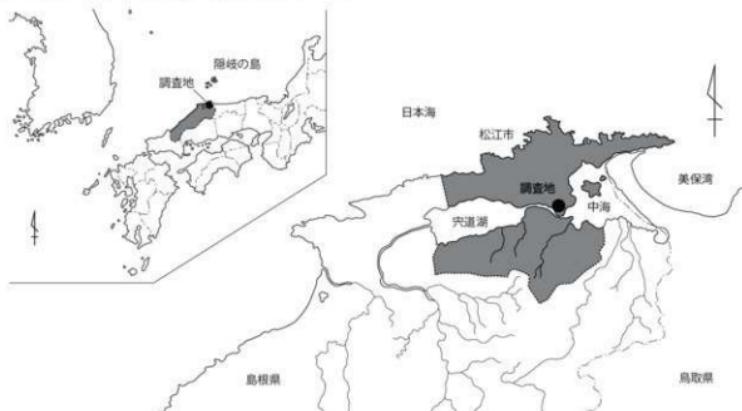
9. 本書における遺物実測図の断面は、土師器、陶磁器を白ヌキ、須恵器を黒塗り、石製品を斜線で示している。また、見通しに入れた矢印は、土師器の場合は調整の方向、須恵器の場合は轆轤の回転方向を表している。

10. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は、松江市教育委員会において保管している。

11. 道路遺構の名称は下図のとおりとする。



12. 島根県・松江市と調査地の位置を下図に示した。



目 次

例言

第 1 章 調査に至る経緯と経過.....	1
第 1 節 調査に至る経緯.....	1
第 2 節 「魚見塚遺跡」地下保存に至る経過.....	1
第 2 章 位置と環境.....	3
第 1 節 地理的環境.....	3
第 2 節 歴史的環境.....	4
第 3 節 「枉北道」既往の研究.....	12
第 3 章 魚見塚遺跡.....	14
第 1 節 調査の経過.....	14
第 2 節 第 1・2 次調査.....	18
第 3 節 第 3 次調査.....	43
第 4 節 第 4 次調査.....	48
第 5 節 総括.....	50
第 4 章 朝酌菖蒲谷遺跡.....	54
第 1 節 調査の経過と概要.....	54
第 2 節 調査の成果.....	60
第 3 節 総括.....	98
遺物観察表.....	101
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

【魚見塚道路】

第 1 図 道跡と開発範囲	2
第 2 図 島根県鳥取魚見塚道路・朝鶴菖蒲谷道路	
ほか位置図	3
第 3 図 魚見塚道路・朝鶴菖蒲谷道路位置図	4
第 4 図 魚見塚道路・朝鶴菖蒲谷道路周辺の道路	6
第 5 図 「風土記」から復元した朝鶴の地域	8
第 6 図 「風土記」から復元した出雲国の交通	9
第 7 図 魚見塚道路・朝鶴菖蒲谷道路周辺の小字名(1)	10
第 8 図 魚見塚道路・朝鶴菖蒲谷道路周辺の小字名(2)	11
第 9 図 魚見塚道路位置図(1)	16
第 10 図 魚見塚道路位置図(2)	17
第 11 図 第 1 次調査区・第 2 次調査区の調査前地形測量図	18
第 12 図 第 1 次調査区・第 2 次調査区の道構配置図	21
第 13 図 東壁上断面図(1)	22
第 14 図 東壁上断面図(2)	23
第 15 図 SD02・SX03・SX04 平面図	25
第 16 図 SX03 断面図	26
第 17 図 SX03 と SD02	27
第 18 図 SX01 平面図と断面図	28
第 19 図 SX01・SD02 上断面	29
第 20 図 SX04 平面・断面図	30
第 21 図 クロクサ群種出土地図	33
第 22 図 SD09 平面・断面図	34
第 23 図 SX08 平面・断面図	35
第 24 図 SD10 平面・断面図	36
第 25 図 SX03 の路盤側出土遺物	37
第 26 図 SX03 の裸露出出土遺物	37
第 27 図 SX03 前区出土遺物	38
第 28 図 SX04 の裸露出出土遺物	38
第 29 図 SX04 の東側出土遺物	38
第 30 図 SD02 出土遺物	39
第 31 図 SD08 出土遺物	39
第 32 図 SD09 出土遺物	39
第 33 図 切通しの横断に見る道路道構	40
第 34 図 古代の道路 SF100 の変遷	41
第 35 図 近世の道路 SF101	42
第 36 図 第 3 次調査区	43
第 37 図 T0407 平野・断面図	44
第 38 図 T0405 平野・断面図	45
第 39 図 T0306 平野・断面図	46
第 40 図 第 4 次調査区	47
第 41 図 T0407 平野・断面図	47
第 42 図 T0408 平野・断面図	48
第 43 図 T0409 平野・断面図	48
第 44 国 地形と路盤の形態	50
第 45 国 古代道路の復元	51
【朝鶴菖蒲谷道路】	
第 46 国 朝鶴菖蒲谷道路位置図	55
第 47 国 朝鶴菖蒲谷道路区割図	56
第 48 国 朝鶴菖蒲谷道路調査前測量図	57
第 49 国 朝鶴菖蒲谷道路調査後測量図	58
第 50 国 朝鶴菖蒲谷道路構造出地図	59
第 51 国 1 区壁上断面図	60
第 52 国 1 区壁上断面図	61
第 53 国 ST02 道構図	62
第 54 国 ST03 道構図	63
第 55 国 ST04 道構図	63
第 56 国 SX05 道構図	64
第 57 国 ST02・03 出土地図	65
第 58 国 ST02・03 出土地図	66
第 59 国 1 区壁外出土遺物	66
第 60 国 SD06 出土地図	67
第 61 国 SD06 出土地図	67
第 62 国 SX07・08 道構図	69
第 63 国 SK41～46 道構図	70
第 64 国 SX09・SD10 と周辺の道構図	71
第 65 国 3 区道構出土遺物	72
第 66 国 3 区道構外出土遺物	72
第 67 国 SX11 道構図	73
第 68 国 SD12 と SB13・14 道構図	74
第 69 国 SB13・14 ピット及び SD12 断面図	75
第 70 国 SD12 出土地図	76
第 71 国 ピット出土遺物	77
第 72 国 4 区壁外出土遺物	77
第 73 国 加工段 SX15 と 17 と周辺の道構図	79
第 74 国 加工段道構のピット道構図	79
第 75 国 SX18 道構図	80
第 76 国 SX19 道構図	81
第 77 国 SX20 道構図	81
第 78 国 SX21 平面・断面図	82
第 79 国 SX15・16 出土地図	83
第 80 国 ピット出土遺物	84
第 81 国 SX18 出土地図	84
第 82 国 SX19 出土地図	84
第 83 国 SX20 出土地図	84
第 84 国 SK22 出土地図	85
第 85 国 5 区道構外出土遺物	86
第 86 国 SF23・25 壁上断面図	88
第 87 国 SF24 出土地図	89
第 88 国 SF24 出土地図	89
第 89 国 SF25 壁上出土地図	90
第 90 国 SF25 侧溝出土遺物	91
第 91 国 SP14 出土地図	91
第 92 国 6 区道構外出土遺物(1)	92
第 93 国 6 区道構外出土遺物(2)	93
第 94 国 SX28 と SB29・30 道構図	94
第 95 国 ピット断面図	95
第 96 国 SD26・27 道構図	96
第 97 国 8 区道構外出土遺物	97

挿 表 目 次

【魚見塚道路】

第 1 表 道構一覧	20
------------	----

本 文 中 写 真 目 次

写真 1 調査指導会	15
写真 2 調査 下区調査	15
写真 3 現地説明会	15
写真 4 作業風景	15
写真 5 SX03 (南から)	26
写真 6 溝 SD02 (南から)	31
写真 7 作業班組	54
写真 8 特対象の現地説明会	54
写真 9 1 区壁上削断面換出状況(西から)	62

写 真 図 版 目 次

版面 1 魚見塚道路周辺 空中写真 * 寄り写真の山が久瀬山 魚見塚道路周辺 空中写真 * 寄り写真の山が茶臼山	
版面 2 魚見塚道路 調査用風景 (北から)	
版面 3 魚見塚道路 全景写真 (南から)	
版面 4 魚見塚道路 道構換出状況 (南から)	
SD02・SX01 検出状況 (南から) T0201 検出状況 (南から)	
版面 5 SX02・SX03 検出状況 (南から) SX03・SD02 検出状況 (南から) SD03・SD05 検出状況 (南から)	
版面 6 调査用半部断面換出状況 (南から)	
T0202 検出状況 (南から)	
T0202 検出状況 (東から)	
SD08・SD05・SX03 検出状況 (南から) T0201～T0203 新断面図 (南から)	
SX03・SD05 上断面換出状況 (南から) SD10 検出状況 (北から)	
版面 8 T0304 北壁上断面換出状況 (南から) T0305 北壁上断面換出状況 (南から) T0306 北壁上断面換出状況 (南から)	
版面 9 T0407 検出状況 (西から)、T0408 検出状況 (西から) T0409 検出状況 (南から)	
版面 10 朝鶴菖蒲谷道路 全景写真 (南から)	
版面 11 朝鶴菖蒲谷道路 1 区北壁上削断面換出状況 (北から) 1 区 ST02 出土地図 (南から) 1 区 ST03 出土地図 (南から) 1 区 ST04 出土地図 (北から)	
版面 12 2 区 SD06 検出状況 (西から) 3 区 SX07 道構 (65-11) 出土地図 (南から) 3 区 SD12・SB13・SB14 完掘状況 (南から)	
版面 13 3 区 SX07 検出状況 (南から) 4 区 SX11 検出状況 (南から) 4 区 SB13・SP217-11 出土地図 (南から) 4 区 SB14・SP59 完掘状況 (南から)	
版面 14 5 区道構完掘状況 (南から) 5 区 SX18 上断面換出状況 (南から) 5 区 SX18 完掘状況 (南から) 5 区 SX20 上断面換出状況 (東から) 5 区 SX20 完掘状況 (北から)	
版面 15 6 区 SF23～SF25 検出状況 (北から) 6 区 SF24、SF25 東半部完掘状況 (北から)	
版面 16 7 区 SD27 完掘状況 (南から) 7 区 SX28、SB29、SB30 完掘状況 (西から)	

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

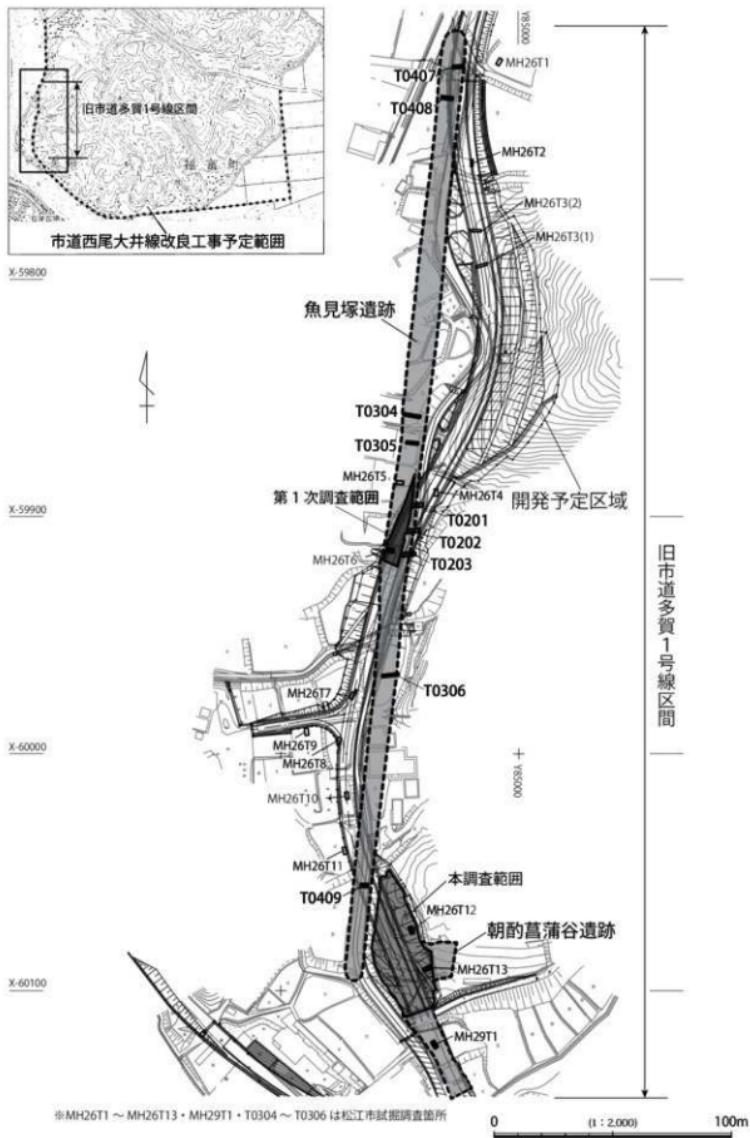
市道西尾大井線は、大橋川の河川改修事業に伴い、総延長 3.8kmに及び改良工事が計画されたものである。その内、旧市道多賀 1号線区間については、通学路ではあるが歩道もなく、勾配の急な幅員の狭い道路であったことから、バス路線化や歩道等を整備するための拡幅工事が松江市都市整備部により計画された。

この当該事業区間について、平成 24 年 9 月に埋蔵文化財の有無照会が松江市教育委員会になされたことから、平成 27 年 2・3 月に試掘調査 (MH26T1 ~ MH26T13) を実施した。その結果、事業区間の中央で 2 カ所 (MH26T5, MH26T6)、南端で 1 カ所 (MH26T13)、遺構・遺物が確認されたことから、中央部を「魚見塚遺跡」、南端を「朝酌菖蒲谷遺跡」として、平成 27 年 3 月の発見通知により周知することとなった。これを受け、開発部局と調整を行ったが、道路の利便性や民家との接道部分の関係上、設計変更は困難との結論に至り、同年 4 月に両遺跡について発掘通知が提出された。この内容について、島根県教育委員会と協議した結果、発掘調査の勧告を受けることとなり、これにより、両遺跡の発掘調査を実施するに至ったものである。

なお、当事業区間の南端部分については、前述の試掘期間中に調査できなかったことから、平成 29 年 5 月に試掘調査 (MH29T1) を実施し、結果、遺物包含層を確認している。このため、同年 6 月に「朝酌菖蒲谷遺跡」の範囲変更の手続きを行い、現時点で平成 30 年度以降に発掘調査を実施する予定としている。

第2節 「魚見塚遺跡」地下保存に至る経過

魚見塚遺跡については、調査開始早々に地山に掘られた連続土坑が検出された。このことから、大橋泰夫氏（島根大学）、島根県教育委員会による調査指導会を開いたところ、古代道路遺構に伴う「波板状凹凸面」と想定されるものであり、当該地が『出雲国風土記』に記された「枉北道」に推定されるルート上にあることから、「枉北道」そのものを検出した可能性が高いとの指導を受けた。これを受け、発見された遺跡の重要性に鑑み、開発部局と協議を重ねた結果、遺跡のより詳細な状況を確認し、この遺構が「枉北道」である確証を得る必要があるとの判断に至り、推定される延長上の残存状況等を確認するための追加試掘・確認調査を実施した。結果、南北に直線的に延びる道路遺構であり、古代官道の特徴を良く残すことが確認された。また同時に、これらの調査成果について有識の方々に指導を頂き、「枉北道」の可能性が極めて高い旨の指導も受け、島根県教育委員会も交えて開発部局と再度の事業計画の見直しについて協議を重ねることとなった。結果、周囲の条件から道路線形の変更は困難であるが、道路勾配を変更して計画道路高を最大約 3m 上げることにより、当該事業範囲にかかる魚見塚遺跡の全域を地下保存することとなったものである。



第1図 遺跡と開発範囲

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

東西に細長い島根県の北東部には、東西の長さ 65km の島根半島がある。島根半島の北は日本海、東は美保湾、南は宍道湖と大橋川、中海によって囲まれ、西の出雲市で本土とつながり、日本海の北約 50km に隠岐の島が浮かぶ（第2図）。

松江市は島根半島の東側約半分と、これとほぼ同じ面積の本土側の土地を合わせ持つ。

本書で報告する魚見塚遺跡と朝酌菖蒲谷遺跡は、島根半島側にある朝酌町に所在し、標高 114.1m の独立丘陵から、南西に向けて大橋川へのびる低丘陵の先端付近に位置している。このあたりは丘陵が大橋川まで迫り、平地の面積は少ない。

両遺跡から大橋川までの距離は 100m 足らずで、魚見塚遺跡から西を望むと朝酌川、剣先川、天神川、馬橋川の 4 本の川が同遺跡の西で大橋川に合流して 1 本の河川となり、その大橋川は朝酌町矢田付近で両岸からせり出した丘陵によってさらに川幅が狭められて東の中海へ注いでいる（第3図）。南を望むと大橋川の向こうに茶臼山が聳え、北を望むと和久羅山が聳えている。

朝酌菖蒲谷遺跡は大橋川が最も幅を狭めるところの低丘陵上に位置し、大橋川を挟んで向こう岸の市街地を目前に臨む。



第2図 島根半島と魚見塚遺跡・朝酌菖蒲谷遺跡ほか位置図

第2節 歴史的環境

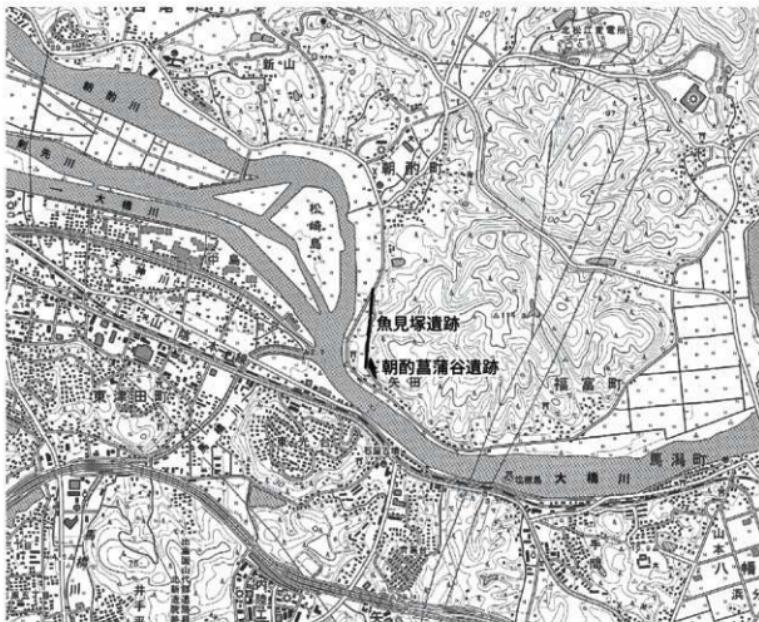
1. 周辺の遺跡（第4図）

松江市東部では意宇平野とその縁辺部に各時代の遺跡が密集し、次いで嵩山の北・西麓にも多くの遺跡が分布している。ここでは朝駄町を中心として、国庁が置かれた意宇平野と島根郡家に比定されている芝原遺跡（4）を結ぶ柱北道推定ルートを中心として、縄文時代から中世までの主要な遺跡を概観していく。

縄文時代 朝駄町の近くには大井町の九日田遺跡（44）があり、後期初頭を中心としたドングリ類の貯蔵穴 19 基を含む計 23 基の土坑が検出されている。また、魚見塚遺跡と大橋川を挟んで対峙する官道下遺跡（58）では、自然流路跡から後～晚期の土器が出土している。

弥生時代 前・中期の遺跡は低湿地の周縁部に拠点集落として存在する傾向があり、意宇平野の布田遺跡（79）のほか、嵩山山麓の西川津遺跡（13）や、タテチョウ遺跡（14）から、大量の遺物が出土している。朝駄町周辺では、九日田遺跡（44）から少量の土器が出土している。

後期に入ると遺跡が小単位で広範に拡散してみられるようになり、柴三遺跡（15）や平所遺跡（67）では玉作を伴う竪穴建物跡が検出されている。朝駄町近辺では、キコロジ遺跡（54）から漆液採取容



第3図 魚見塚遺跡・朝駄菖蒲谷遺跡位置図 (S=1:25,000)

器を含む少量の土器が出土しているほか、山辺遺跡（23）でも土器が出土している。

墳墓としては、沢下遺跡（5）や間内越墳墓群（64）、来美墳墓（65）などで四隅突出墳丘墓が見つかっている。松江市内では概して小型の墳丘墓が多い中、東城ノ前遺跡（57）では墳丘部 18 × 12m を測るやや大きい四隅突出墳丘墓が見つかっており、吉備からの搬入土器の出土が知られている。

古墳時代 前期初頭は東の安来市で規模の大きい古墳が連々と造られており、松江市域ではやや遅れて古墳の築造が始まる。比較的早く築造されたのは一辺 23m 程度の八日山古墳群（9）で、1号墳の墳丘からは三角縁神獣鏡 1 面が出土している。末葉には出雲地方で最古の前方後円墳、全長 58m の廻田 1 号墳（71）が築かれており、鱗付円筒埴輪等が出土している。集落遺跡としては出雲国府下層遺跡（87）があり、朝鮮半島系遺物が多く出土していることが注目されている。

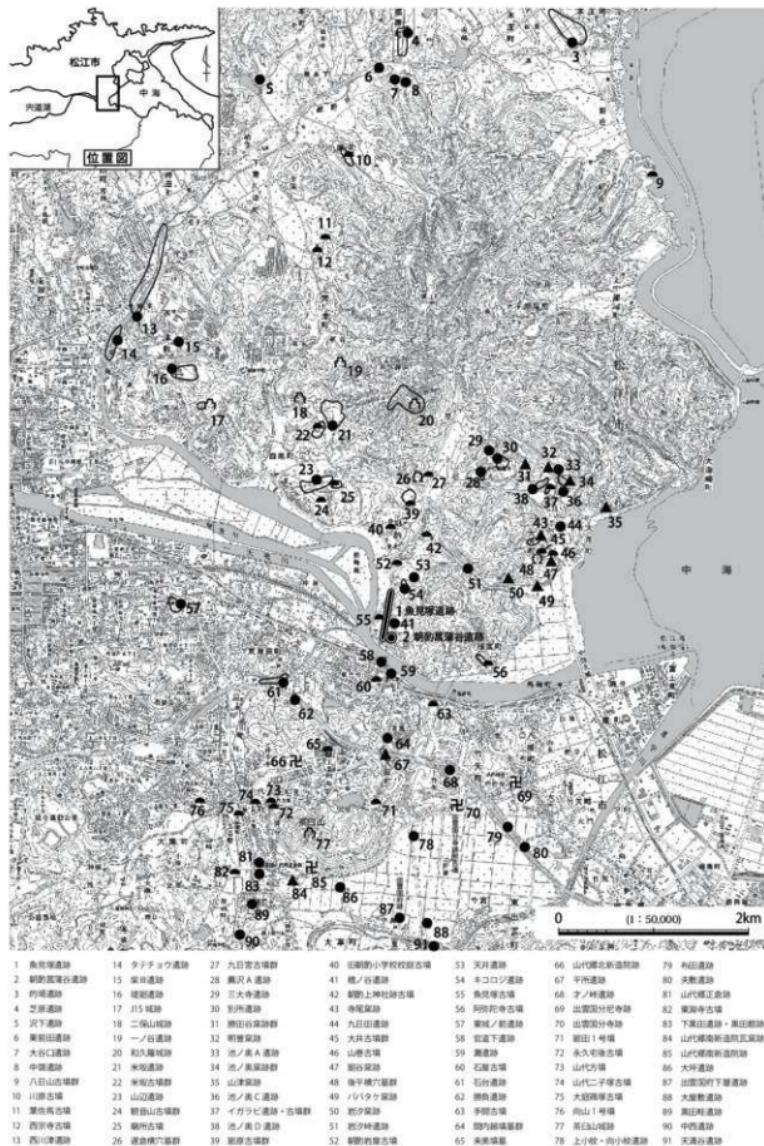
中期に入ると、宍道湖線辺部に規模の大きい古墳が拠点的に築かれるようになり、大橋川の北岸でもその一環として觀音山古墳群（24）や廻所古墳（25）といった古墳が築かれている。觀音山 1 号墳は一辺 40m 前後の方墳で、葺石と埴輪を持ち、大刀類や銅鏡などの出土が知られる。廻所古墳は一辺 60m 前後の方墳で、造出しがあり、葺石と円筒・形象埴輪を持つ。一方で、米坂古墳群（22）のような小型古墳の群集墳もみられる。大橋川の南岸では石屋古墳（60）が築かれており、一辺 42m の方墳には造出しがあり、葺石と塗彩された多数の形象埴輪と円筒埴輪がほぼ原位置を保って出土している。この時期の集落遺跡としては前期から続く出雲国府跡下層遺跡で方形区画を持つ首長居館が調査されているほか、米坂遺跡（21）や堤廻遺跡（16）が知られる。

後期に入ると情勢は一変し、茶臼山西麓に一辺 40m の方墳、大庭鶴塚古墳（75）や、全長 94m の前方後方墳、山代二子塚古墳（74）、一辺 45m の方墳、山代方墳（73）、永久宅後古墳（72）、向山 1 号墳（76）といった大規模な古墳が集中して築かれている。この墳には西の出雲市で規模の大きい古墳が減少傾向にあることから、これらの古墳の被葬者が出雲を統一した出雲臣一族の奥津城と考えられている。周辺には東淵寺古墳（82）など多数の古墳が築かれているほか、大橋川近辺でも南岸に全長 66m の前方後円墳、手間古墳（63）、北岸の朝酌町には全長 61m の前方後円墳魚見塚古墳（55）が築造されている。

この墳から、朝酌町近辺では遺跡の数が急速に増加している。

朝酌岩屋古墳（52）は墳丘が残存しないが、切石の整美な石棺式石室を持ち、玄室の内壁には現在も赤色顔料の塗布痕跡が残る。そのほかに朝酌上神社跡古墳（42）、旧朝酌小学校校庭古墳（40）、5 基からなる九日宮古墳群（44）、阿弥陀寺古墳（56）があり、小規模古墳ばかりであるが、主体部に石棺式石室を持つ点が共通し、このことは朝酌地区の古墳の特徴ともなっている。廻原古墳群（39）は大半が消滅しているが、もともとは 10 基以上の横穴式石室を持つ古墳からなる群集墳と伝えられ、このうち 1 号墳は一辺 10m の方墳で、横口式石郭を持つ特異な終末期古墳として知られている。横穴墓としては、7 穴以上からなる遼倉横穴墓群（26）がある。

朝酌地域にこれだけの古墳群を築いた人々の集落遺跡としては、天井遺跡（53）や、キコロジ遺跡が有力である。キコロジ遺跡では天井遺跡や南東から流れ込んだ状況で、主頭大刀の柄頭や漆の付着した容器など含む大量の遺物が出土している。



第4図 魚見塚遺跡・朝駒菖蒲谷遺跡周辺の遺跡

また、後の島根郡家推定地である芝原遺跡（4）周辺でも石棺式石室を持つ古墳が多く、西宗寺古墳（12）、葉佐馬古墳（11）、5基からなる太田古墳群（地図外）、川原古墳（10）などが築かれている。両地域が6世紀末頃には葬送儀礼を通じて同じ文化の下につながっていたと理解される。

一方、朝鈴町の北東に位置する大井町では5世紀末には廻谷窯跡（47）で須恵器生産が開始されている。9世紀まで操業が継続されており、その内6～8世紀の間は出雲国の須恵器生産を独占している。この頃の窯跡には寺尾窯跡（43）、ババタケ窯跡（49）、岩汐窯跡（50）、山津窯跡（35）などがある。須恵器工人の集落遺跡は別所遺跡（30）や薦沢A遺跡（28）で、墓は池ノ奥C、D遺跡（36、38）の周辺で陶棺墓が検出されている。須恵器生産を直接統括していたと目される人物の古墳は、窯跡近くに位置して朝鈴地域の古墳とは主体部の形態を異にする、山巻古墳（46）やイガラビ古墳群（37）などであったと考えられている。

古代 出雲国では7世紀末には意宇平野に国庁（出雲国府跡・87）が設置されており、現在調査が継続されている。同平野には官衙関連遺跡が広がっていたと推察されるが、詳細については未解明である。複数の木簡が出土した大坪遺跡（86）などから国府域を考えていく必要があろう。

豪族の居宅跡としては中西遺跡（90）、黒田畦遺跡（89）があり、集落遺跡としては27棟以上の建物跡が検出されたオノ峠遺跡（68）などがある。寺院としては、茶臼山の麓に出雲臣弟山が建立した山代郷南新造院跡（85）、日置臣目烈が建立した山代郷北新造院跡（66）がある。また、意宇平野の北東部には出雲国分寺（70）と国分尼寺（69）が建立されている。意宇郡家に関連する遺跡としては、山代郷正倉跡（81）が調査されており、大量の炭化米が出土している。

島根郡では、芝原遺跡が島根郡家に比定されており、庇付建物跡のほか複数の掘立柱建物跡が検出され、遺物では出雲臣に関連すると思われる「出雲」、「出雲家」、軍団の指揮官を示す「校尉」などと書かれた墨書き土器が出土している。また、周辺の東前田遺跡（6）や大谷口遺跡（7）、中嶺遺跡（8）でも掘立柱建物跡が検出され、仏具、墨書き土器など官衙に特徴的な遺物が出土している。

朝鈴町周辺では、キコロジ遺跡から9世紀初頭までの遺物が多く出土しており、漆容器や挽物の漆器椀のほか、縁釉陶器などの出土から、手工業生産と有力者層の存在が窺える。また、橋ノ谷遺跡（41）では8世紀初頭の集落跡が見つかっている。

大井町では引き続き山津窯跡、池ノ奥窯跡群（34）、明曾窯跡（32）、勝田谷窯跡群（31）などで須恵器生産が継続されており、イガラビ遺跡（37）や三大寺遺跡（29）、池ノ奥A遺跡（33）では円面硯や水滴が出土して官衙的な様相がみられ、鉄鉢形土器や托などの仏教関連遺物も出土している。

中世 意宇平野周辺が中世府中となり、国府跡（上層）から遺物が出土し、近くの天溝谷遺跡（91）や大屋敷遺跡（88）から、多量の青・白磁を伴う建物跡が検出されている。

朝鈴町周辺では、別所遺跡（30）で大量の中世須恵器が出土しており、中世須恵器の生産が推定されている。岩汐峠遺跡（51）や米坂古墳群では、16世紀頃の石圓いを伴う一字一石絆塚が検出され、追善供養の内容が書かれた多字一石や宋錢が出土している。また、三大寺遺跡では13基からなる古墓群が検出されている。山城も多く、和久羅城跡（20）は山頂に郭、土壘、枱形虎口などが確認されており、近くには、二保山城跡（18）、一ノ谷遺跡（19）、J15城跡（17）がある。

2. 『出雲国風土記』にみえる朝酌と枉北道

『出雲國風土記』(以下『風土記』) は733年に編纂された出雲国の地誌である。

『風土記』には、本書で報告する調査地である奈良時代の朝駅地域の様子と枉北道について詳しく記されているので以下に訓讀文を掲載し、簡単に説明を加える。

(1) 朝鮮地域について（第5図）

あさひの せと ひなむしのかひだり にし はなる ちなかれ わたり すなは うつ ひびきにし わたる はるあき い い
朝釣朝釣束。東に通り道、西に平原在り、中央渡にあり。即ち、笙を東西に亘し、春秋に入出だす。
おひらひ てきとうをと とき まきあそぶ 今や 通はり ほし をどり かげゆ みづみ おもふ かへ や こ あら ひ いを
大き小さき雑魚。臨時に来湧りて、笙の邊に躊躇り、風壓し水衝く。又は簾を破り、或は日魚
とどり おねむけ くわくわ ほまつ いへ あ いだよも つづり おのづの いちぢる から
と製りて、鳥に捕らる。大き小さき雑魚・浜藻、海上に闘闘、市人四より集ひて、自然に塵を成せり。(中略)
あさひのわたりのかひだり あしづき にじゆくめい まつめい かみへ かよ みどり かのう
朝釣朝釣渡。広さ八十歩許なり。國府より海邊に通ふ道なり。(島根郡条)

朝酌促戸とは朝酌地域の大橋川が川幅を狭めているところ、つまり本書で報告する2つの遺跡が立地する付近の大橋川北岸一帯を指す。そこには東に道があって、西には原があり、その間に渡し場があるとされている。これが朝酌渡のことで、出雲国府と隠岐国府を連絡する、柱北道の渡河区間にあたる。巻末総記では、ここに官の渡し船が1艘あったと記されている。

大橋川の魚見塚遺跡の西あたりでは笠漁が行われてたくさんの魚が捕れ、海藻にも恵まれていたようである。自然と市がたち店ができていたということから、海産物だけではなく、様々な物資が対象となっていたことが窺われる。調読文は省略したが、さらに東へ行くと南北二浜で日魚・大井浜では



第5図 「風土記」から復元した朝酌地域

海鼠・海松が捕れたという。

また、大井浜では陶器が作られていたとあり、これは大井窯跡群のことである。大井地区は8世紀代にも出雲国の須恵器を独占的に製作しており、重量のある須恵器は主に水上交通を利用して国内各地に運ばれていたと想定される。

また、邑美冷泉と前原崎は歌垣の場で、国内外から人々が集まっていたと考えられている。

上記のとおり、朝酌促戸は国庁が置かれた意宇郡と島根郡を結ぶ場所であるとともに、中海と宍道湖を結ぶ水上交通の要衝であり、多くの人や物資が往来する場所であった。

(2) 杓北道について (第6図)

【前略】国 庁、郡家の北なる十字街にいたり、すばらしきふたつの道とがて分れて二の道とがてある。ひとは正西道、二つは北にむかへる道なり。北にむかへる道は、北に去ること四百二十歩にして、都の北の傍なる朝倉渡に至る。

「渡り八十步にして、渡船一あり。又、北のかたの一里一百番歩にして、島根郡家に至る。郡家よりまた、北へ四十步にして、又、西へ二十步にして、門を伏木下す。而も明字の門を伏木下す。」

北に去ること一十七里一百八十歩にして、隱岐波なる十的家家の浜に至る。〔度船あり。〕

又郡家より西のかた一十五里八十歩にして、郡の西の堺なる佐橋に至る。

「久保川なつ。」又、西の川たは八重二日夢にして、秋鹿に生来る。又、御家より西の川たは一日、

歩にして、郡の西の堺に至る。又、西のかた八里二百六十四歩にして、桶縫郡家に至る。又、郡家

より西のかたを土里一百六十歩にして、郡の西の堤に至る。また又、西のかた二十里一百廿步にして、

都家の東の邊なり。即ち、正西道に入る。忽て北にむれる道の程、九十九里一百一十歩の中、隱岐道

(卷末總記) (1 歩 : 1.78m、1 里 = 300 歩 : 534.54m、1 尺 : 0.297m)

⁷ 世紀後半になると、日本列島には都を中心として各国を結ぶ七道駅路が張り巡らされ、出雲国は

⁷ 19世紀後半になると、日本列島には都を中心として各國を相手に通航路が張り巡らされ、山雲画は

山陰道で都と連絡している。国内でも、国府を中心として郡家を結ぶ道路が整備されている。

3) またこれを要約すると、小陰道を抱き囲むから出産回旋の難かぬを発生平野に入ると、本国ヒューリク家

測定文を要約すると、山陰道を由旨国から山芸国境の直カイに意手平野に入ると、国境と意手郡家

の北には黒田駅家が隣接する十字路がある。その十字路をそのまま西へ向かう正西道は石見国へ通じ

了道口本來是一片空地，被挖出來（開挖地盤）才變成了道路。這就是土方工程。

る道であり、北へ曲がる柱北道（岐坂道）は岐坂国へ連絡する道である。

枉北道を十字街から北へ進み意宇郡と島根郡の郡境にある朝酌渡(約140m)を船で渡り、さらには

你一進到這座廬裡來，一到晚上，你那廬裡的火光，像月光一樣，照得你那廬裡的牆頭，像白

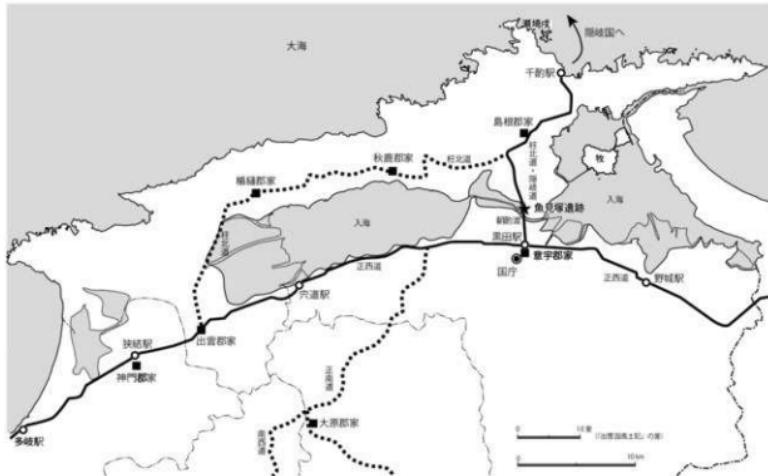
北へ進めは島根郡家に到達し、島根郡家からさらに北へ進めは隠岐国へ渡る十町駅家に至る。また、

島根郡家から西へ進めば作太橋を経て秋鹿郡家、橋越郡家を結び、出雲郡家の東辺で正西道に再び合

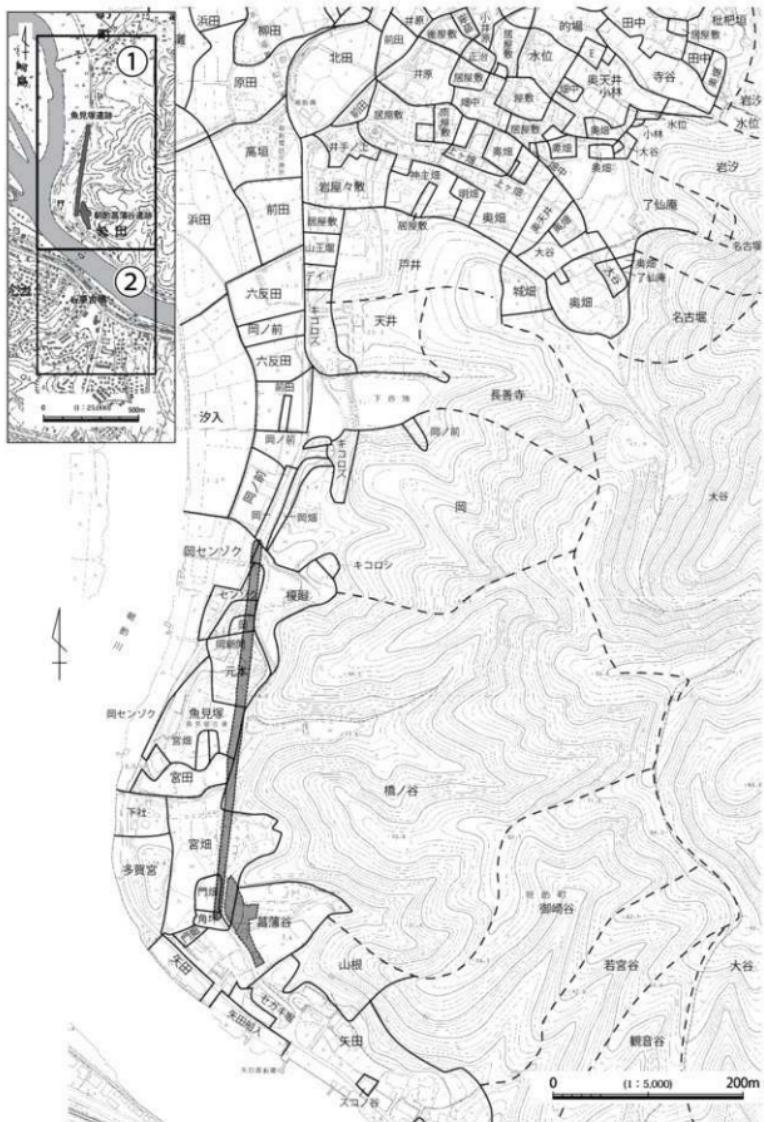
通过以上分析，我们可以得出结论：在给定的条件下， α 的取值范围是 $(-\infty, -1)$ 。

流するという。

→ 脳梗塞・脳卒中



第6図 「風土記」から復元した出雲国の交通



第7図 魚見塚遺跡・朝酌菖蒲谷遺跡周辺の小字名（1）

3. 遺跡と周辺の字名

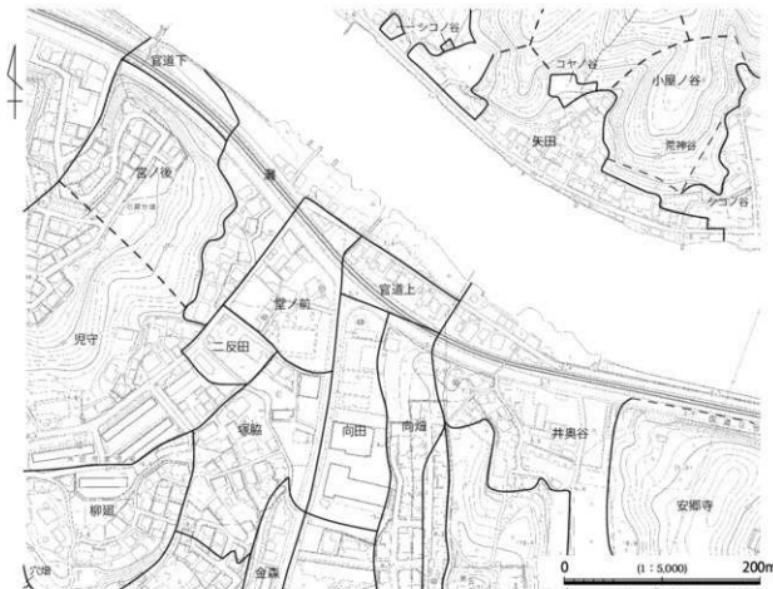
第7・8図で、魚見塚遺跡周辺の小字名を示した。

枉北道推定ルート周辺で道路と旧地形に関連する小字名をあげると、広範囲ではあるが「橋ノ谷」がみえる。魚見塚遺跡第1次調査区の南には比高約5mの谷地形（「宮田」）があり、この谷を越えるための橋、または橋状の地形が存在した名残の可能性がある。南に下がると、近年まで存在した矢田³³の渡船場よりも西の川岸に沿って「矢田船入」があり、「セガキ窟」も船着場の可能性が残る。また、大橋川南岸には「官道下」と「官道上」がみえる。

地形に関連する字名では、「官道下」と「堂ノ前」の間に「灘」が南に入り込んでおり、船着場に都合のよい大橋川の湧入を示している。

道路痕跡についてみていくと、魚見塚遺跡の北端から北へ続く現道部に「岡」、その東の小高い所に「岡畠」がみえ、ともに南北に細長い区画である。その北では下谷池のある「長善寺」を挟み、南から「キコロズ」「デイ」「山王堀」「居屋敷」「岩屋屋敷」の区画がならび、丘陵端部の小高い地形を中心として南北方向に続いている。西辺は現道にあたるが、東辺は丘陵側を画しているので、このあたりに道路痕跡を求めることができるかもしれない。

なお、1947年に撮影された空中写真にはソイルマークと考えられるラインが認められる(第10図)。字名をはじめ、現在に残された様々な要素から古代道路の復元の可能性を求める必要がある。



第8図 魚見塚遺跡・朝酌菖蒲谷遺跡周辺の小字名(2)

第3節 「枉北道」既往の研究

枉北道は十字街から発して朝駅渡を経て島根郡家に至り、秋鹿郡家、橋縫郡家を経て、再び出雲郡家の東辺で正西道（古代山陰道）に合流する郡家間を結ぶ道であり、島根郡家から北へ行くと隱岐国へ渡る千駄駅家に至る（第6図）。枉北道全体を俯瞰した研究は未だ見られないが、十字街一島根郡家については、隱岐道との関連もあり特に注目してきた。

この研究に先鞭をつけたのは中村太一である。中村は古代山陰道復元の一環として、隱岐道のコースについて「(五) 黒田駅一千駄駅」の項で具体的なルートを示している。意宇郡内では十字街から丘陵を越えるまでは中林案と木下案^{註4}^{註5}を踏襲し、大橋川の渡し場までは直線的な現代道路が明治・大正期の地形図に見えるとし、朝駅渡を現代の矢田の渡し場に比定している。朝駅渡対岸からは、神社のある丘陵と内陸の山地の間を抜けるコース（魚見塚遺跡所在地）が、やはり明治・大正期の地形図に見えるとし、これに続く大橋川に沿うルートは川の浸食作用があまり大きないと考え通行可能であったと考えている。その先是近代の地形図に見えるルートで、和久羅山の山裾を直線的に上東川津町の平地に連絡しており、島根郡家に向かう最短のルートとしている。しかし、芝原遺跡が島根郡家に比定された場合、島根郡家を隱岐道と秋鹿・橋縫両郡へ向かう枉北道の分岐点とする『風土記』の記事との整合性で疑問が残るとし、明らかに下東川津町に分岐点があることから、そのあたりに島根郡家が存在するのではないかと指摘している（中村 1992）。

中村が推定したこのルートは、現在でも枉北道の有力なルートと考えられている。

この翌年、谷重豊季は下東川津町の枉北道と隱岐道が分岐する場所について、現地踏査では見いだせなかつたが、道路が坪並の基準となつたという視点からみた場合、道路の方向が若干食い違う位置に「一の坪」があることから、そこが枉北道と隱岐道の分岐点の可能性があるとした。また、佐太神社方面へ西進する枉北道ルートについて予察・略述を行つてゐる（谷重 1993）。

服部旦は、『出雲国風土記』の島根郡条に島根郡家を中心として主要な場所への距離が記されていることから、文政4年の地図と明治時代の小字切図や道路帳附図に出てゐる道のなかから道路を選定し、その道路上を巻尺で実測し、『風土記』の距離と記載に対応させる手法で枉北道のルート解明を試みた。その成果は「三島根郡家の南限（南の起点）と朝駅郷への路線」の項で論じており、伝路は出雲郡家の芝原遺跡の西を起点として南下し、すぐに西方に曲り、またすぐに南下して美保関街道に至り、それを納佐まで西進する。納佐からは南進して上東川津町の中尾、上東川津町、米坂の峠、西尾町字西谷を経て大橋川沿いの県道に到り、そこからは東進して大井出川を渡り、多賀神社の裏（東）に上り（魚見塚遺跡所在地）、現矢田の渡しに下り、旧井ノ奥の渡しに至るルートとし、駅路については朝駅渡から上東川津町の中尾までは同ルートで、その北は島根郡家を北に迂回して千駄駅家に続くとしている（服部 1993）。朝駅渡を旧井ノ奥の渡しに比定したことと、近世道路を古代道とみなしたこと、芝原遺跡周辺を細かく考察した点が中村と大きく異なる。

一方で、内田律雄は朝駅渡から千駄駅までは2つのルートが存在すると考えた。すなわち島根郡の千駄駅へは、伝路は島根郡家を通過し（北迂道）、駅路は朝駅渡で一旦東に向かう別ルート（隱岐国道）

であったとする。伝路について詳しくは触れないが、松江市大井町において石や須恵器片を敷いた幅50cmほどの道路遺構を、『出雲国風土記』島根郡条朝駅瀬戸に記された朝駅渡の東にあった通路につながる駅路、すなわち隱岐国道の遺構と推測し、古代道の実態として、駅路・伝路は官衙付近や丘陵、平野部などを除いては、大化前代からの生活道を踏襲し、それに若干の整備を加えて馬を通せるようにした程度のものであったことがうかがえると結んでいる（内田 2016）。

現在では、島根県古代文化センターにより枉北道の俯瞰図が作成されており、朝駅渡一福原町（島根郡家推定地）までは中村説（中村 1992）と谷重説（谷重 1993）、福原町から千駅駅家までの間は概略服部説（服部 1989）、福原町から秋鹿郡家への通道は内田の説を参考に復元されている。また、秋鹿郡家から橋縫郡家そして正西道までは全く不明であるが、内田律夫の推定を基に、道路位置というよりも概念的な表示が行われている（島根県古代文化センター 2014・第6図）。

【第2章 註】

- 1.『出雲国風土記』の訓読文は、沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉編著 2005『出雲国風土記』山川出版社から引用した。
- 2.小字名間の境界線は島根県古代文化調査センターの1試案であり、細部については事実と異なる可能性がある。
- 3.セガキは仏教用語の施餽鬼に由来するものと思われ、「川施餽鬼」は船上や川岸で水死者の靈を弔う供養を意味する。
- 4.中林保 1978『出雲国』藤岡謙二郎編『古代日本の交通路Ⅲ』大明堂
- 5.木下良 1988『空中写真による計画的古道の検出』齊藤忠先生頌寿記念論文集『考古学叢考』中 吉川弘文館

【第2章 参考文献】

2節 加藤義成 2016『出雲国風土記』

島根県教育委員会 2003『増補改訂島根県遺跡地図』（出雲・隠岐編）

島根県古代文化センター 2000『船根郡朝駅瀬戸調査報告書』『出雲国風土記の研究Ⅱ』

島根県古代文化センター 2004『船根郡』「巻末条」『出雲国風土記註論』

島根県古代文化センター編 2014『解説出雲国風土記』

松江市史編集委員会 2013『古代・中世Ⅰ』『松江市史』史料編 3

3節 内田律雄 2016『4 山陰道一出雲国一』『日本古代の交通・交流・情報 3』吉川弘文館

島根県古代文化センター編 2014『解説出雲国風土記』

谷重豊季 1993『出雲国風土記の道路—おもに駅路以外の道路概観—』『出雲古代史研究』第3号 出雲古代史研究会
中村太一 1992『出雲国風土記』の方位・里程記載と古代道路』『出雲古代史研究』第2号 出雲古代史研究会

服部且 1985『『出雲国風土記』船根郡家の比定—千駅駅家湊・千駅駅家の比定と通道の比定を通して』『山陰史談』

21

服部且 1993『朝駅地区と『出雲国風土記』』『しまねの古代文化』第1号 島根県古代文化センター

【第2章 図】

第5図 島根県古代文化センター 2014『解説出雲国風土記』の「朝駅地域の景観」94頁をトレース・加筆して作図した。

第6図 古代道路ルートは、島根県古代文化センター 2014『解説出雲国風土記』の折込図を参考にして作図した。

第7・8図 島根県古代文化センター 2000『船根郡朝駅瀬戸調査報告書』『出雲国風土記の研究Ⅱ』の検索地図 368・373で示された小字地図を、縮尺 1/5000 地図に当てはめて作成した。

第3章 魚見塚遺跡

第1節 調査の経過

魚見塚遺跡では第1次調査を開始してまもなく古代の道路遺構を検出し、その立地や遺構の状況から『出雲国風土記』に記載のある「枉北道」と考えられた。この発見が端緒となり、平成28年度において、引き続き3次にわたる調査を行うこととなり、トレーナー調査区9ヵ所を設定して調査を実施している(第9・10図)。本節では、これらの調査を第1~4次調査として整理し、それぞれの経過と概要を述べる。

1. 第1次調査

4月12日に立木の伐間をおこない、調査前の地形測量をおこなった。

掘削は5月12日にバックホーを使用して表土と近現代の陶磁器を含む土層(第13・14図I・II層)を除去し、その後は人力による掘削(第13・14図III層からV層)に切り換っている。掘削と並行して北から順次精査を行ったところ、調査を開始して3日目には波板状凹凸面を持つ路盤SX01と溝SD02の平面プランを検出して道路遺構の存在を確認した。追って南では礫敷路床を持つ路盤SX03を検出し、西では地山切通SX06の一部を検出した。当初は調査区内で廃土処理を完結させる計画であり、調査区を南北に分けて調査を行っていた。5月19日には調査区の北側(北区)で道路遺構の平面プランを検出し、南北方向を指向する古代の道路遺構が良好な状態で残っていることを確認した。

この段階で再度調査方法について協議をおこない、遺構の重要性から調査区全体を一度に掘削する計画に変更し、廃土は調査区外へ搬出することにした。北区における掘削を進めながら、6月30日に地元対象の現地説明会、7月1日に一般対象の現地説明会をおこなった。

7月2日からの第2次調査(T0201~T0203)を挟み、7月21日に第1次調査を再開したところ、南区では礫敷路床を持つ路盤SX03が近世以降に大きく削平され、南に行くほど道路遺構の残りが悪い状況を確認した。道路関連以外の遺構として、近世後半以降の井戸SE13や集石遺構SX12、時期不明の土坑SK11、性格不明の落ち込みSX14を検出し、8月8日に調査を終了した。

調査後は空中写真を撮影し、速やかに真砂土を入れて遺構面の保護をおこなった。

2. 第2次調査(T0201~T0203)

第1次調査では道路遺構の東側の様子が分からなかったため、第1次調査区から現道にかけてT0201~T0203を設定し、道路遺構の東側の状況を明らかにするための調査を実施した。

現道下の調査であり車両通行止めが必要となることから、地元の方々と協議したところ、7月中旬の調査が望ましいとの意見を受けたことにより、6月30日に歩行者用の迂回路を建設して車両通行止めの手続きをとり、第1次調査に優先して調査を実施することとした。

7月4日に掘削を開始し、T0201で波板状凹凸面を持つ路盤SX01の東辺ラインと、近世の溝SD09を検出し、T0202では溝SD02の東にある礫敷路床を持つ路盤SX04と、溝SD09の延長部を検出した。T0203では遺構は検出されず、7月20日に調査を終了し、現道の復旧を行った。

3. 第3次調査 (T0304～T0306)

第1・2次調査区で検出した道路遺構を南北に延長し、その道路推定ライン上に調査区T0304～T0306を設置して、より広い範囲で道路遺構の存在を確認するための調査を実施した。

掘削は8月1日から開始し、T0304・T0306では遺構の広がりに即して可能な範囲での調査区の拡幅も行い調査した。その結果、T0304を設置した場所は本来は丘陵中腹に沿う地形にあたり、そこでは盛土工法で造られた道路遺構を検出し、丘陵上のT0305・T0306では切土工法による礫敷路床を持つ道路遺構を検出した。第1～3次調査区で検出した道路遺構がほぼ一直線上にあることを確認し、8月8日に調査を終了した。

4. 第4次調査 (T0407～T0409)

第1～3次調査で道路遺構を検出したため、道路遺構推定ルートをさらに南北に延長し、現道整備と重複する場所に調査区T0407～T0409を設定して調査を実施した。

T0407とT0409は現道下の調査となるため、歩行者用の迂回路を建設して車両通行止めの手続きをとり、9月12日に掘削を開始した。結果として、全ての調査区は後世に削平をうけており、遺構も検出されなかった。9月21日に現地における調査を終了し、現道の復旧を行った。



写真1 調査指導会



写真2 現道下の調査



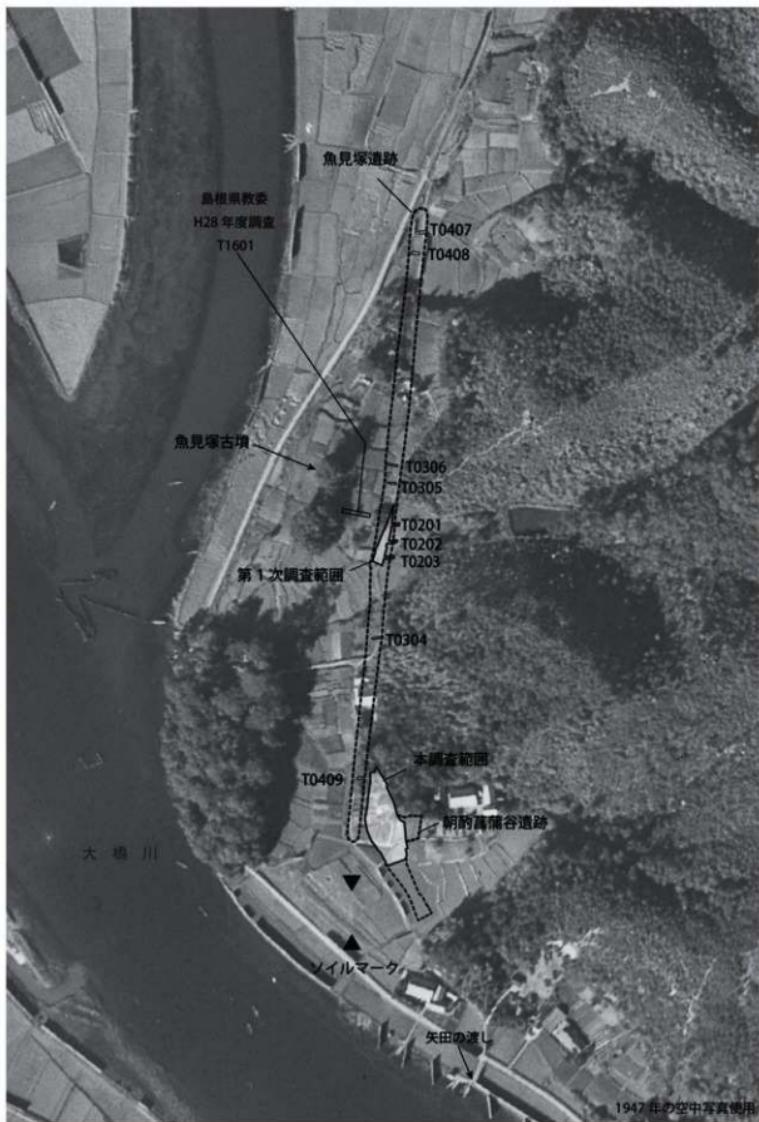
写真3 現地説明会



写真4 作業風景



第9図 魚見塚遺跡位置図（1）



第10図 魚見塚遺跡位置図（2）

第2節 第1・2次調査

1. 調査区の設定と調査方法（第11・12図）

第1次調査の対象地は、道路整備により地山が深く削られることが計画されていた、現道に沿った南北長40.8m、南端の東西幅6.9mの細長い三角形の範囲である。しかし、調査地周辺の地権者の要望により、南の端Ⓐは耕作用の通路として調査対象から外し、電柱周辺Ⓑも安全に配慮して調査対象から外した。また、北の鋭角な三角形部分Ⓒは調査範囲の東西幅が狭過ぎて掘削自体が困難のため、調査対象から外している（第11図）。

調査区には公共座標に沿う5mメッシュのグリッドを設定して名称を設けており、遺構に伴わない遺物はグリッド名と土層名、取上の日付で管理をおこなった。また、当初は調査範囲を南北に分割して調査する方法を計画していたため、北区・南区という呼称も使用している（第12図）。

最終的な第1次調査の調査範囲は南端の東西幅6.7m、現道に沿った南北長33.8m、北端の東西幅1.2mで、調査面積は157.62m²である。ただし、北区と南区の間の中央畦（第12図）はすべてを掘



第11図 第1・2次調査区の調査前地形測量図

り下げておらず、後世の検証及び調査のために古代の層（黒褐色土層）以下を保存している。

第2次調査は、道路遺構東端の状況を明らかにするため、北から調査区T0201～0203を設定した。

調査区は東西に長いトレンチ状で、南北幅は1.5m、東西幅は現道の幅である。

調査面積はT0201が8.38m²、T0202が10.52m²、T0203が10.72m²で、合計29.62m²を測る。

2. 調査の概要（第12図）

第1次調査では、南北を基軸とする道路遺構を検出した。調査区の北では波板状凹凸面を持つ路盤SX01とその西辺に沿う溝SD02を検出し、搅乱①を挟んだ南では、溝SD02の西で礫敷路床を持つ路盤SX03とその西辺に沿う溝SD05、西側の地山切通SX06とその下端に沿う溝SD08を検出した。また、道路に関連する可能性がある遺構として、溝SD10を検出した。

そのほか、近世後半以降の集石SX12と井戸SE13、時期不明の土坑SK11、時期・性格とも不明の落ち込みSX14を検出している。

遺物は須恵器がコンテナ2箱分、土師器と土師質土製品がコンテナ2箱分、陶磁器がコンテナ2箱分と石製品1点が出土した。

第2次調査では、T0201で波板状凹凸面を持つ路盤SX01の東辺を確認し、東側の地山切通を兼ねる近世後半以降の溝SD09を検出した。T0202では溝SD02の東で礫敷路床を持つ路盤SX04を確認し、その東ではT0201で確認した溝SD09の延長部を検出した。

T0203は現代の搅乱を受けており、遺構は検出されなかった。

遺物は、須恵器がコンテナ1箱分が出土した。

以上が第1・2次調査の概要であるが、両調査は別計画で実施したもの、調査区及び遺構が一連であることから、以下では両調査を合わせて報告する。

3. 基本層序（第13・14図）

調査区は南から北に高くなる傾斜地で、南端は標高11.90m、北端は標高14.70mを測る。その比高は2.80mであるが、南に比べて北の傾斜がやや急である。（第45図）第1次調査の範囲は、南北方向の道路遺構をほぼ縦方向に切る格好となり、調査区東壁A-A'の土層は、若干角度がふれるものの、ほぼ道路遺構の縦断面を示すものである。

基本層序は、上から I層 現代の層（表土、現代の道路、現代の搅乱土）

II層 近世後半以降の層

III層 時期が確定できない層

IV層 古代の層

V層 地山 に大別できる。

狭隘な調査区であるため、この基本層序は調査区全域で共通し、結果としてI、II層が大半を占める状況であった。掘削深度は90cm前後である。

第12・13図で基本層序を見ると、I層は主に現道整備時の層で、1～4層がこれにあたる。

II層は近世後半～現道整備前の層である。締まりのない軟らかい層で、場所によっては掘削時に臭気を伴っていた。近世の溝 SD09 埋土の 12・26 層と陶磁器を含む 37・38 層以上の層で、I 層より下が II 層である。

III層は遺物や遺構を作わないため時期が確定できない層である。43～45 層をはじめ、比較的締まりの無い層が多く II 層に帰属する可能性が高いが、遺物が出土しないため明確にできていない。

IV層は古代の層で、大半は道路遺構に関連すると思われる層である。このうち黒褐色土（71 層）はいわゆるクロボクで、路盤を構成していたと考えられる層である。

V層は地山で、粘質土から礫を含む粘質土、岩礫があり、場所により大きく異なる。

4. 遺構（第12図）

遺構は、道路遺構と道路に関連する可能性がある遺構、道路に関連しない遺構、時期・性格とも不明の遺構の4種類を検出した（第1表）。

このうち、道路遺構は古代3時期と近世1時期の計4時期を確認したほか、確実に道路遺構とは断定できないが、道路遺構の可能性を残す遺構を検出した。

道路に関連しない遺構は近世後半～現代初頭の遺物が混じる新しいものであり、時期・性格とも不明の遺構は上端の一部を検出しただけであるため、本書での説明は割愛する。したがって、以下では道路遺構と、道路に関連する可能性がある遺構について記述する。

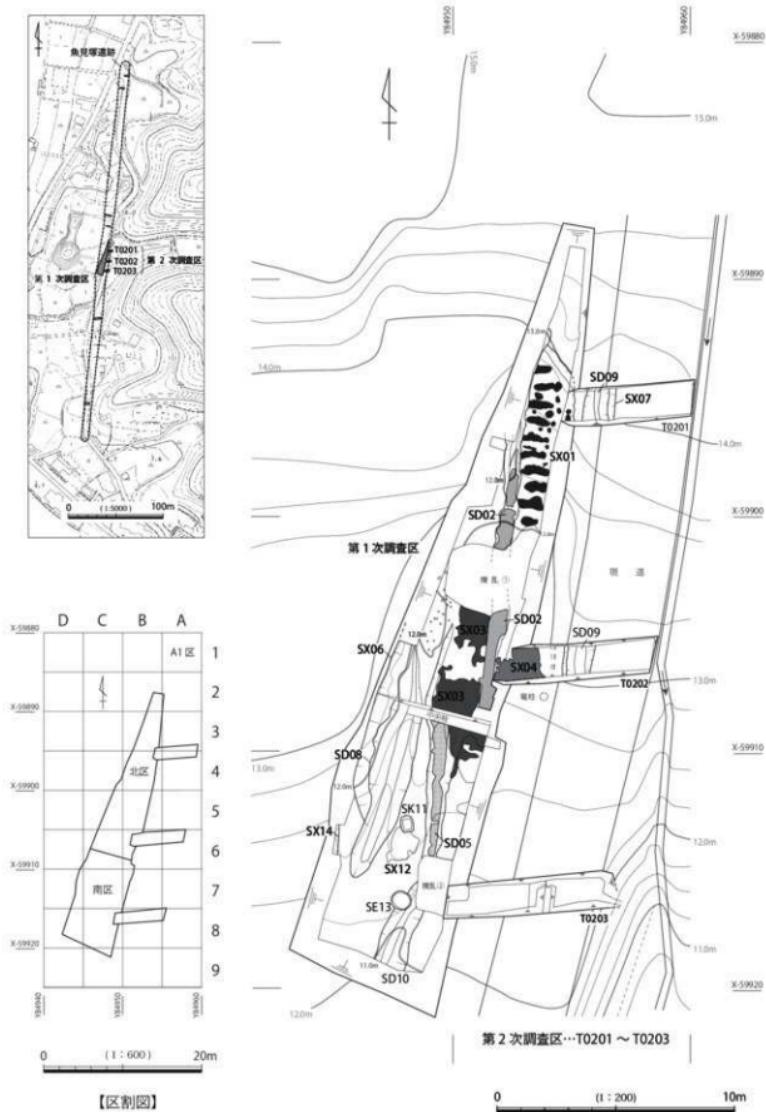
（1）道路遺構

道路遺構は古代の道路（SF100）と近世の道路（SF101）に大別できる。

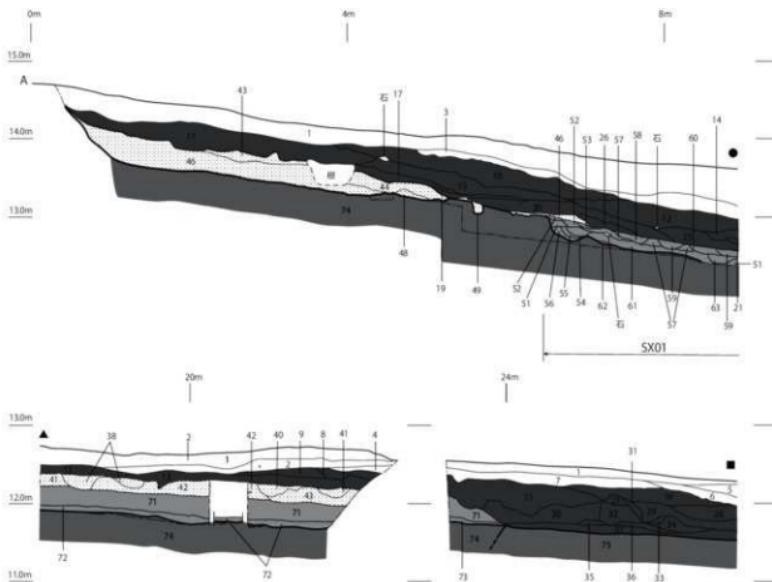
詳細にみると、古代の道路 SF100 は I～III期の3時期あり、近世の道路は2時期の可能性もあるが、明確でないため 1 時期としておく。ここでは古い順にそれぞれの遺構について説明を行う。

第1表 遺構一覧

遺構番号	遺構の種類	出土遺物	時期	備考
SF100 (Ⅰ期)	SX03 磁敷路床を持つ路盤	土師器・須恵器	7世紀末以降	古代道路Ⅰ期
	SD05 溝	須恵器		
SF100 (Ⅱ期)	SX01 波板状凹凸面を持つ路盤	土師器	8世紀後半 以降	古代道路Ⅱ期
	SX04 磁敷路床を持つ路盤	須恵器		
	SD02 溝	須恵器		
SF100 (Ⅲ期)	クロボク主体の路盤	碧玉剝片	SF100 Ⅱ期の後	古代道路Ⅲ期
SF101	SX07 切通（東側）	—	近世後半以降	近世道路
	SD09 溝	陶磁器		
SX06	切通（西側）	—	古代 (?)	道路遺構
SD08	溝	須恵器	古代 (?)	道路遺構
SD10	溝	—	—	道路遺構の可能性有り
SK11	土坑	—	—	道路に関連しない
SX12	集石	磁器（呉器小碗）	近世	〃
SE13	井戸	陶器（布志名焼）	近世末	〃
SX14	性格不明の落ち込み	—	不明	性格不明

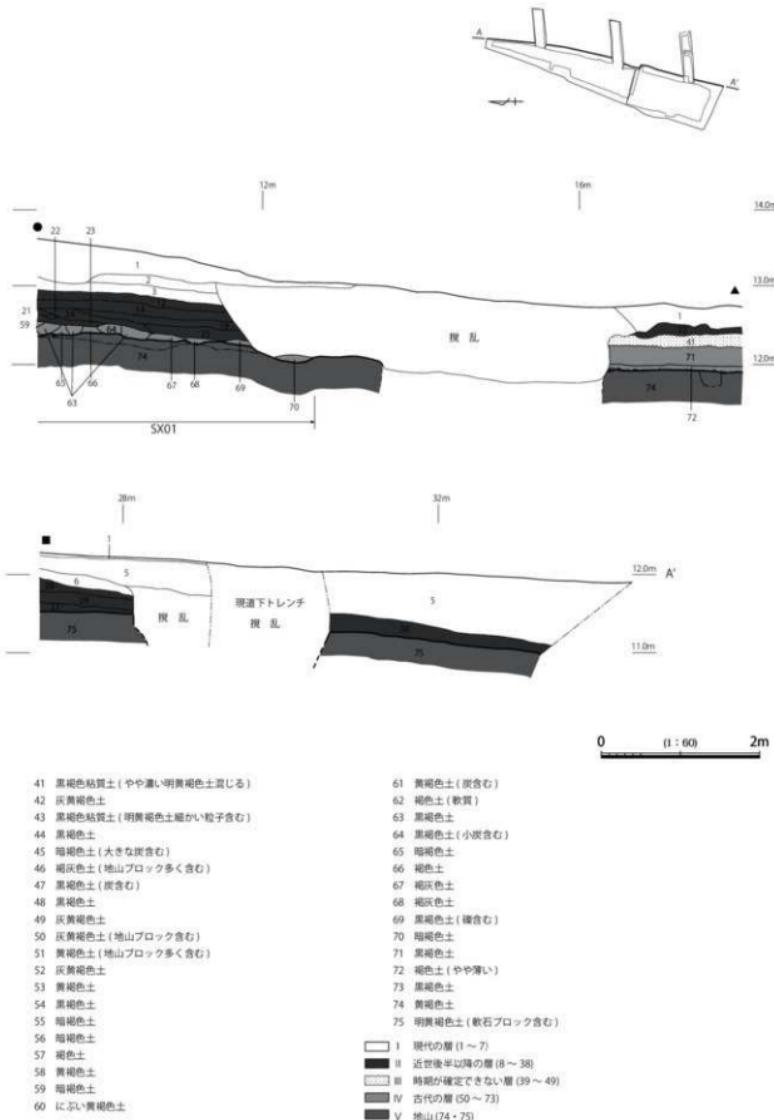


第12図 第1・2次調査区遺構配置図



- 1 灰黄褐色土(密な竹様)
 2 明黄褐色土(灰黄褐色土混じる)
 3 灰白色土
 4 黑褐色砂質土
 5 暗赤褐色土
 6 黑褐色土
 7 灰色土
 8 暗褐色砂質土
 9 暗褐色砂質土(やや薄い)
 10 黄褐色砂質土
 11 黄褐色砂質土
 12 黑褐色砂質土
 13 黑褐色粘質土(明黄褐色土混じる)
 14 灰黄褐色土
 15 灰黄褐色土
 16 にぶい黄褐色土(橙色小ブロック含む)
 17 にぶい黄褐色土(橙色土と
　　明オリーブ灰色土の小ブロック含む)
 18 黑褐色土
 19 暗褐色土
 20 灰黄褐色土(地山ブロック含む)
 21 黑色土
 22 灰黄褐色土
 23 黑色土(地山ブロック・小炭含む)
 24 黑褐色土(軟弱含む)
 25 黑褐色土(地山ブロック・炭含む)
 26 灰色土
 27 明オリーブ灰色土
 28 にぶい黄褐色土
 29 灰黄褐色土(明オリーブ灰色土の小ブロック含む)
 30 黑褐色土
 31 にぶい黄褐色土
 32 黑色土(炭含む)
 33 灰黄褐色土
 34 黑色土
 35 灰黄褐色土(明黄褐色土の小ブロック少量含む)
 36 黑色土
 37 黑褐色土
 38 にぶい黄褐色土(炭・小石を含む)
 39 褐灰色土
 40 黑褐色粘質土(やや薄い明黄褐色土混じる)

第13図 東壁土層断面図(1)



第14図 東壁土層断面図（2）

1) 古代の道路 (SF100) I期 (第12図)

①概要

礫敷路床を持つ路盤 SX03 と溝 SD05 で構成される。

路盤から多くの土器片が出土しているが（第26図）、7世紀末より新しい土器片が出土していないことから、7世紀末に構築された道路である。

地山を掘り下げて路床を造り、そこに礫敷を設けている。礫敷は、礫を敷いた後に叩き締められたようで、礫はタイルを貼ったように偏りが無く、上下の重なりがほとんどみられない。このことから、礫敷面が砂利道の路面として利用されたとは考えられず、礫敷は道路の下部構造として存在したものであり、この上にはさらに路盤層があったと思われる。礫敷の上には水捌けの良いクロボクがのっていたことから、おそらくはこの層が路盤を形成していたと思われるのだが、詳細はわからなかった。

なお、路盤 SX03 の礫敷の状況は、路床の西にある側溝 SD05 上面にも連続してみられるもので、一連の工程のもとに造られたと思われる。

②造構

礫敷路床 SX03 (第15・16図)

西辺にあたる地山を南北方向に 20cm 前後掘り下げて平坦な路床を造り、その直上に礫を敷いている。礫の大きさは径 5cm 前後で、丸味を帯びている。

ここで礫敷の特徴は、一面に敷かれた礫の平坦な面が上向きにそろい、少量の淡暗褐色土をかませて人為的に叩き締められた状況を呈していることである。^{注1} 磨は上下の重なりがほとんど見られず、均等に敷かれているように見える。路床面にはところどころに地山の凹凸が存在しているが、そこでも礫は地山の起伏に合わせて平坦な面が上向きにそろい、礫に乱れはみられない。

礫敷の中からは風化した須恵器の小片 24 点、土師器破片 1 点が出土したが（第18・26図）、大きさや摩滅の状況から、礫と同様に別の場所から運ばれてきたものと思われる。これらの遺物の時期は 7世紀末までのもので、これより新しい要素は見いだせない。

クロボク (第16図)

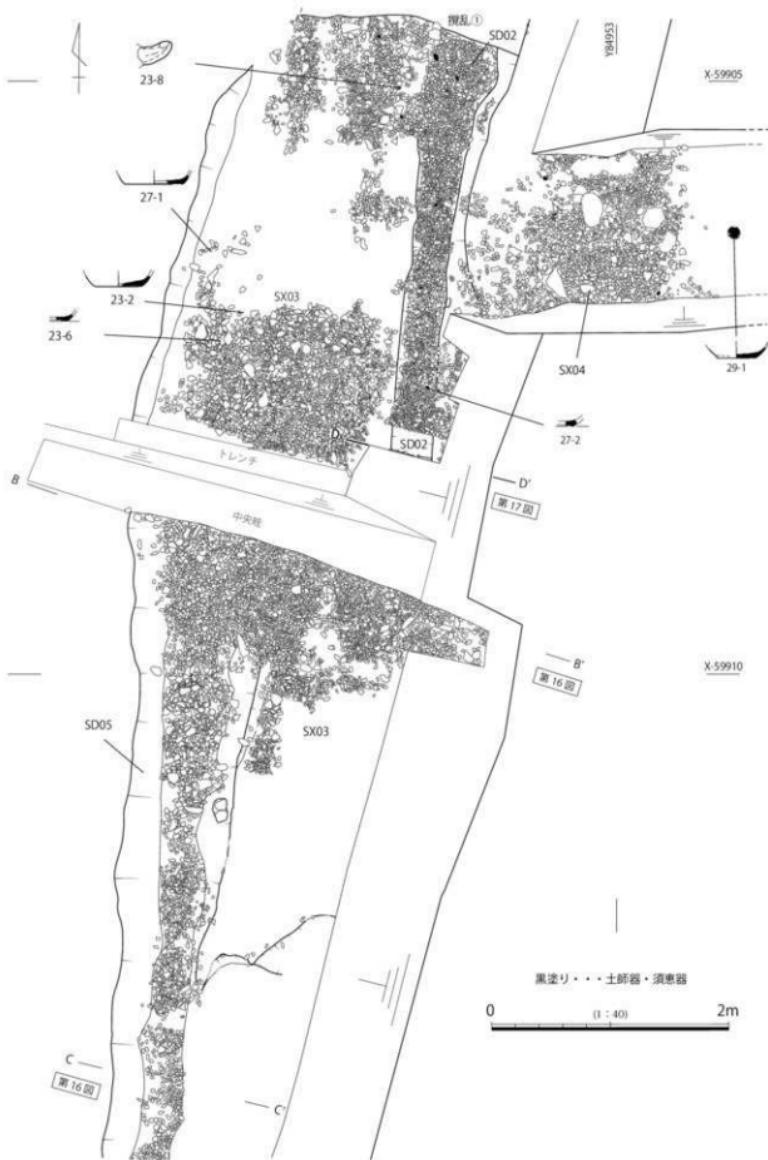
路盤 SX03 と溝 SD05 の礫敷直上にはクロボクの層（第16図 71層）がみられる。下にある礫敷に乱れが無いことから、礫敷直後に置かれたものと考えられる。水捌けがよい性質を持つことから、路盤に使用された土の一部と思われるが、ほとんど分層ができず、どのような形態であったかは不明である。クロボクには路床部の礫が混入しておらず、碧玉の小さな剥片 1 点（第25図）が出土した。

溝 SD05 (第15・16図)

断面が極めて緩やかな U字状の溝で、北区では目立たないが、南に行くほど幅と深さが増して、上端の最大幅 1.0m、路床面からの深さ 10cm 程度を測る。上面には 5cm 前後の礫があり、礫の平坦面は上向きにそろっている。礫敷は路盤 SX03 と同じ状況を呈しており、礫は路床などからの落し物ではない。溝の埋土はクロボクで、その中にはほとんど礫が混入していなかった。

③規模ほか (第15・17図)

調査区の南の平坦地で南北方向 10.6m にわたり検出した。



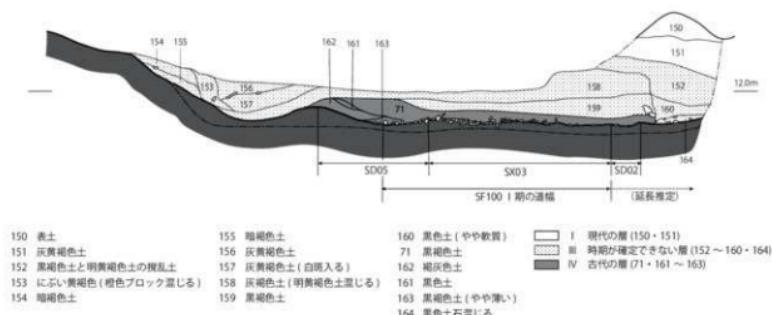
第15図 SD02・SX03・SX04平面図

第17図D-D'で、東に接する溝SD02との上下関係をみたところ、溝SD02の西の上端が路盤SX03の礫敷層の上、路床面より7cm高いレベルにあることを確認した。したがって、路盤SX03（溝SD02を含む）の東西幅^{注2}は、西辺の地山掘り下げラインから溝SD02の西辺まで続くことは確実で、東西幅2.2mを測る（第16図B-B'参照）。

ただし、南区では西側溝SD08の最大幅が1.0mとなることを考慮すると、路盤幅に対して側溝幅^{注3}が広すぎることより、本来はさらに東へ広い路盤であったことが想定される。

④ 残存状況

路盤SX03の西辺にあたる南北方向の地山の掘り込みは、北に向かって徐々に浅くなり擾乱①の手前で消滅し、礫敷は擾乱①までは続くが、擾乱①の北にはみられない。また、南では礫敷の上面が擾乱した状態がみられたほか、南半分では近世後半以降に路床の礫がほぼ失われるような削平を受けており、第16図C-C'では、地山直上層から近世の陶磁器（第27図）が出土している。



2) 古代の道路 (SF100) II期

①概要 (第12図)

波板状凹凸面を持つ路盤 SX01 と礫敷路床を持つ路盤 SX04、溝 SD02 で構成される。

路盤から 8世紀後半以降に位置づけられる土器 (第28図1) が出土しているので、8世紀後半以降に構築された道路である。

北の緩斜面部では地山を 20 ~ 30cm 挖り下げて、15cm程度土を入れて叩き締めて硬い基盤を作り、その面に土坑群を掘って波板状凹凸面を設けている。その中心となるのは長径 1.1m 前後の楕円形の浅い土坑が一定の間隔を保ちながら並ぶ連続土坑で、土坑の底には石が多数置かれ、クロボクで充填されている。連続土坑の周囲には円形や不整形な土坑もあり、底に石が置かれていないものもみられるが、埋土は全てクロボクである。

クロボクは水捌けが良いことから排水対策として利用されたと考えられるが、波板状凹凸面を設けた面の上に、さらに土を入れて叩き締めた層 (57層) があり、この層には透水性がない。上の層が何を目的として盛られたのか分からぬが、一連の路盤として造成されている。^{注4}

南の平坦地では、西側の路盤 SX03 とは明らかに異なる、礫敷路床を持つ路盤 SX04 を検出した。

地山を若干掘り下げて路床を作り、そこに礫敷を設けている。礫敷の中央付近には、特に礫の集中する範囲があり、帯状に南北へ続いている。

礫敷は明黄褐色土 (147層) で覆われており、その上面には硬化がみられた。

硬化面については、路肩にあたる部分も硬化していることから下部構造の可能性が考えられる。

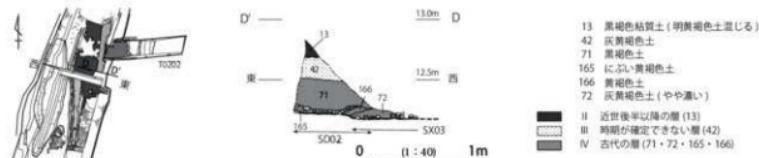
一方で、硬化面は所々で失われており、不整形な形状で礫と灰黃褐色土 (146層) とが混じて露出していたことから、この状況が道路II期の廃絶時期の状態を示すものとすれば、硬化面は道路の廃絶直前の路面と考えることもできる。

②遺構

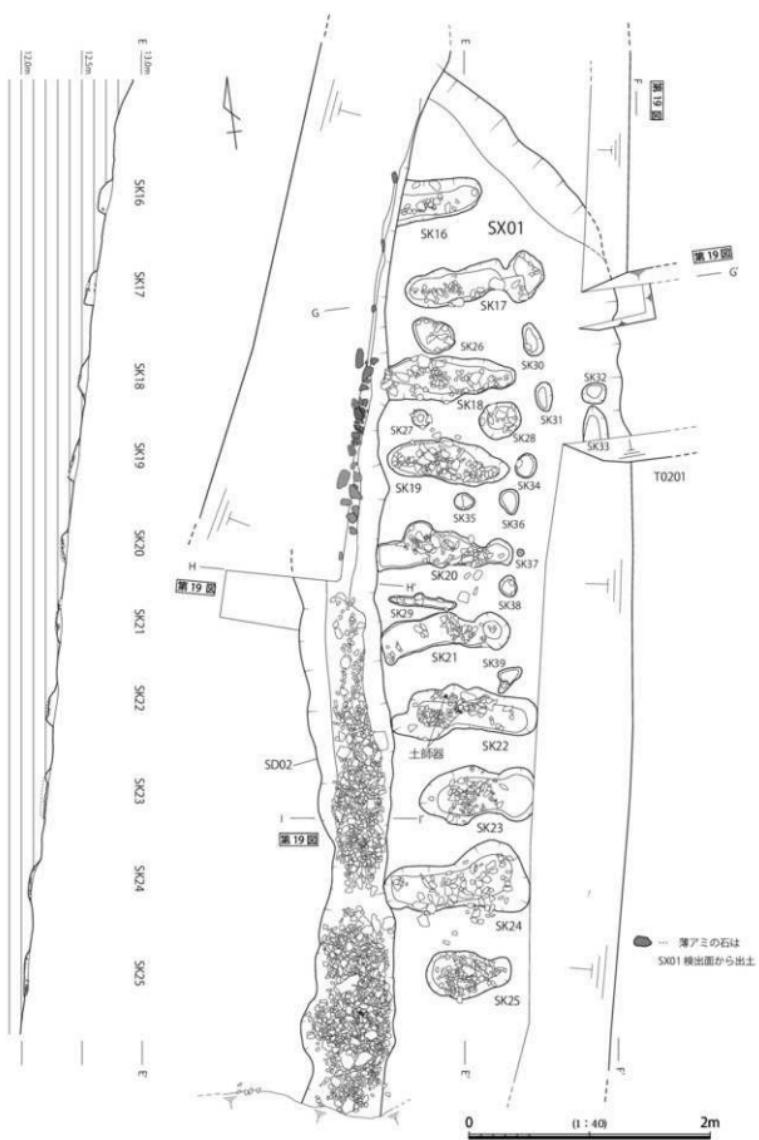
波板状凹凸面を持つ路盤 SX01 (第12・18・19・20図)

(路盤造成状況) 波板状凹凸面を持つ路盤 SX01 は、調査区北寄りの傾斜地で南北 7.8m にわたり検出した。平面で見ると、北端は南東—北西方向、東端は南北方向の直線状に地山を掘り下げて路盤を造っている。この範囲について地盤改良が必要だったのであろう。

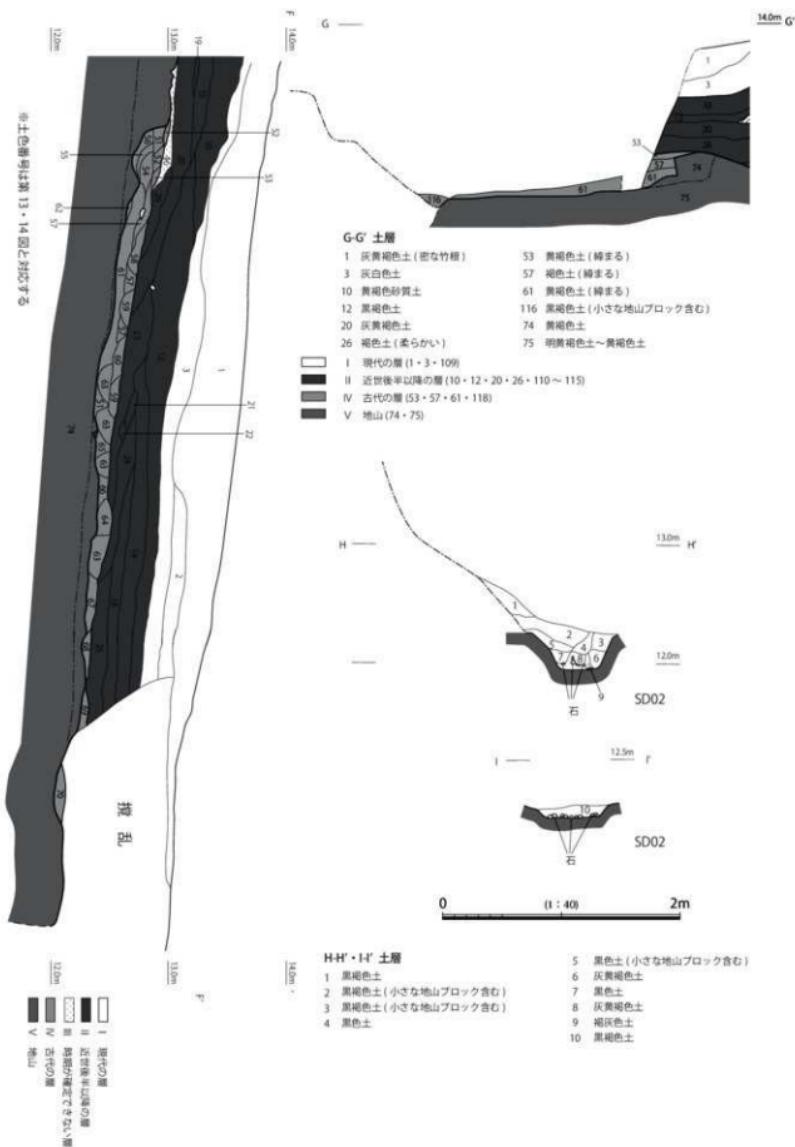
東壁土層 (第13・14図 A-A'、第19図 F-F') を観察すると、北端をやや深めに掘り下げ、その南は地山とほぼ同じ勾配で地山を 20 ~ 30cm 挖り下げて路床を造り、別の土を入れている (57・61層)。



第17図 SX03とSD02



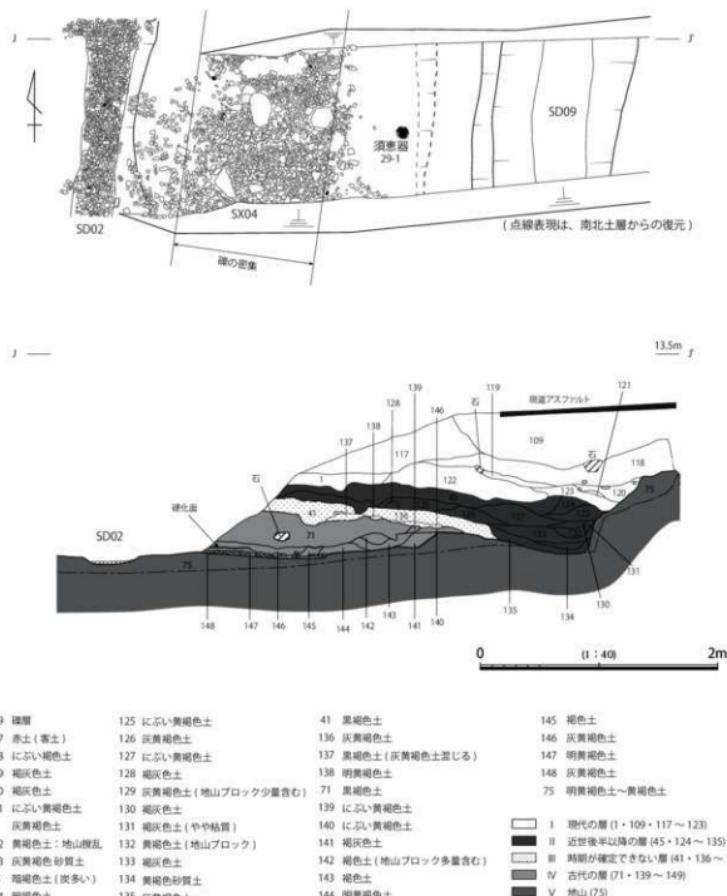
第18図 SX01平面図と縦断図



第19図 SX01・SD02 土層図

南へ下がるほど路盤層が薄くなっているのは後世の削平によるものと思われる。

路盤と直交方向の土層（第17図G-G'）を見ると、東の地山を若干オーバーハング気味に20cm程度掘り下げて路床を造り、2回に分けて土を入れており、東の地山の上に被る層（53層）もみられた。路盤造成に使用された土は上から黄褐色土（53層）、褐色土（57層）、黄褐色土（61層）で、3層ともところどころに小さな炭や焼土片、微小な土器片を含む潤りのある粘質土であった。どの層も叩き



第20図 SX04 平面・断面図

締められて硬く締まっていた。

調査時における造成土の上面は、水に濡れると非常に滑り易い状況であった。

(波板状凹凸面) 造成土上層の褐色土層(57層)上面で精査を行うと、所々に境界の不明瞭な土色の違いはみられたが、明確な土坑ラインは検出できず、黄褐色土層(61層)の上面で波板状凹凸面を構成する土坑群の明瞭な平面プランを検出した。波板状凹凸面は61層上面に造られている。

波板状凹凸面の中心は、平面プラン円形の連続土坑で、土坑10基(SK16～25)で構成されている。土坑は全て長軸が道路の方向に対して直交方向の東西にあり、芯々距離は75cm前後で、南北方向へ等間隔で並んでいる。各土坑の大きさは長径110cm、短径30cm、深さ10～15cm前後を測り、いずれも底には径8cm前後の山石が多數置かれ、土坑内はクロボク1層で充填されている。

連続土坑の周辺には平面プラン円形と不整形の土坑も散見された。平面プラン円形の土坑SK26～28は土坑底部に山石が置かれたもので、底の石の質や大きさは連続土坑でみられたものとよく似ており、埋土はクロボク1層であった。平面プラン円形と不整形の大小の土坑SK30～39は土坑の底に石が置かれていないもので、埋土はクロボクであるが、土坑によっては色の濃淡に若干の違いがみられた。

礫敷路床を持つ路盤 SX04 (第12・20図)

硬化した明黄褐色土(147層)の上面に不整形な落ち込みがあり、灰黄褐色土(146層)に混じって礫が出土したことから、当初は波板状凹凸面のように見えた。

しかし、明黄褐色土層の下には地山を4～10cm掘り下げた路床があり、そのほぼ全面に礫敷が存在した。さらに、礫敷の中央付近には東西幅1.2～1.4mの範囲に、礫が密集して帯状に南北(道路の進行方向)へ続く状況がみられた。ここでの礫敷の状況は路盤SX03と異なり、礫の大きさは5cm前後のものが多いが、角ばった大きめの礫が点在し、礫には上下の重なりが多く、分布密度に偏りがみられた。礫敷そのものを叩き締めた痕跡はみられなかった。

礫敷の礫に混じって丸味を帯びて風化した須恵器の小片が出土しているが(第28図)、大きさや摩滅の状況から、礫と同様に別の場所から運ばれてきたものと思われる。土器の出土数は少なかったが、8世紀後半以降の高台付壙(第28図1)が含まれていた。

そのほか、礫敷の東の外れからやや大き目の須恵器の破片が1点(第29図1)出土している。

溝SD02(第12・17～20図)

調査区を一直線に貫く溝で、北では波板状凹凸面を持つ路盤SX01の西側に沿い、南では礫敷路床を持つ路盤SX03とSX04の間を通る。

溝SD02は場所によって、深さや底部の石の状況に大きく異なりがみられる。



写真6 溝SD02(南から)

北から見ていくと、第18・19図H-H'では溝の断面はコの字状を呈し、上端幅60cm、下端幅20~40cm、深さ30cm前後を測る。底から5cm程度浮いたレベルに丸味のある礫が複数ならび、その上に堆積した土はクロボクで、断面には掘り直し（修復）の痕跡（8層以外）がみられた。

なお、この地点よりも北では、波板状凹凸面を持つ路盤SX01の検出面とほぼ同じレベルから角張ったやや大き目な礫が点々と出土しており（第18図のアミ掛けの礫）、これらの礫は今回の調査区の路盤や路床では出土していない質・大きさであることから、路面などからの転落物もしくは人為的に置かれた石の可能性がある。

溝SD02は南では徐々に浅くなり、第18・19図I-I'では断面が極めて浅いU字状を呈し、上端幅62cm、深さ8.8cmとなり、路盤SX03とSX04の間では上端幅35~50cm、深さ8cm程度となる。さらに中央柱の南壁では幅25cmとなり、路盤SX03の礫敷との境界が不明瞭な状況となっている。

溝の底には1~3cm前後の丸味のある礫が地山に貼り付いたような状況で出土している。礫は平坦な面が上を向いてそろい、重なりや偏りがみられず、人為的に叩き締められた状況を呈している。ここで使用された礫は、路盤SX03・SX04の路床に敷かれた礫よりも一回り小さい点に特徴がみられる。埋土はクロボク1層で、この中に礫は混じっていない。

礫敷からは須恵器の小片が出土しているが、大きさや風化の状況から、礫と同様に別の場所から運ばれてきたものと思われる。

③規模ほか

第19図H-H'を観察したところ、溝SD02より西では造成土や波板状凹凸面はみられなかった。したがって、路盤SX01の幅は溝SD02の東の上端から東辺の地山掘り下げラインの間と考えられ、その幅は最大で2.0mを測る。また、溝SD02の東辺上端から東の地山上に被った層（57層）の東端までを測ると2.1mである。

（規模）（第20図）

路盤SX04の西端を溝SD02の東辺、東端を地山が東から西へ落ち込むところ（第20図141層の東上端・第20図の点線で表現したライン）とすれば、路盤幅は2.4mとなる。

また、T0202の北・南壁をみると、141層の上端より東にも縮まった層、にぶい黄褐色土層（140層）がみられることから、道路に関連する何らかの構造がもう少し東まで存在していたと思われる。

3) 古代の道路（SF100）Ⅲ期

構築された時期は明確でないが、クロボク主体の路盤を持つ道路である。クロボクは水捌けが良く、降水時でも沈みや滑りが生じにくくことから路盤に適した土であり、古代道路Ⅰ期の路盤にも使用されている。これと近似したクロボクの広がりが古代道路Ⅱ期の上に南北方向に堆積しており道路痕跡と捉えられるが（第21図）、第1・2次調査区では明瞭な形状の遺構としては検出できていない。^{註5}

4) 近世の道路（SF101）

溝SD09と東側切通SX07で構成される、近世後半以降の道路である。

路面は残存せず、道路幅は近世の井戸 SE13 が存在することから、次の2案が考えられる。

(A案) 左側切通 SX07 から西側切通 SX08 まであったが、井戸 SE13 が掘られた頃に幅が縮小された。

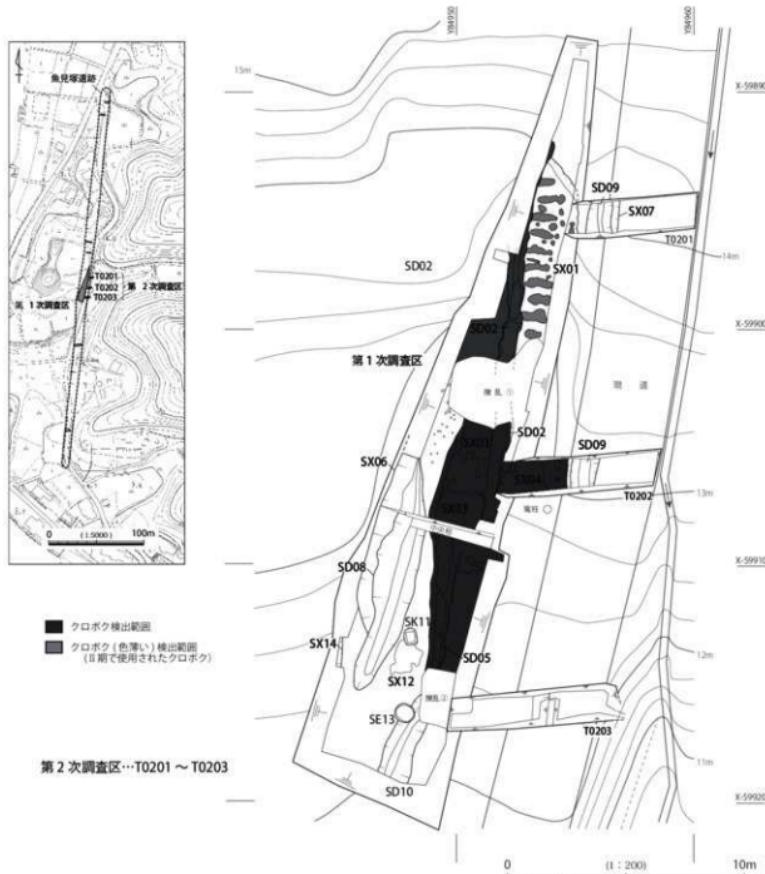
(B案) もともと左側切通 SX07 から、井戸 SE13 の間に収まる道幅であった。

以下では遺構について述べる。

①遺構

溝 SD09 (第22図)

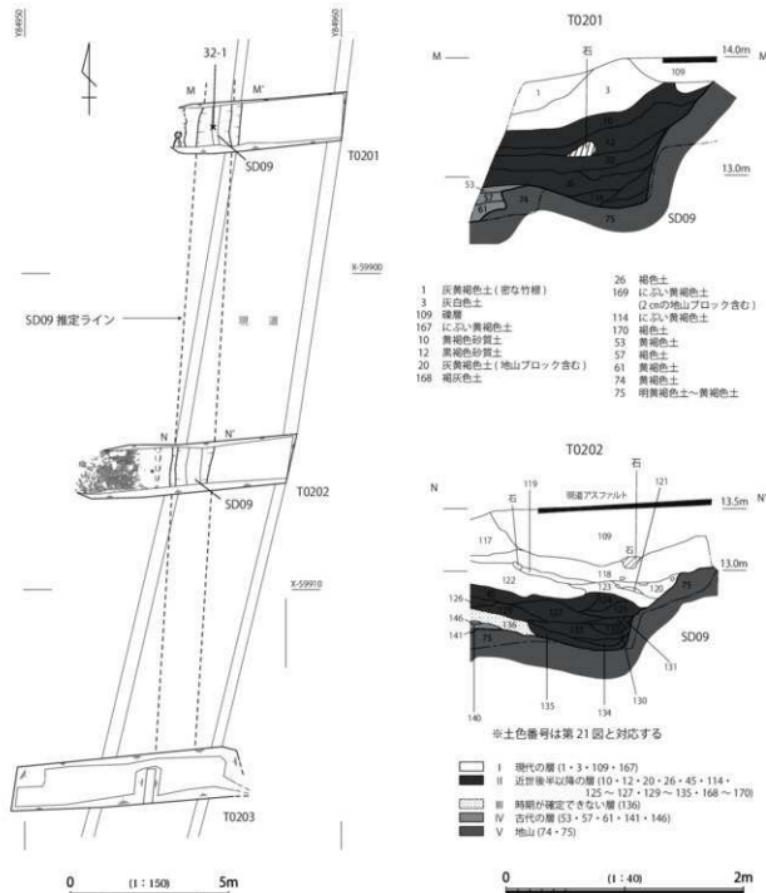
東の切通 SX06 の下端に沿う南北方向の溝で、東の立ち上がりは地山の切通 SX07 である。



第21図 クロボク層検出範囲

T0201の断面M-M'を見ると、溝SD09の断面は切通側が最も深く、路盤に向かって徐々に浅くなり、東西幅90cm、深さ18cmを測る。埋土は軟らかくて締まりが無い。T0202の断面N-N'でもM-M'と近似した溝断面の形状と埋土がみられたことから、溝SD09はT0201からT0202に統く一連の溝と判断する。T0203では攪乱のため延長部は検出できなかった。

出土遺物（第32図1）から、埋没時期は近世後半以降と判断する。



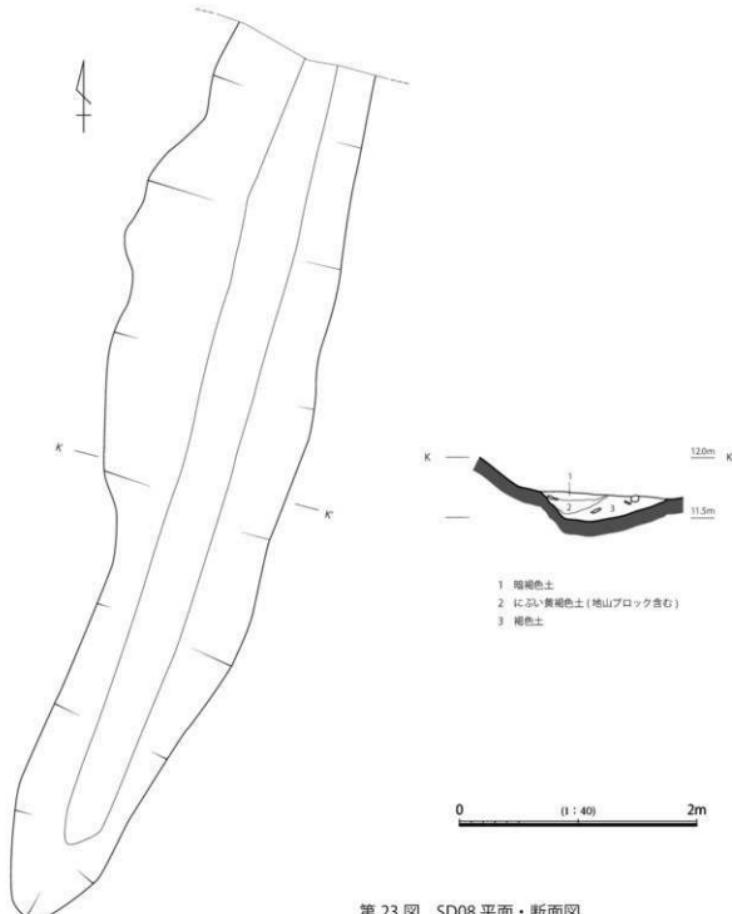
第22図 SD09 平面・断面図

②東側切通 SX07 (第12図)

近世の溝SD09の東側立ち上がりが切通となっているが、T0201で検出した切通SX07の上部は角度が変化して緩やかな傾斜になることから、古代の切通が残存している可能性がある。今回の調査では明瞭な検出となっていないが、今後の調査に向けて名称設定を行う。

5) 西側切通 SX06 (第12図)

深さ0.53m前後の地山切通で、検出長は南北6.2mを測る。



第23図 SD08 平面・断面図

北区の南北2.5mでは表面が滑らかに仕上げられているが、南区の南北3.7mでは表面の凹凸が著しく、雑な仕上がりとなっている。時期は不明である。

6) 溝 SD08(第23図)

西の地山切通の下端に沿う溝で、検出長は南北7.6mを測る。

最大幅1.7m、最深24cmであるが、南北両端に向かっては細く浅くなる。断面はU字状を呈し、西側の立ち上がりは北側約半分で地山切通と重なり、南端は平坦地の溝となり消滅している。中央畦の南側では疊敷路床を持つ路盤SX03の西側の地山掘り込みラインと接しているが、南へ行くほど路盤SX03の基軸と離れて西へ向かう。埋土には若干の礫を含み、遺物は須恵器だけで陶磁器が出土していないことから、古代の道路に関連する遺構の可能性がある。

(2) 道路に関連する可能性がある遺構

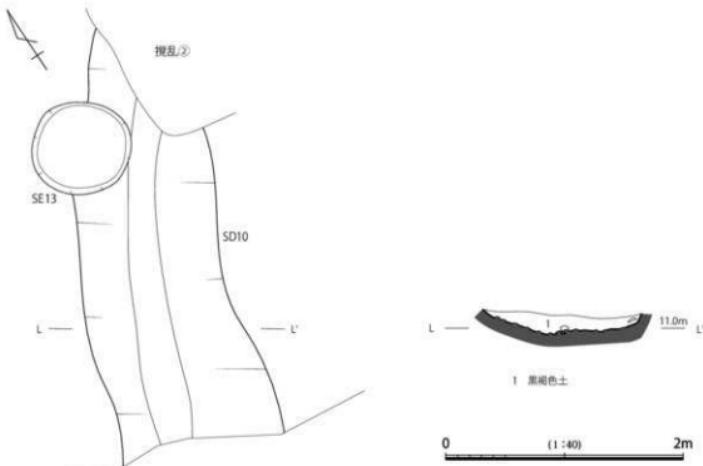
明確に道路遺構とは言えないが、溝SD10は南北方向を志向する点で道路遺構の可能性が残る。

1) 溝 SD10(第24図)

調査区南端で検出した溝で、北は搅乱②に切られ、南は調査区外に続く。検出長は南北3.6mを測る。

上端幅1.0m～1.3m、深さは第24図L-L'で12.2cm、調査区南壁で24.3cmを測り、東ほど深い。断面は浅いU字状を呈し、溝の表面には地山に含まれた小礫の露頭が著しい。埋土は黒褐色土だが、含水率が高くて軟らかい。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。



第24図 SD10 遺構図

5. 遺物

(1) 碓敷路床を持つ路盤 SX03 出土遺物 (第 25 ~ 27 図)

クロボクの土層から碧玉の剥片 1 点が出土している。

路床の礫敷からは須恵器破片 25 点、土師器破片 1 点が出土し、9 点が図化できた。須恵器は破片が小さく甕の胴部破片が多いため時期判別が困難であるが、壺蓋 1 点と壺口縁部 1 点は 7 世紀末頃の特徴を備えている。壺はすべて無高台で、底部切り離しが静止糸切と推定される個体がある。

南区の路床が削平を受けた場所では、近世後半以降の陶磁器 (第 27 図) が出土している。

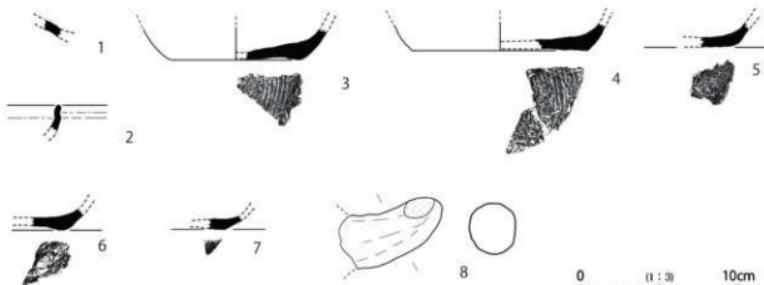
第 25 図 1 は碧玉の剥片である。縦 1.9cm、横 1.6cm、厚さ 1.2cm、重量 3.6g。

第 26 図 1 ~ 7 は須恵器である。1 は壺蓋で、端部手前の上面に押さえの回転ナデがめぐらされており、かえりの付くものと思われる。2 は無高台の壺の口縁部で、口縁部先端が明瞭に外側に折れる。3 ~ 7 は無高台の壺の底部で、3・4 の底部切り離しは静止糸切の可能性がある。3 は底径 8.0cm、4 は底径 11.0cm。8 は土師器の瓶または移動式カマドの把手部分である。

第 27 図 1 ~ 3 は陶器で、1・2 は布志名焼の擂鉢で、濃褐色の釉が掛かる。1 の口縁端部は玉縁である。3 は石見焼の碗と思われ、内面は褐色の釉が掛かり、外面は露胎である。底径 6.3cm。4 は瀬戸系磁器の新製焼碗で、外面は風景文、内面は圈線 1 本の下に 3 本の太い線がめぐる。口径 9.4cm。



第 25 図 SX03 の路盤層出土遺物



第 26 図 SX03 の礫敷路床出土遺物

(2) 碓敷路床を持つ路盤 SX04 出土遺物(第28・29図)

路床の礫敷から須恵器片が5点出土し、2点が図化できた。これらのうち、高台付环が「出雲IV期」以降にあたり、8世紀半ば以降に比定される。最も古い遺物としては7世紀前半以前に下る方形透かしを持つ高环片が出土している。

また、礫敷から東に外れた地点で無高台の环底部の比較的大きな破片が1点出土している。底部の切り離しは回転糸切で、詳細な時期は分からず。

第28図は須恵器で、1は高台付环の底部である。高台は低く、断面はコの字状を呈しており、器壁はやや丸みを帯びて斜めに立ち上っている。2は甌または小型の壺の破片と思われる。

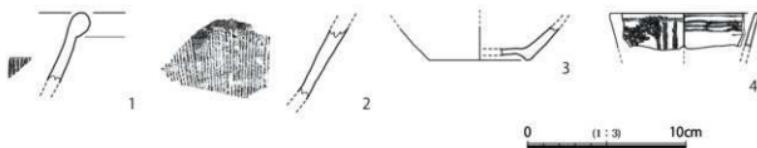
第29図1は須恵器の無高台の环の底部付近である。底部切り離しは回転糸切で、器壁は丸味を帯びて立ち上がり、口縁は広がる。底径7.0cm。

(3) 溝SD02 出土遺物(第30図)

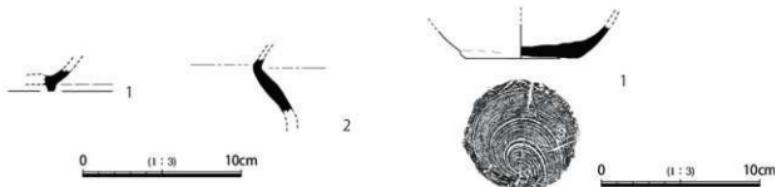
底の礫に混じって須恵器片8点が出土し、3点が図化できた。

第30図は須恵器で、1は無高台环である。底部切り離しは回転糸切、器壁はやや丸味を帯びて立ち上り、口縁は開く。底径6.6cm。2は無高台环で、底部切り離しは回転糸切、器壁は丸味を帯びて立ち上る。3は甌の口縁端部で、外面に波状文が施されている。

1・2は小さな底部の破片で時期判別は困難である。



第27図 SX03南区出土遺物



第28図 SX04の礫敷路床出土遺物

第29図 SX04の東側出土遺物

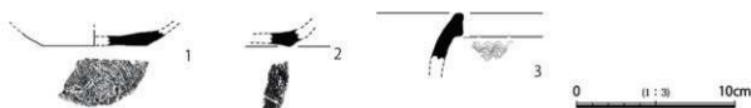
(4) 溝 SD08 出土遺物 (第31図)

3点の須恵器が出土し、2点が図化できた。

第31図は須恵器である。1は壺で、底の切り離しは糸切、2は壺の頸部である。時期は不明である。

(5) 溝 SD09 出土遺物 (第32図)

第32図1は陶器の壺類の破片である。外面は透明釉の上に薄い水色の釉が垂れ、内面は無釉である。産地は不明、近世後半以降のものと思われる。



第30図 SD02 出土遺物



第31図 SD08 出土遺物



第32図 SD09 出土遺物

6. 小結

現道の西に位置する、第1・2次調査区では道路遺構を検出した。

道路遺構の変遷を追うと、古代の道路SF100と近世の道路SF101に大別でき、古代の道路には3時期（I～III期）あることを確認した。

以下では時代ごとに道路遺構について説明を行う。

（1）古代の道路 SF100

① I期（第33・34図）

時期 7世紀末から8世紀中頃の道路である。

構造 西側溝SD05と礫敷路床を持つ路盤SX03で構成される。

東側溝は見つかっておらず、現時点では片側溝の道路とみておく。^{註6}

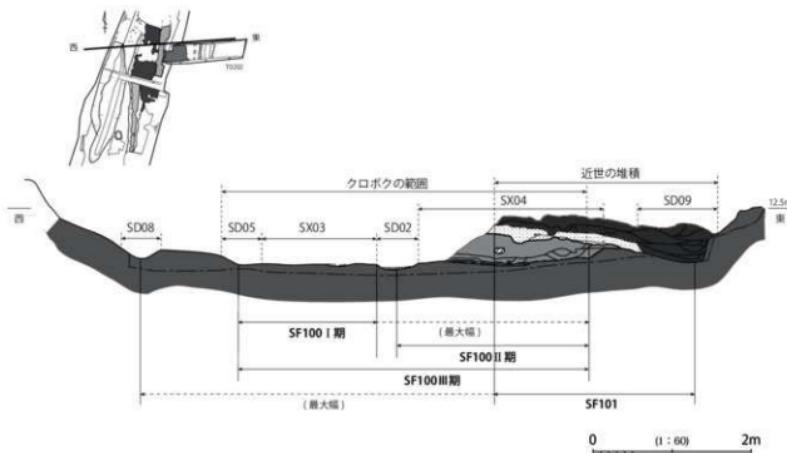
規模 II期の道路上に壊されて不明だが、西側溝の溝心から路盤にかけて幅1.9mが残存する。

しかし、西側溝SD05の最大幅が1.0mであることを考慮すると、本来の路盤幅はもっと広かったと考える方が自然であり、床の標高とほぼ同じ高さの地山が続く、路盤SX04の東まで道幅が広がる可能性がある。その場合、道路の推定最大幅は4.3m（西側溝SD05中心—路盤SX04東端）となる。

路盤 路面は見つかっていない。

路床全面に小礫が敷かれて叩き締められており、その上にクロボクがのる。路床の深さは北へ行くほど浅くなって消滅し、礫敷はその少し先まで続くが、現代の搅乱①を挟んで北には続いていない。

側溝 路盤SX03の北端付近では顕著でないが、南へ行くにつれて幅と深さが明確になり、最大幅1.0m、路床面からの深さ10cmを測る。底部には路床と同様の礫敷がみられる。



第33図 切通間の横断に見る道路遺構

②II期(第33・34図)

時期 8世紀後半以降の道路である。

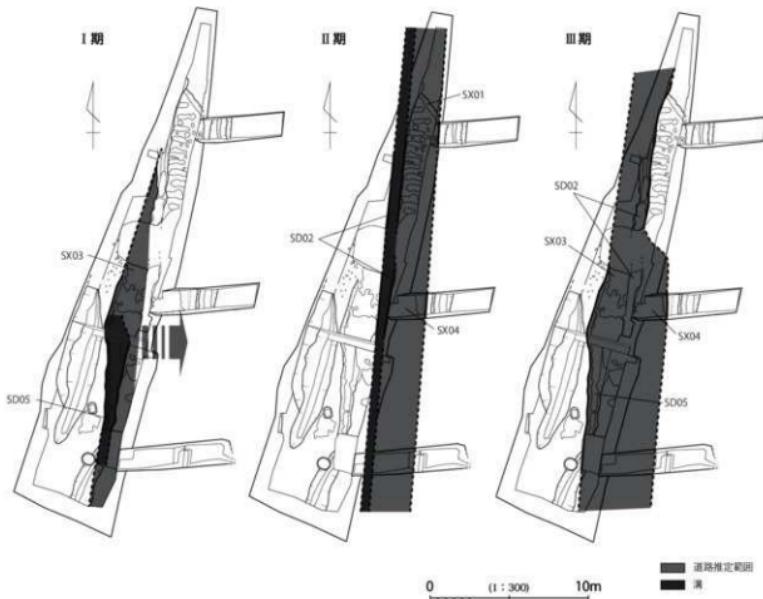
構造 西側溝が溝SD02で、北の路盤SX01と南の路盤SX04が一連の路盤となる。東側溝は検出されず、片側側溝の道路である。

規模 西側溝SD02の溝心から路盤SX01と路盤SX04の東端までの道路幅は2.5mである。

路盤 北の傾斜地は路盤SX01で、平面楕円形の連続土坑を中心とする波板状凹凸面を持つ。これに対し、南の平坦地では路盤の形態が変わり、路盤SX04になる。路盤SX04は、路床のほぼ中央に道路方向に沿った帯状の密な礫敷があり、礫敷の覆土の表面に硬化がみられる。路肩部分が硬化していたことから人為的に叩き締められた地下構造と考えられるが、廃絶期の路面の可能性も残る。

道路の南北で路盤の形態が異なるのは、地形に応じて路盤構造の選定がおこなわれた結果と思われる。第45図で、地山の傾斜と路盤形態の違いを示している。

側溝 西の側溝SD02は極めて直進性が強い。路盤SX01の西では深さ30cmであるが、路盤SX04の西では深さ8cmとなり、小さめの礫が均一に入れられて人為的に叩き締められている。



第34図 古代の道路SF100の変遷

(3)Ⅲ期(第33・34図)

時期 明確でないが、新しい要素が見いだせないことから古代としておく。

構造 クロボクは水捌けの良い性質を持つことから、Ⅰ期と同様、路盤の一部に使用されたと考えられる。

規模 最大幅4.5mである。

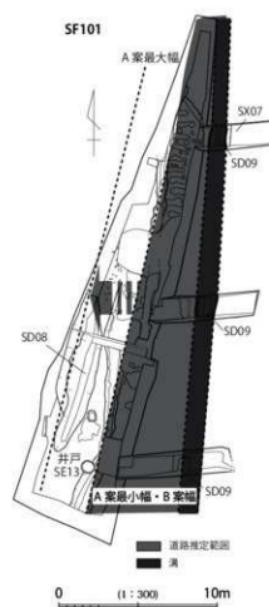
路盤・側溝 前代の道路遺構の上層にあるクロボク層が路盤を形成していたと考えられる。しかし、本調査区では明確な形状を保った遺構としては残っていない。

(2)中世の道路

中世の道路遺構は検出しておらず、遺物も出土していない。古代の遺構を近世の遺構が大きく壊している状況であるため、存在していたとしても検証できない状況である。

(3)近世の道路SF101(第33・35図)

道路と推定される場所のほぼ中央に、井戸SE13や土錘を伴う集石遺構が存在すること、溝SD09と溝SD08の埋土が異なることから、道路について2案(A・B案)が考えられる。



第35図 近世の道路SF101

(A案) 敷設当初は広かった道路が、井戸SE13設置前に狭い道路に改修された場合。

(B案) 敷設当初から道路幅は井戸SE13より東で収束していた場合。

時期 敷設時期は不明だが、近世後半以降頃までの近世道路が想定される。

構造 (A案) 当初の広い道路は東側溝を溝SD09、西側溝を溝SD08の両側側溝の道路となる。道幅が狭められた後の西側溝の有無は不明である。

(B案) 東側溝は溝SD09で、西側溝の有無は不明である。

規模 (A案) 当初の道路幅は7.0mで、その後は溝SD09から井戸SE13の東端までの間に道路があったと考えられ、最大幅で6.4mである。

(B案) 最大幅6.4mである。

路盤 不明である。

側溝 (A案) 東側溝SD09が東側溝で、幅90cm、深さ18cm、西側溝は溝SD08で幅1.7m、深さ24cmで、ともに切通を兼ねている。道幅の縮小後は東側溝が溝SD09で、西側溝の有無は不明である。

(B案) 東側溝が溝SD09で、西側溝の有無は不明である。

第3節 第3次調査

1. 調査区の設定（第36図）



第36図 第3次調査区

第1・2次調査で検出した道路遺構の連続性を確認するため、道路推定ラインを南北に延長して、東西5m×南北1mのトレンチ調査区3ヵ所(T0304～T0306)を設定した。

T0304は第1次調査区とは谷を挟んで位置する畠地に設定した。この畠地は南北方向に細長い区画の平坦な地形で、道路痕跡のようにも見える。東の切り立った崖上の平坦面には朝釣橋ノ谷遺跡があり、8世紀初頭頃の掘立柱建物跡が検出されている。

T0305は第1・2次調査区と同じ丘陵の頂部平坦地、T0306は同丘陵を北に向けて下がる緩斜面に設定した。

調査区は遺構の検出状況により適宜拡幅を行っている。

調査面積は、T0304が6.92m²、T0305が4.75m²、T0306が6.75m²で、合計18.42m²である。

2. 調査成果

(1) T0304(第37図)

調査区東側では地表下15cmの標高11.4mで地山を検出した。地山面は北西に向けて下がり、調査区西端では標高10.6mであった。地山面で落ち込みSX20・21を検出したが、性格は不明である。この地山の上にある6～10層は、ブロック状に検出される層を含み、非常に硬く締まっていることから、旧地形を埋め立てて道路を構築した層と考えられた。

そうであれば、6層の上面が水平に近く、わずかながら礫の散布が認められたことから、6層の上面が路面で、6層以下が造成土と考えられる。

東側の側溝は検出できなかった。また、西では路肩が確認できなかったため、ここでの道路幅はさらに西に広がる可能性がある。

そのほかの遺構として、土坑SK20を検出した。6層から掘り込まれており、北壁での幅80cm、深さ54cmを測る。

遺物

4層から土製支脚と須恵器の破片が出土した。時期は不明である。

(2) T0305(第38図)

地表面下0.6mにある、標高13.8mの地山面で道路遺構を検出した。

道路は切土工法で造られており、路面は残存しないが、下部構造が残る。

調査区の西にある2段階の掘り込み SX23・25と東にある掘り込み SX24で構成される、東西断面が緩やかなU字状を呈する落ち込みが道路の横断である。東西幅4.5m、深さ0.6mを測る。道路の底には礫の散乱がみられ、溝SD26と、落ち込みSX27を検出した。溝SD26から落ち込みSX27にかけての東西幅1.8mが路床にあたると思われる。

溝SD26は東西幅20cm前後で、南北方向に約70cm検出した。浸食の跡と思われるが、底部には少量の礫が散布している。落ち込みSX27は断面が極めて浅いU字状を呈し、底には礫の集中がみられ、東西幅0.9mで南北方向へ帯状に続いている。礫の大きさは5~7cm程度で、他の調査区の路床でみられた石より大きめの石が多く、散在的である。

なお、礫を含む暗褐色土(16層)は弓なりの層により自然堆積で埋没しており、この後に道路の補修が行われた痕跡はみられない。

遺物

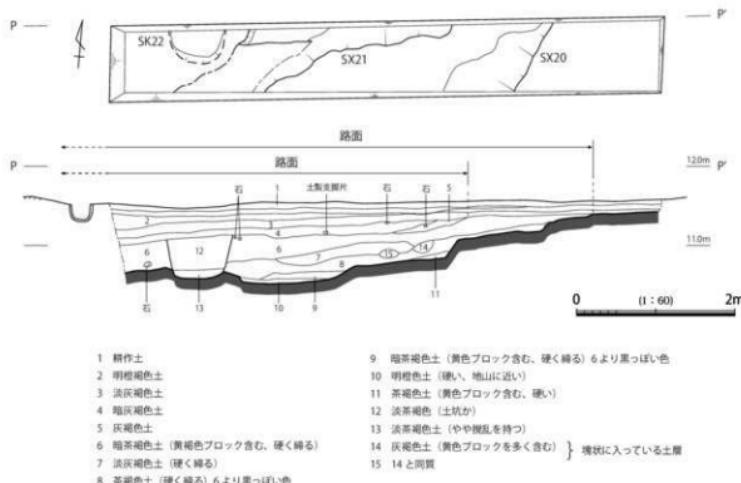
路床の礫に混じって土師器と須恵器の破片が出土した。時期は不明である。

(3) T0306(第39図)

地表面下0.6mにある、標高12.2mの地山面で道路遺構を検出した。

道路は切土工法で造られており、路面は残存しないが、下部構造が残る。

調査区の中央には、西から東に下がる南北方向の地山の掘り込みSX29があり、その深さは20cm



第37図 T0304 平面・断面図

を測る。この下端から東約0.5mには、溝SD31と東西幅80cmの礫敷SX30が隣接しており、両遺構とも南北方向に続いている。溝SD31は東西幅40cm、深さ3cm程度と極めて浅く、底面には礫が散布している。礫敷SX30は東西幅1.1mで、4~6cm程度の礫の平坦な面が上向きにそろっており、人為的に叩き締められた状況を呈している。礫敷の東端には地山に含まれる大形の塊石が含まれており、塊石の露頭がそのまま利用されたと考えられる。

掘り込みSX29の下端からSX30の東辺の幅2.3mが路床面と捉えられる。

さらにその東側では、石を含む土坑SK32、33を検出している。北へ下がる傾斜地であることから、波板状凹凸面を構成する土坑の可能性があり、層位的にみると礫敷路床SX30より新しいか同時期に造られたものである。

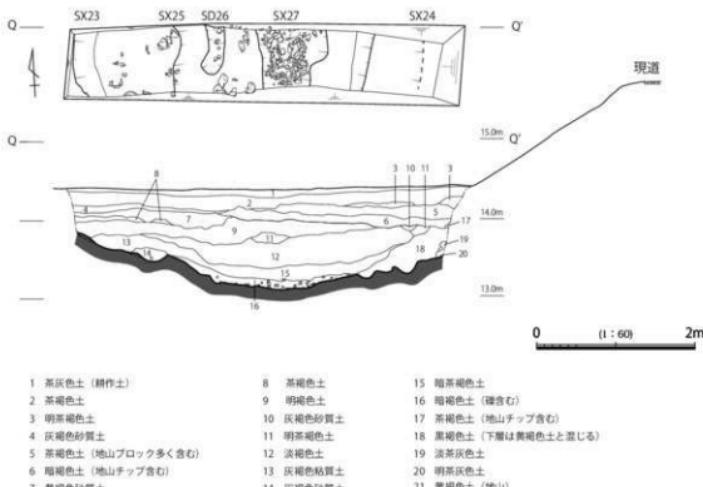
7・10層は第1次調査区のクロボクと近似した層で、対応するものと思われる。

また、調査区の東西には、標高12.2mの平坦な地山面があり、別の道路遺構が存在していた可能性が指摘される。

なお、ここでは礫敷路床SX30の上にあるクロボクの土層(7・10層)が、ややいびつではあるが断面台形状に高く残存している。第1・2次調査区で分類した、古代の道路(SF100)のⅢ期にあたる可能性がある。クロボク層は幅4m程度で年々に続いている。

遺物

路床の礫に混じって須恵器の甕片などが出土した。時期は不明である。



第38図 T0305 平面・断面図

3. 小結

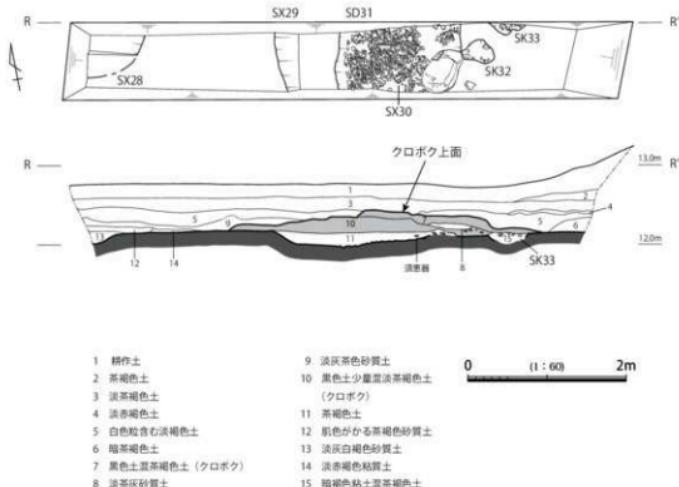
第3次調査の結果、全ての調査区で古代の道路遺構を検出した。

この内、T0304では丘陵に平行して走る、盛土工法で造られた道路遺構を検出した。また、T0305とT0306は丘陵を横断する場所にあり、第1・2次調査区とよく似た切土工法で造られた道路遺構を検出し、礫敷路床のほか、波板状凹凸面を構成する可能性のある落ち込み2ヵ所を検出した。

第3次調査の大きな成果は、第1・2次調査区を挟んで南北に設定した道路推定ルート上で道路の延長部を確認することができたことである。図面上で復元すると、道路は水平距離で南北長110mを測り、直進性が認められる。そして、両端の調査区ではさらに南北へ続く様子を確認した(第40図)。

地形に応じて盛土工法と切土工法を使い分け、大規模な土木工事をおこなって造られていること、110mの長さにわたり直線の道路を通していることは、古代の官道の特徴といえよう。

また、T0305とT0306では古代道路を構成していたと考えられる礫敷やクロボクが、自然堆積を示す水平な堆積層によって埋没しており、その後の補修の痕跡は認められなかった。道路の維持管理が終焉したことを示すものである。



第39図 T0306 平面・断面図

第4節 第4次調査

1. 調査区の設定（第40図）

第1～3次調査で検出した道路遺構のルートは現道とほぼ重複しており、道路整備が計画されている場所とも一部の区間で重複していることが分かった。そこで、地下の遺構が道路整備工事の影響を受けないよう配慮するため、道路推定ルート上で地山を削る可能性がある場所について、東西5m×南北1.5mの調査区3ヵ所（T0407～9）を設定し、道路遺構の状況を調査することとした。

調査面積は、T0407が7.41m²、T0408が7.61m²、T0409が5.64m²で、合計20.67m²である。

2. 調査の成果

（1）T0407（第41図）

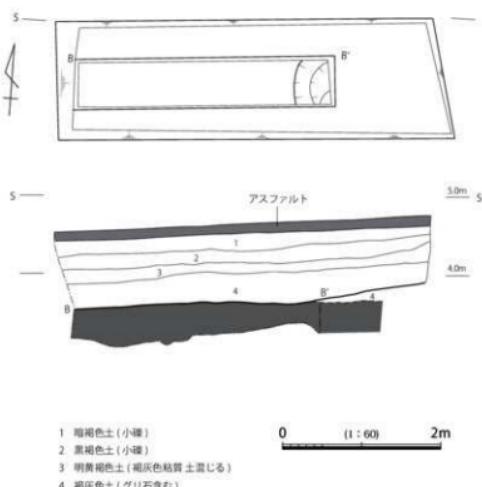
現道の路盤直下が地山で、地山の上面が平坦であることから、現道建設の際に削平を受けている。遺構は検出されず、遺物は出土していない。この調査区の東には小高い地形が南北方向に続いており、本調査区の本来の地山の高さはその標高に準じるものであったと考えられる。

（2）T0408（第42図）

表土直下が平坦な地山で、水道管等の検出から、宅地造成のために地山が削平されたと思われる。遺構は検出されず、遺物は出土していない。



第40図 第4次調査区



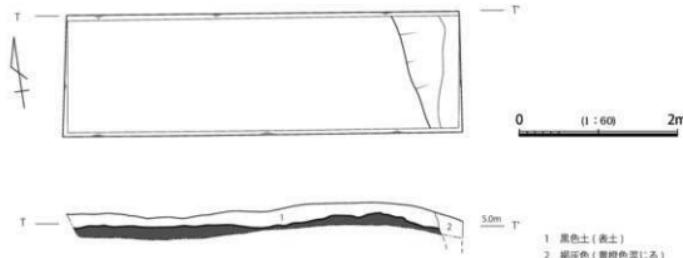
第41図 T0407 平面・断面図

(3) T0409 (第43図)

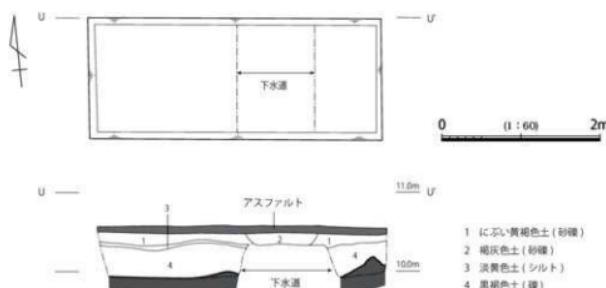
現道の路盤直下が地山で、地山は若干西方に下がっているが、上面がほぼ平坦であることから、現道建設の際に削平を受けたと思われる。遺構は検出されず、遺物は出土していない。

3. 小結

道路推定ルート上の3カ所で調査を実施したが、全ての調査区で地山が削平されており、道路遺構を検出することはできなかった。したがって、このルート上に道路が存在していたとしても、現在では検証できないこと状況であった。



第42図 T0408 平面・断面図



第43図 T0409 平面・断面図

第5節 総括

魚見塚遺跡では現道の西に設定した調査区で道路遺構を検出し、古代から現代にいたるまでの道路の存在を確認した。このうち、古代の道路を図面上で復元すると長さ 110m および、両端ではさらに南北へ続く状況がうかがえた（第 45 図）。

1. 道路遺構の変遷

(1) 古墳時代以前

第 1・2 次調査区と同じ丘陵上に魚見塚古墳が築造されており、道路が存在した可能性は高いが、今回の調査では見つからなかった。その他の遺構も検出されなかった。

(2) 古代

道路 SF100 が敷設されており、I～III期の三時期に分けることができる（第 34 図参照）。

I期 7世紀末～8世紀中頃

現時点では西側溝 SD05 だけが確認される片側側溝の道路である。路盤 SX03 の東を II 期の道路に壊されており、残存幅は 1.9m 程度である。その内、西側溝が幅 1.0m を占めていることから、本来はもっと広い道路であったことが想定され、最大幅 4.8m を復元することができる。

II期 8世紀後半以降

西側溝 SD02 と路盤 SX01・04 で構成される片側側溝の道路で、道路幅は 2.5m である。

北の傾斜地では波板状凹凸面を持つ路盤 SX01、南の平坦地では礫敷路床を持つ路盤 SX04 と、地形により異なる基礎工事が行われている。

道路幅は I 期の道路最大推定幅と比較すると大幅に縮小されている。8 世紀後半～9 世紀初頭に道路が縮小することは他の七道駅路と共にことで、隠岐国への交通もこの段階で再編された可能性が高いことを示唆するものである。

III期 敷設時期は不明である。第 1 次調査区と T0202、T0306 で検出した、古代 II 期の上のクロボク層が路盤の一部を構成していたと考えられ、幅 4m 前後を測る。遺物に新しい要素がみられないことから、古代のうちに廃絶したとみておく。

(3) 中世

中世の道路遺構は検出されず、遺物も出土していない。和久羅山城に近く、近世にも道路はあったことから、中世に道路が通っていた可能性は高いと思われるが、今回の調査では見つからなかった。

(4) 近世後半以降

井戸 SE13 など近世の遺構の存在から、道路 SF101 については A 案と B 案が考えられる。

A 案 当初は溝 SD09 と溝 SD08 の両側側溝を持つ道路幅 7.0m であったものが、西側溝の有無が不

明な最大幅6.4mの道路に改修されている。

B案 当初から、東側溝が溝SD09で西側溝の有無が不明な最大幅6.4mの道路である。

なお、現在も近世の道路を踏襲して、その東寄りに幅3.6mのアスファルト舗装された道路が通っている。

2. 地形と道路構築方法及び構造の関係

(1) 地形による構築方法の違い

道路遺構は地形に応じて構築方法に違いがみられ、丘陵に平行した場所(T0304)では盛土法、丘陵を横切る場所(T0304以外の調査区)では切土工法がとられている。これにより、道路の極端なアップダウンを緩和し、直進性を保ったと思われる。

(2) 地形による道路構造の違い

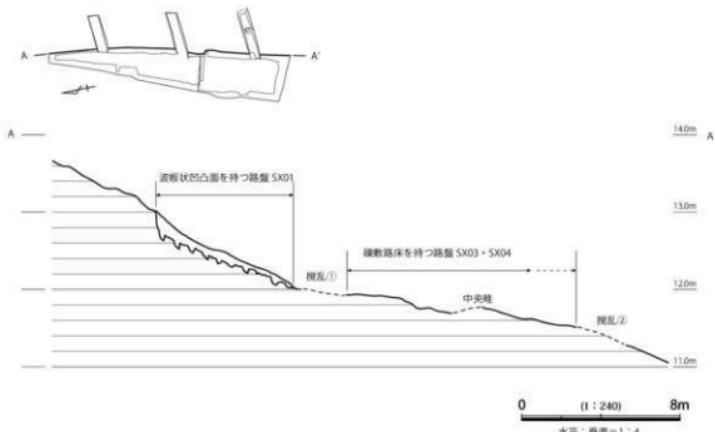
丘陵を横切る1本の道路であっても、地形の勾配により道路構造の違いがみられる。

SF100のⅡ期では、比較的平坦なところでは礫敷路床の上に土を被せて叩き締めた路盤SX04、傾斜のあるところでは波板状凹凸面を持つ路盤SX01が造られている(第45図)。

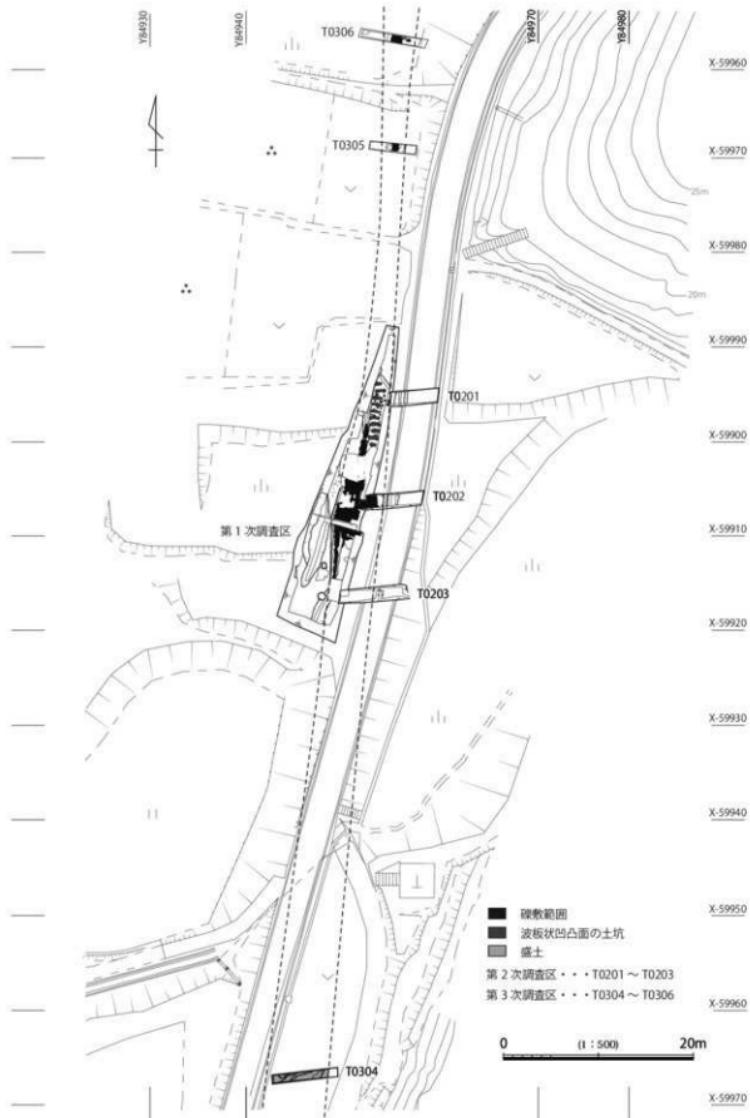
3. 道路遺構の特徴

古代の道路遺構のうち、実態が把握できるSF100Ⅰ期とⅡ期について特徴をあげると次のとおりである。

1. 切土など、大規模な土木工事によって造られている。



第44図 地形と路盤の形態



第45図 古代道路の復元

2. 片側に側溝を備えている。
3. 地形に応じて下のように、異なる地下構造を持つ。
 - ①傾斜地 波板状凹凸面を持つ路盤 SX01
 - ②平坦地 碓敷路床を持つ路盤 SX03・04
4. 路盤の造りが丁寧でしっかりしている。
 - ①波板状凹凸面を持つ路盤 SX01

地山を掘り下げて別の土を入れ、その上に波板状凹凸面を設け、さらに土を入れている。
 - ②碓敷路床を持つ路盤 SX03

地山を掘り下げて礫を敷き、その上から叩き締めている。
 - ③碓敷路床を持つ路盤 SX04

地山を掘り下げて帯状に礫を敷き、その上に土を被せて叩き締めている。
5. 直進性がみられる。
6. 古代道路Ⅰ期の構築時期は、路盤から出土した須恵器より、7世紀末である。
7. 古代道路Ⅱ期の路盤から出土した須恵器から、8世紀後半に道路が大きく改修され、それ以降もクロボクを路盤とした改修があり、長期にわたって維持管理が行われている。

4. 道路の性格

上記したとおり、道路SF100は7世紀末に敷設された、強く直線を志向する道路である。大規模かつ丁寧な土木工事によって造られており、長期間にわたり維持管理が行われていることから、古代の官道と考えられる。

さらに、歴史地理学的研究の成果とも整合することから、『出雲国風土記』に記載された“枉北道”の一部と考える。

5. 結語

今回の調査では、『出雲国風土記』に記載された“枉北道”的有力な推定ルート上で、考古学の手法のもとで“枉北道”を初めて遺構として捉えることができた。

枉北道は検出できた限りでは、片側だけに溝を備える道路であった。道幅は最大で4.5mと推定され、8世紀後半には幅2.5mに縮小され、その後4.5m幅に改修されている。正西道（山陰道）と比較すると道路幅はかなり狭いようだが、^{註10}今回の道路検出範囲は丘陵を横切る道が中心であり、地形の制約を受けている可能性も考えられよう。

隱岐国に渡る千酌駅家へ向かう道路の実態が、一部ではあるが解明できたことは大きな成果である。また、枉北道の沿線には朝酌菖蒲谷遺跡、朝酌橋ノ谷遺跡、キコロジ遺跡といった8～9世紀の遺跡があり、朝酌渡が置かれた大橋川にも近く、『出雲国風土記』島根郡の朝酌促戸条に記された光景を彷彿とさせる状況がみられる。“枉北道”的位置が明確になったことを端緒として、今後さらに奈良時代の朝酌郷の景観が具体的に復元されることを期待したい。

【第3章 註】

1. 近江俊秀氏から、このような礎敷の類例が奈良県御所氏鴨神遺跡にあるとご教示をいただいた。鴨神遺跡の礎敷について「石の平坦な面がそろっており人為的に叩き締められた状況を呈している」、「バラスが地山の凹凸に合わせ貼られている」と報告されており、その状況から地下構造の路床である要素が強いと結ばれている（近江 1994）。近似した状況と考えるが、鴨神遺跡は古墳時代中期の道路であり、古代ではこのような類例は報告されていない。
2. 溝 SD08 は場所によって幅と深さが大きく異なり、路盤 SX03 の幅が分かるところでは溝 SD08 との境界が明瞭でないため、溝幅を含めた路盤幅を提示している。
3. 路盤 SX03 と路盤 SX04 の路床標高がほぼ同じであることから、路盤 SX03 の東西幅は最大で路盤 SX04 の東端まであつた可能性が考えられる。
4. 近江氏は波板状凹凸面と硬化面との関係について、波板状凹凸面が硬化している場合（I類）が圧倒的に多いが、波板状凹凸面の上の堆積土層が硬化している場合（II類）も少ないが確認されているとし、II類の例として神奈川県津久井町の南金原下遺跡あげている（近江 1995）。
5. 第3次調査のT0306では、クロボクが地山面から断面台形状に盛り上がる状況で検出されている。地形が若干異なるが、第1・2次調査区でもこれに準じたような路盤が造成されていたと考えられる。
6. 道路 SF101 のⅠ期では、側溝 SD05 が中央畠付近から南で幅・深さとともに明瞭になるのだが、今回の調査ではこれに対応する東端を掘削していないため、両側側溝の可能性も残る。
7. 波板状凹凸面と地形との関係をみると、平坦地で比較的安定した地盤（I類）、平坦地ではあるが湿地など地盤の緩い部分（II類）、丘陵部分など緩やかに傾斜する場所（III類）、山道や峠など比較的傾斜のきつい場所（IV類）のいずれの道路でも認められているが、緩やかに傾斜するIII類の道路に伴うものが最も多いとされる（近江 1995）。
8. 中央集権国家が造った前期駿路に対し、後期駿路が8世紀終わりから9世紀初めの間に造られ、路線の変更や規模の縮小が行われたと考えられている（近江 2006）。
9. 註7に同じ。
10. 出雲市杉沢遺跡で検出された山陰道は両側側溝を持ち、道路幅は9mを測る。

【参考文献】

- 出雲市教育委員会 2017『出雲国古代山陰道発掘調査報告書－出雲市三井Ⅱ・長原遺跡の調査－』
 近江俊秀 2006『古代国家と道路』青木書店
 近江俊秀 1994「鴨上遺跡検出の道路状遺構」『古代交通研究』八木書店
 近江俊秀 1995「道路遺構の構造－波板状凹凸面を中心として－」『古代文化』4財團法人古代学協会

第4章 朝酌菖蒲谷遺跡

第1節 調査の経過と概要

朝酌菖蒲谷遺跡は、魚見塚遺跡南端の東丘陵斜面に位置し（第46図）、調査面積1,001.83m²を測る。

調査にあたっては、平成28年12月12日に立木の伐開を実施し、その後に調査前の地形測量を行った（第48図）。調査区には座標に沿った5×5mグリッドを設定し（第47図）、遺構に伴わない遺物はグリッド単位で取り上げることとした。

なお、調査地内に廃土置場が確保できなかったため、まずは廃土を搬出する場所を造る必要があった。そこで、調査区南西隅の7.5×9mの範囲をその候補地として、先行して調査を行い、加工段と掘立柱建物を構成する複数のピットを検出した。このため、まずはそれらの調査を全て終了した後、島根県教育委員会と協議のうえ廃土の搬出場所を確保した。

全面調査は平成29年1月10日の掘削から開始した。まずは重機と人力を併用して表土剥ぎを行い、その後は人力による掘削を行っている。

その結果、遺構としては、北端部で古墳時代前期の遺構を検出した。具体的には、土器植墓3基（ST02～04）、性格不明の遺構1基（SX05）と、方墳の可能性があるマウンド（SZ01）である。

北端部以外では、奈良時代を中心とする古代の遺構を検出した。北から、東西方向の溝1本（SD06）、浅い加工段3ヵ所（SX07～09）、平面L字状の深い加工段1ヵ所（古墳の周溝の可能性がある：SD02）と掘立柱建物跡2棟（SB13、14）があり、その東では、切り合う3つの加工段（SX15～17）と平面プラン正方形の性格不明の遺構4基（SX18～21）ほかを確認した。また、南では切り合う3本の道路遺構（SF23～25）がありの南では加工段と溝、ピットを検出し、調査区のほぼ全域で遺構を検出する結果となった（第49・50図）。

調査方法と内容については合計5回の調査指導を受けており、5月10日に地元対象の遺跡説明会、5月14日に一般市民対象の現地説明会を開催し、5月23日に現地における調査を終了した。

遺物は土師器がコンテナ15箱分、須恵器がコンテナ10箱分、陶磁器がコンテナ1箱分、石器3点、鉄製品2点、銭貨1点が出土している。



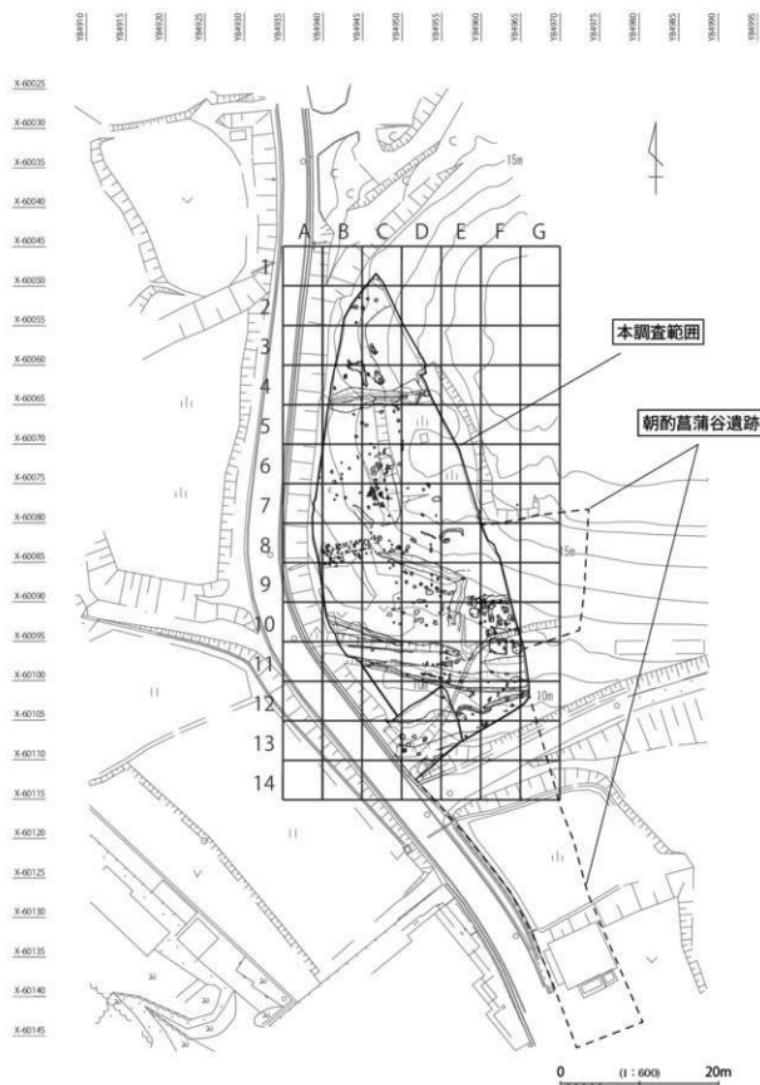
写真7 作業風景



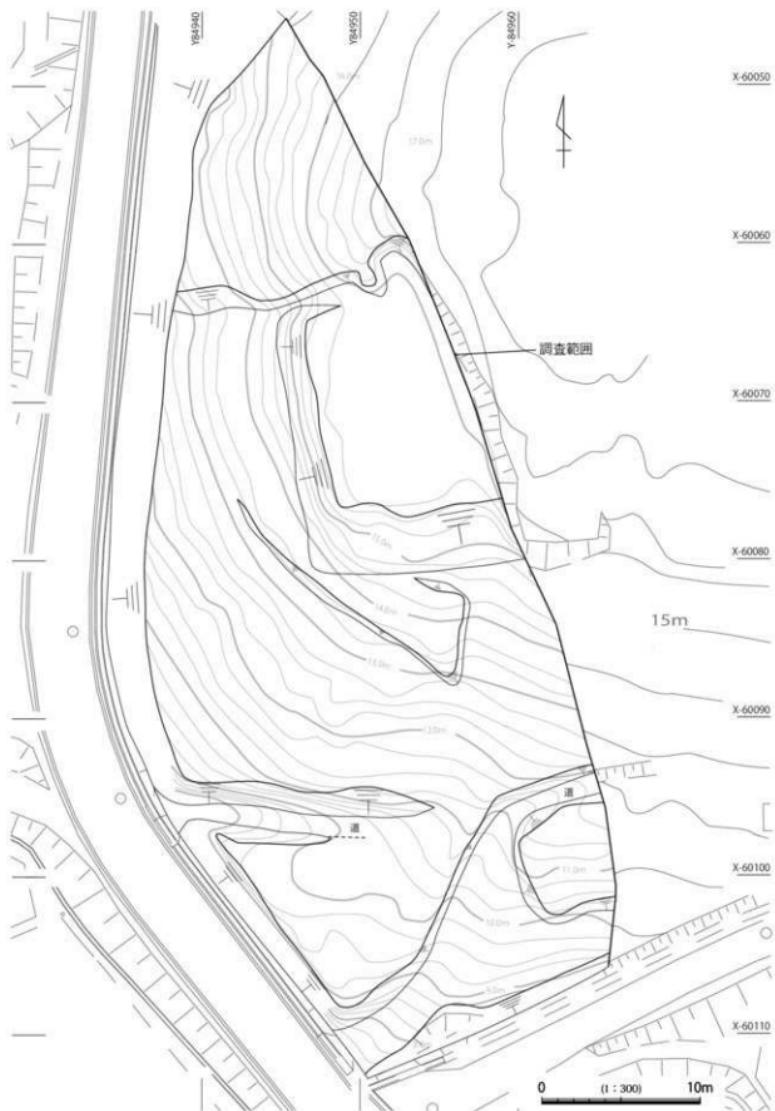
写真8 一般対象の現地説明会



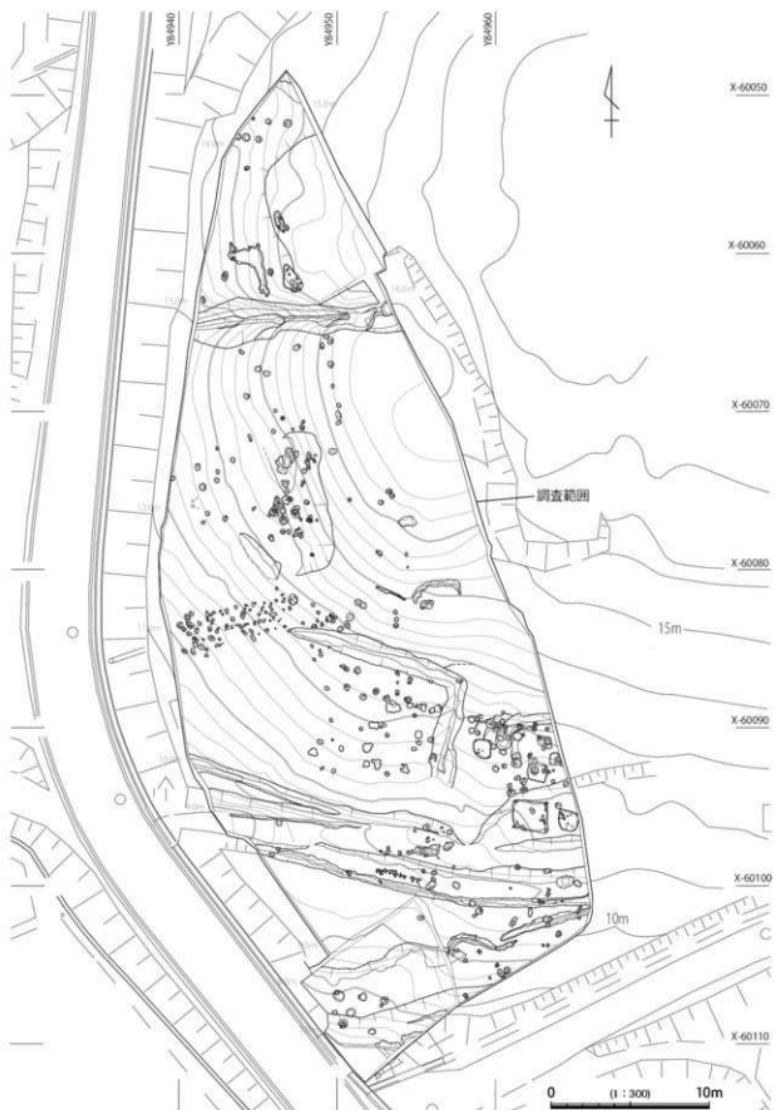
第46図 朝駒菖蒲谷遺跡位置図



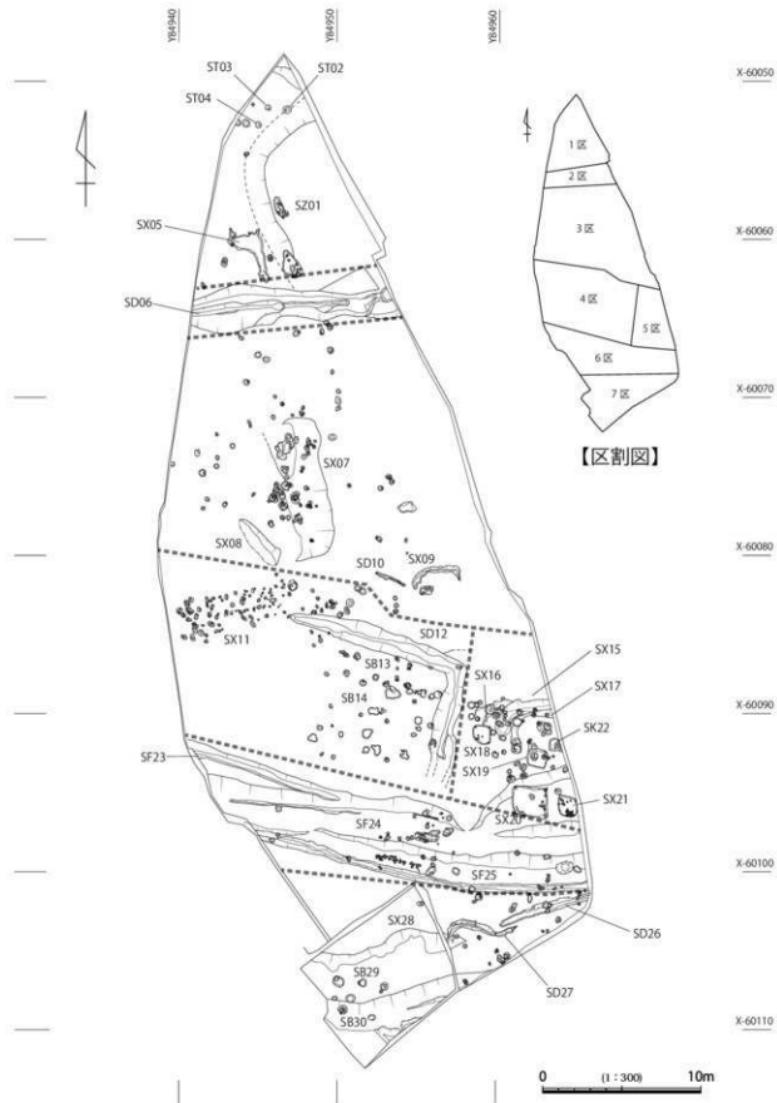
第47図 朝駒菖蒲谷遺跡区割図



第48図 朝駒菖蒲谷遺跡調査前測量図



第49図 朝酌菖蒲谷遺跡調査後測量図



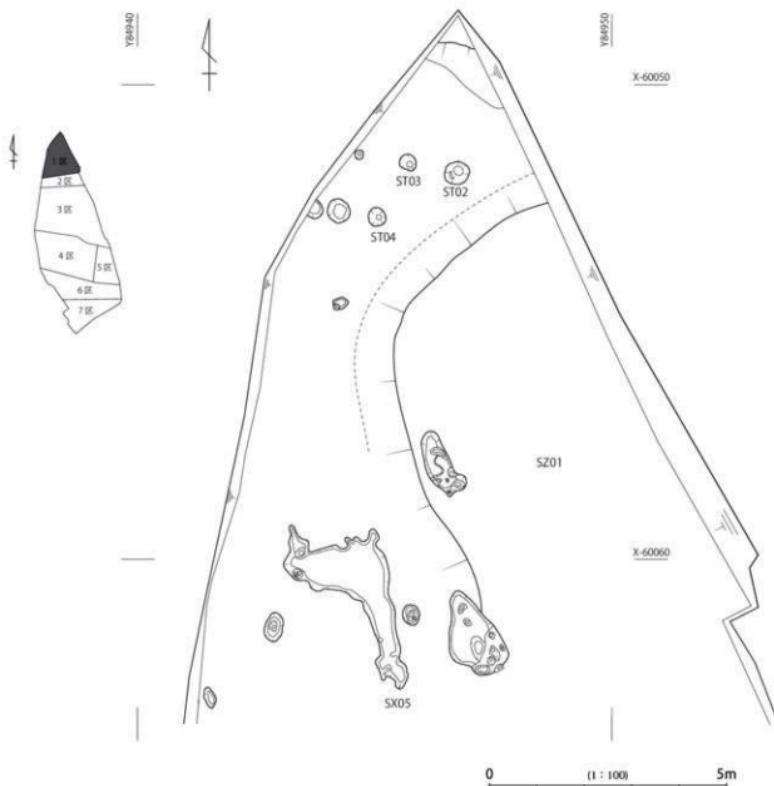
第50図 朝酌菖蒲谷遺跡遺構検出状況図

第2節 調査の成果

調査成果の報告については、調査範囲を1～7区に分け（第50図）、区ごとに遺構、遺物、遺構外出土遺物の順に詳細を述べる。

1. 1区の調査

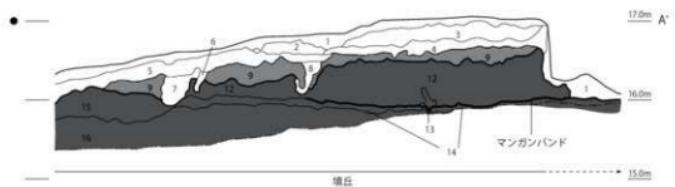
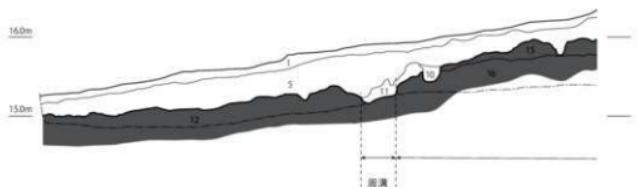
主な遺構としては、方墳の可能性があるマウンド1基（SZ01）と土器棺墓3基（ST02～04）、L字状の落ち込み（SX05）を検出した。帰属時期はいずれも古墳時代前期である。そのほか、ピット5基と土坑5基を検出しているが、浅いものであり、遺物が出土していないため時期と性格は不明である。



第51図 1区遺構検出状況



A 17.0m



- | | | |
|-----------------|-------------|--------------------------|
| 1 黒褐色土 | 9 棕色土 | ■ 現代の堆 (1 ~ 8 + 10 ~ 11) |
| 2 にぶい黄褐色土 | 10 棕色土 | ■ 古堆 S201 の盛土か (9) |
| 3 にぶい黄褐色土（炭混じる） | 11 灰黄褐色土 | ■ 地山 (12 ~ 16) |
| 4 にぶい黄褐色土（炭混じる） | 12 棕色粘質土 | |
| 5 オリーブ黒色土 | 13 浅黄褐色砂質粘土 | |
| 6 にぶい褐色土（根跡） | 14 浅黄色粘質土 | |
| 7 褐色土（炭含む） | 15 黄褐色土 | |
| 8 褐灰色土（根跡） | 16 棕色粘質土 | |

0 (1 : 60) 2m

第52図 1区東壁土層図

(1) 層序 (第52図)

調査区内最高所で、現地表面が標高17.1mを測る。地山までの深さは0.5m前後と浅い。

基本層序は、上から黒褐色土(1層)、にぶい黄褐色土(2・3層)、オリーブ黒色土(5層)、地山(12~16層)の順である。遺構は基本的に地山(12層)上面で検出しており、その上層は耕作等の影響を受けたためか、やや攢乱された様子であった。なお、橙色土(9層)については、後述するSZ01の盛土の可能性を考えている。

(2) 遺構

①方墳SZ01 (第52図)

判然としないが、地山の削り出しとわずかな盛土(第52図9層)が確認された範囲を方墳として報告する。

墳丘の東半分は調査区外にあり、南は溝SD06(第50図)で切られている。規模は不明であるが、残丘から東西6m以上、南北11m以上はあると推定する。土層A-A'(第52図)を見ると、残丘の最高所は標高16.6mを測り、北には地山を削った周溝の断面がみえる。周溝は上端幅0.9m、下端幅0.42m、深さ0.2m、下端での標高15.2mを測る。残丘高は1.4mである。

主体部、遺物ともに検出していないが、地山削り出しの低い墳丘であること、墳裾付近で検出された3墓の土器棺墓の年代から、古墳時代前期の古墳である可能性を考えておきたい。

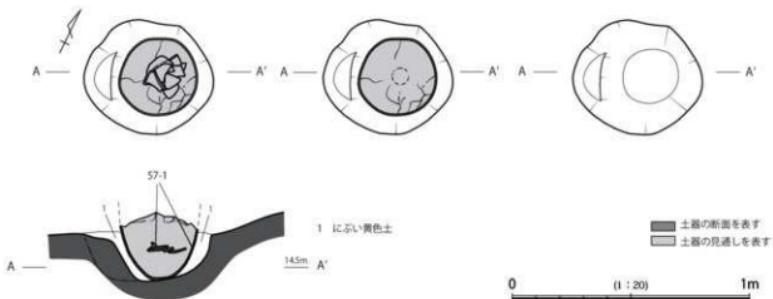
②土器棺墓ST02 (第53図)

古墳時代前期の土器棺墓と思われる。

棺は土師器の壺(第57図1)が使用されており、人骨やその他の遺物は出土していない。

土器が埋納された土坑の平面プランは円形で、上端径46~56cm、下端径23cm、深さ20cmを測り、断面はU字状を呈している。掘方の中央に土師器の壺が正位で据えられており、検出面での壺の径は33.2cm、深さ20cmを測る。

壺の上部は破片の状態で壺の中から出土している。埋納時には完形であったものが、割れて中に落



第53図 ST02 遺構図

ち込んだものと推察されるが、上半部は削平されていると思われ、蓋等の存在は定かではない。

④土器棺墓 ST03 (第54図)

古墳時代前期の土器棺墓と思われる。

棺は土師器の壺（第57図2）が使用されており、人骨やその他の遺物は出土していない。

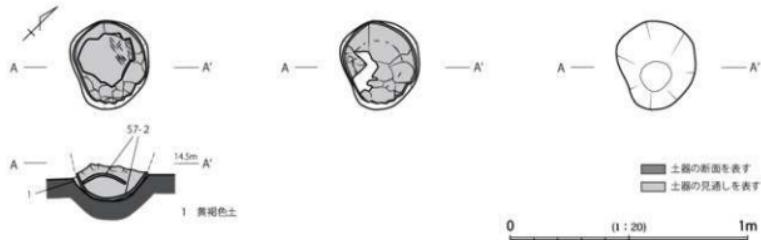
土器が埋納された土坑の平面プランは歪んだ円形で、上端径33.6～35.9cm、下端径12.0cm、深さ10.5cmを測り、断面はU字状を呈している。掘方の中央に壺の下半部が正位で据えられており、検出面での壺の径は30.2～36cm、深さ12.7cmを測る。その中には同一個体の壺の頸部から胴部上半にかけての比較的大きな破片が、外面を上にして入っていた。本来は完形であったものが壺内部に落ち込んだものと思われる。

⑤土器棺墓 ST04 (第55図)

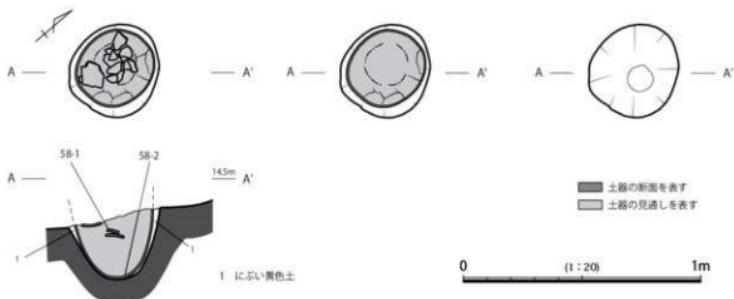
古墳時代前期の土器棺墓と思われる。

棺は土師器の壺が使用されており、人骨やその他の遺物は出土していない。

土器を埋納した土坑の平面プランは円形で、上端径38.2～39.4cm、下端径12.0cm、深さ26.7cmを測り、断面はU字状を呈している。掘方のほぼ中央に壺の下半部（第58図2）が正位で据えられ



第54図 ST03 遺構図

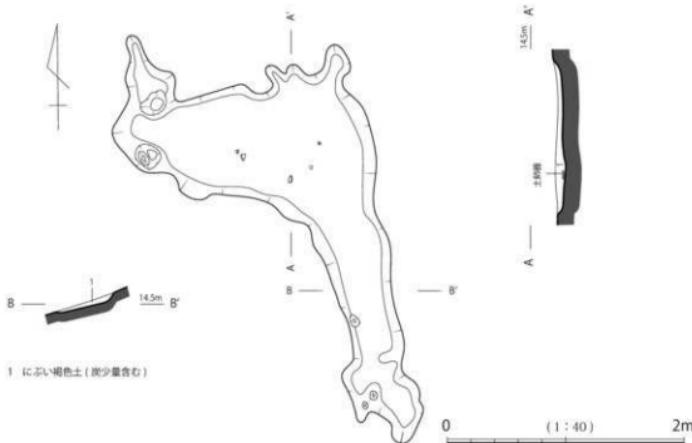


第55図 ST04 遺構図

ており、検出面での壺の径は33.9cm、深さ26.2cmを測る。その中には別個体の土師器の甕（第58図1）の破片が入っていた。合わせ口にした土器棺か、別個体の甕の一部を蓋としていた可能性が考えられるが、やはり上半部が削平を受けており、定かではない。

⑤性格不明の土坑SX05（第56図）

平面プラン L字状の浅い落ち込みで、東西3.2m、南北2.2m、深さ8cmを測る。埋土からは古墳時代前期の土師器片が出土しているが、図化はできなかった。性格は不明である。



第56図 SX05 遺構図

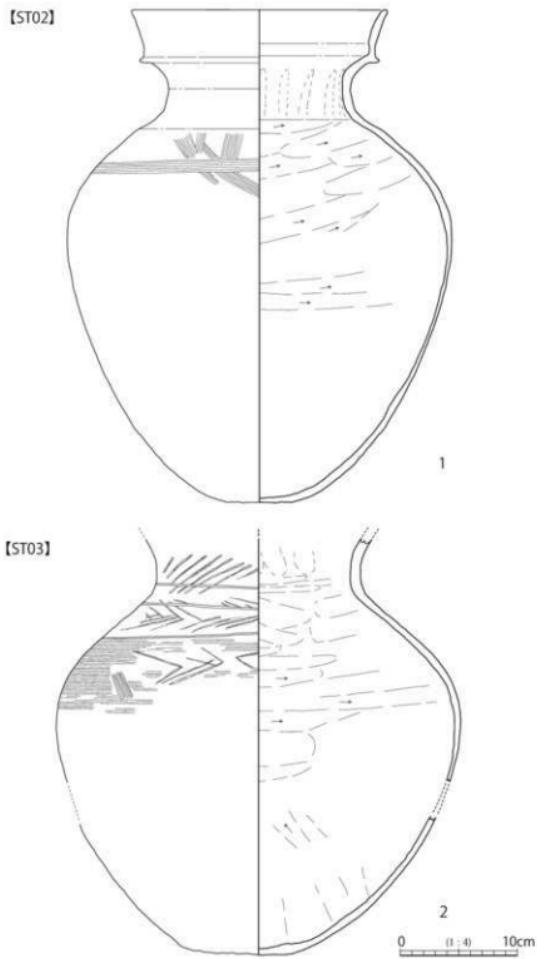
(3) 遺物

①土器棺墓 ST02 の土器（第57図1）

土師器の複合口縁を持つ壺である。全体に器壁が薄く、複合口縁の下端部は細く突出し、肩部はやや張り、底はわずかに平底である。外面は風化が著しいが、口縁から頸にかけては横ナデ、体部の上半分は目の細かいハケメ調整で、頸部に施文は無く、肩部にはハケメが一周めぐる。内面は口縁が横ナデ、頸部は縦方向の指押えの後、ヘラ状工具を1周巡らせて凸部を削り、横ナデを施し、体部はケズリである。口径21.5cm、頸径15.3cm、胴部最大径32.2cm、器高41.4cm。

②土器棺墓 ST03 の土器（第57図2）

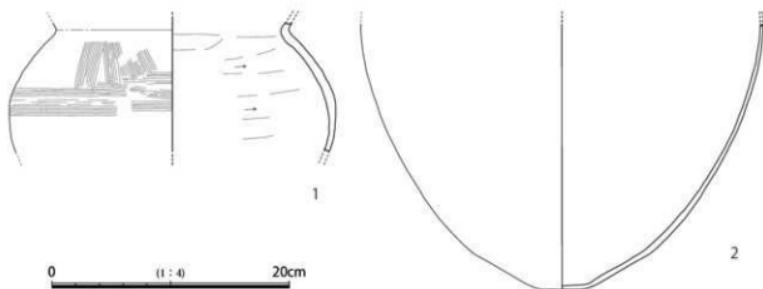
複合口縁を持つ壺と思われるが、口縁と胴部の中ほどが無い。頸から体部にかけては緩やかに張り、底はわずかに平底である。頸から肩部にかけては3条の沈線がめぐり、板状工具による綾杉文を意識した施文がみられるが、雑である。外面は風化が著しいが、頸から肩部にかけては横ナデ、体部の上半分は目の細かいハケメ調整である。内面は頸部が縦方向の指押え後、軽く横ナデを施し、体部はケズリ調整である。頸径16.2cm、体部最大径34.0cm。



第57図 ST02・03出土遺物

③土器棺墓 ST04の土器 (第58図)

1は、土師器の肩部付近で、肩部にはハケメが1周めぐる。外面は細かいハケメ、内面はケズリ調整である。頸径19.6cm、体部最大径27.4cm。2は土師器の壺の下半部であろう。底部に平底の名残をとどめている。内外面とも器面剥離が著しく、調整は不明である。体部最大径34.0cm。



第58図 ST04出土遺物

④遺構外(第59図)

1は土師器の甕または壺の複合口縁の一部、2は土師質の移動式カマドの焚口付近の破片である。



第59図 1区遺構外出土遺物

2. 2区の調査

西の古墳時代前期の遺構群と、東に広がる古代の遺構群の境界ラインで、古代の溝を検出した。

(1) 遺構

①溝 SD06(第60図)

東西12.2mにわたり検出した。上端幅は1.3~3.0mと一定せず、下端も降雨時の一時的な水流により不規則に深くなったと思われ、深さは14.6~55.3cmである。A-A'地点の底部断面は2段階のコの字状を呈している。

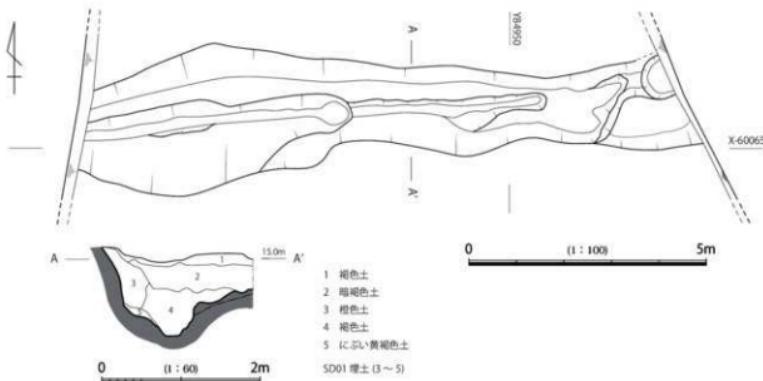
この溝を境にして、北では古墳時代、南では古代の遺構が検出されている。SD06はほぼ東西方位にのり、古代道路SF25から北に約30m(10丈)の位置にあり、この間を区画する溝の可能性がある。

出土遺物(第61図)から奈良時代前半頃か、それ以降の埋没と思われる。

(2) 遺物

①溝 SD06(第61図)

1は須恵器の环で器壁は丸味を帯び、内外面とも回転ナデ調整である。8世紀前半頃のものである。



第60図 SD06遺構図



第61図 SD06出土遺物

3. 3区の調査

標高 13.0 ~ 14.8m の緩斜面で、浅い加工段 3 カ所 (SX07 ~ 09) と SX07 の平坦面にある土坑群 (SK41 ~ 47 など)、溝 (SD10)、ピット (SP33 ほか) を検出した。土坑については遺物が出土したもののみ記述する。

なお、東端部の地形（第49図）は方墳のように見えるが、近年まで建物があった場所である。

(1) 遺構

①加工段 SX07 (第62図)

南北 8.72m、東西 1.5 ~ 2.52m、深さ 18cm程度の緩やかな加工段で、壁際溝は無く、西に向けて平坦面が造られている。周辺でピットや土坑を検出しているが、明確な柱穴はみられず、建物を復元することはできなかった。土坑 SK41 ~ 46 (第63図) 埋土から奈良時代の遺物が出土しているので、その頃以降に造られた加工段である。

加工段の内側では、土坑 6 基を検出した。

②土坑 SK41 (第62・63図)

東西 0.75m、南北 1.7m、深さ 0.22m の不整形な土坑で、床面は凹凸が著しい。埋土は 2 層あり、

上層の灰褐色土には多量の炭が含まれていた。性格は不明である。奈良時代初頭の須恵器の蓋など(第65図1~3)が出土している。

②土坑SK42(第62・63図)

東西0.58m、南北1.12m、深さ0.16mの不整形な土坑で、性格は不明である。床面は凹凸が著しく、SK22により切られている。性格は不明。土師器の破片多数と須恵器の破片2点が出土している。

③土坑SK43(第62・63図)

東西0.25m、南北0.62m、深さ0.32mの土坑で、性格は不明である。土師器と須恵器の破片が出土している。

④土坑SK44(第62・63図)

東西0.43m、南北0.62m、深さ0.17mの土坑で、性格は不明である。土師器と須恵器の破片が各1点出土している。

⑤土坑SK45(第62・63図)

東西0.4m、南北0.65m、深さ0.32mの土坑で、性格は不明である。須恵器の破片(第65図4)が出土している。

⑥土坑SK46(第62・63図)

東西0.58m、南北0.60m、深さ0.18mの土坑で、性格は不明である。古墳時代前期の土師器片(第65図5)が出土している。

⑦加工段SX08(第62・63図)

南北3.68m、東西1.2m、深さ0.2mの緩やかな加工段で、壁際溝は無い。SX07と比較すると、軸がやや西に振れている。ピットや土坑は検出されなかった。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

⑧加工段SX09(第64図)

東西3.06m、南北0.96m、深さ0.1mの加工段で、南に向けて平坦面を造り出している。壁際溝の深い部分だけが残った状況と思われ、溝埋土に多くの炭を含んでいたが、遺物は出土しておらず、時期は不明である。ピットは検出されなかった。

⑨溝SD10(第64図)

東西2.03m、幅0.15m、深さ0.05mの溝である。溝埋土には多くの炭を含んでいたが、遺物は出土していない。時期、性格ともに不明である。

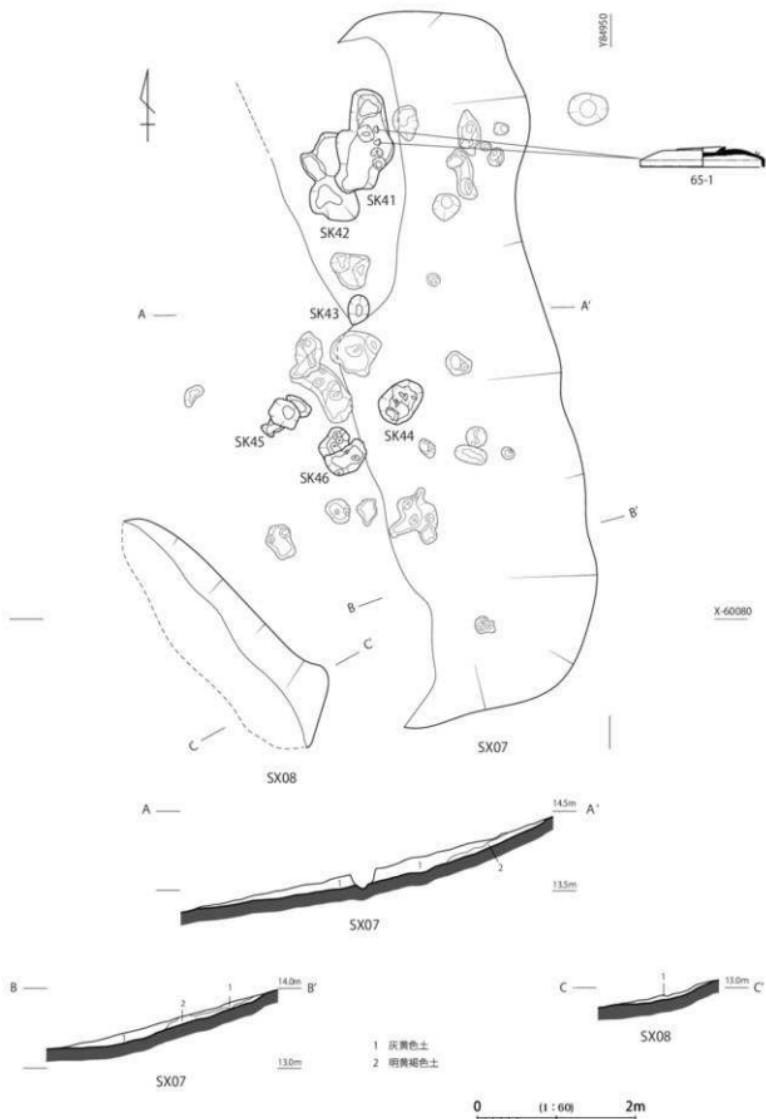
⑩ピットSP33(第64図)

直径28cm、深さ36cmの円形小土坑である。埋土は炭を含むにぶい褐色土1層で、柱痕はみられなかった。鉄製品が1点出土しているが、土器は出土しておらず、時期と性格は不明である。

(2) 遺物

①土坑SK41(第65図1~3)

1~3は須恵器である。1は低い輪状つまみの付く蓋で、内外面ともに回転ナデ調整であるが、天



第62図 SX07・08遺構図

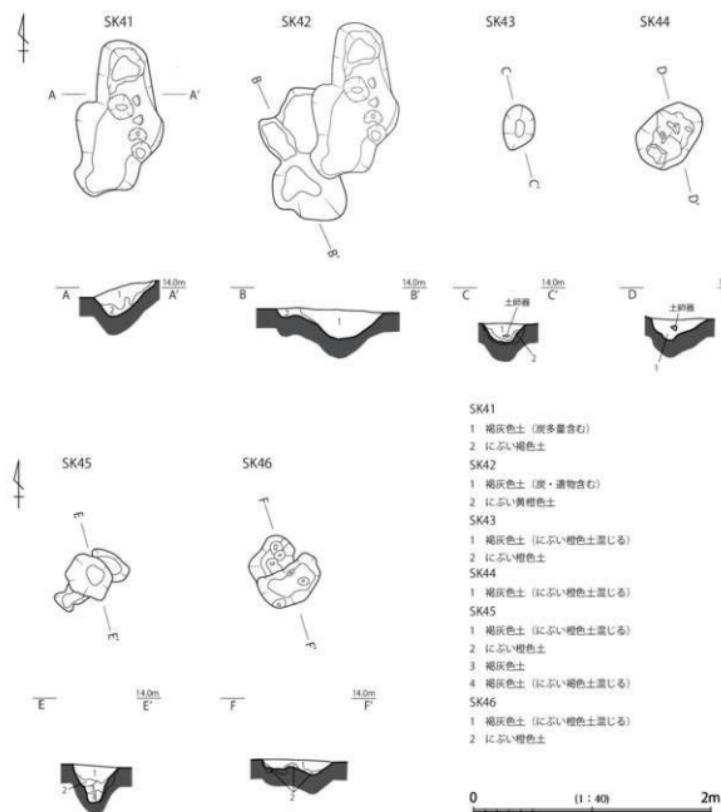
井部分は糸切痕と回転ヘラケズリの痕跡がみられ、輪状つまみをつけた後にさらに回転ナデを施している。上面には焼成時の重ね焼きした土器の一部が癒着して残る。口径 15.4cm、器高 2.5cm、つまみ径 6.0cm。2 は坏で、内外面とも回転ナデで、器壁は丸味を帯びている。3 は坏の底部付近で、風化が著しく調整は不明である。

②土坑 SK45 (第65図4)

須恵器の高台付き坏である。内外面とも回転ナデ調整である。

③土坑 SK46 (第65図5)

土師器の複合口縁の甕である。口縁の屈曲部付近だが、風化のため調整は不明である。



第63図 SK41～46 遺構図

④ピット SP33 (第65図6)

ヤリガンナの刃部で、先端の3cmを除いて木質が残る。刃部は幅1.5cmで、わずかに反る。

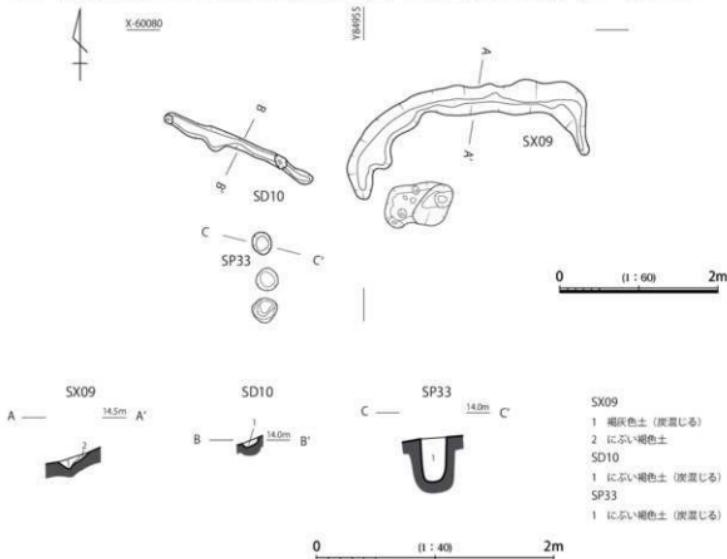
⑤遺構外 (第66図)

1は土師器の甕、口縁部である。

2～7は須恵器である。2は低い輪状つまみが付く蓋で、口縁部を欠損している。外面の肩部は回転ヘラケズリ後無調整で、それ以外は回転ナデを施している。つまみ径4.6cm。3は壺または高杯の口縁部付近である。口径11.4cm。4は壺の口縁部で、風化のため調整は不明である。口径16.0cm。5は壺の口縁部で、内外面とも回転ナデ調整である。6は無高台の皿である。外面の器壁は反って立ち上がり、中ほどで屈曲して内傾するが、内面は外面の屈曲部から器壁が立ち上がる。内外面は回転ナデ、底部外面は糸切である。口径13.8cm、底径6.2cm、器高1.9cm。7は鉄鉢形土器の口縁部である。口縁の下1cmで屈曲して内傾し、口縁端部は平坦に作られている。調整は内外面とも回転ナデで、内面の屈曲ラインの下にはヘラ記号「×」がある。口径15.0cm。

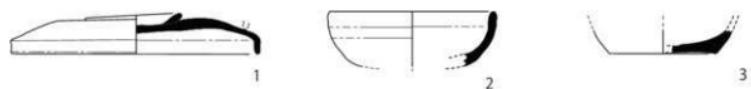
8は土師質の把手部分で、懶か移動式カマドに取り付くものである。

9は古錢の琉球通寶で、表土から出土した。表面に「琉球通寶」、裏面に「當百」と鋳出され、左側面に「サ」の刻印が残るが、右側面は明瞭でない。1862年8月から3年間、薩摩藩が琉球救済のために発行した近世のもの。縦4.9cm、横3.2cm、厚さ0.3cm、重さ22.8g。孔の一辺0.7cm。



第64図 SX09・SD10と周辺の遺構図

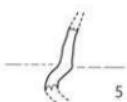
【SK41】1~3



【SK45】

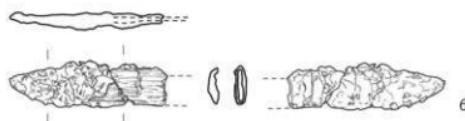


【SK46】



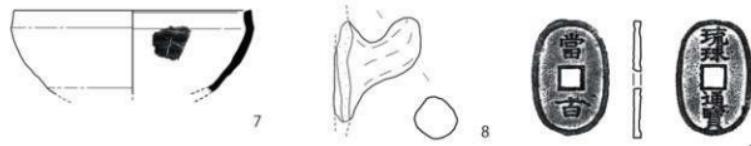
0 (1 : 3) 10cm
1~5

【SP33】



0 (1 : 2) 5cm
6

第65図 3区遺構出土遺物



0 (1 : 3) 10cm
1~8

0 (1 : 2) 5cm
9

第66図 3区遺構外出土遺物

4. 4 区の調査

標高 11.0 ~ 12.0m の斜面で、小ピット群 (SX11) と溝 (SD12) に囲まれたピット (SP51 ~ 60 ほか) を検出し、ほぼ同じ場所に位置する 2 棟の掘立柱建物跡 (SB13・14) を復元した。なお、掘立柱建物を囲う溝は建物及び柱穴の大きさと比べて規模が大きいことから、本来は古墳の周溝であった可能性も考えられるが、確証が無いことから溝 SD12 として扱う。

(1) 遺構

①小ピット群 SX11 (第 67 図)

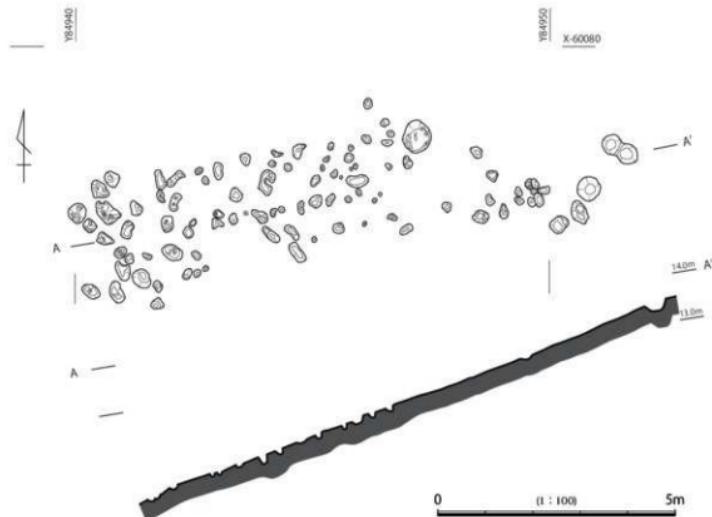
小ピットは径 10 ~ 20cm 程度のものが多く、深さ 10cm 程度の浅いものが大半でを占める。東西に方向性が見いだせるが、柱穴というよりは、杭程度のものが集中的に、または長期にわたって打たれたものと思われる。

ピット埋土から遺物が出土していないため時期は不明である。この辺りでは地山面が浅く、遺物の出土量は少ない。現代の陶磁器に数点と、8 世紀代の須恵器 1 点が出土している。

②溝 SD12 (第 68 図)

南西方向に下がる地形に造られた、平面プラン L 字状を呈する溝である。

東西辺は丘陵の傾斜とは垂直方向に掘られており、長さ 11.7m、最大上端幅 1.5m、下端幅 0.2 ~ 0.5m、最深 0.55m を測り、東端で直角に南へ折れる。南北辺も直線で、最大上端幅 1.5m、下端幅 0.2 ~ 0.3m 最深 0.3m、検出長 7.1m を測る。



第 67 図 SX11 遺構図

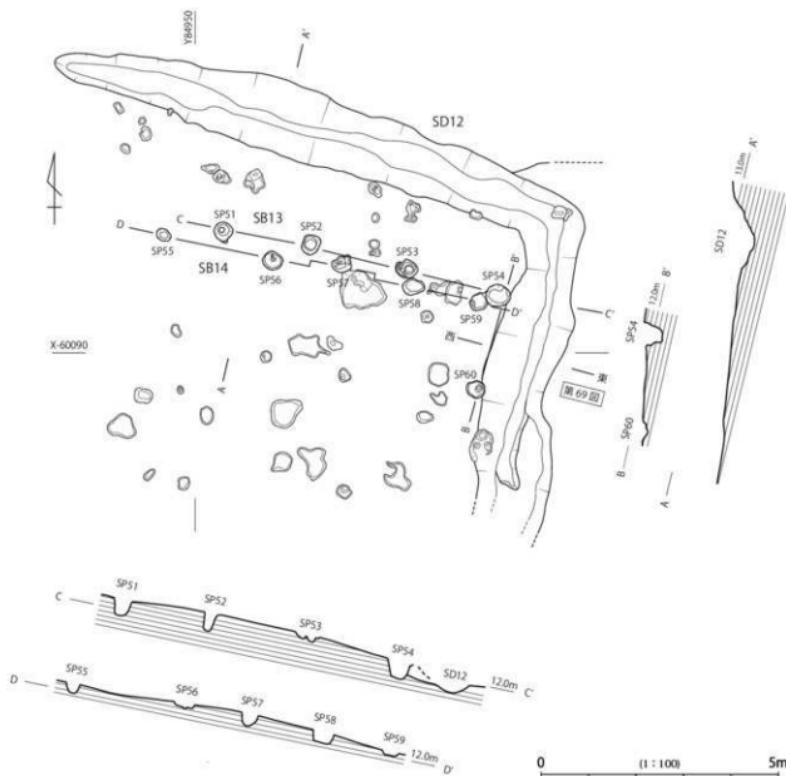
溝に囲まれた範囲は斜面の傾斜が比較的緩やかであり、ピットの配置から切り合う掘立柱建物跡2棟分を復元することができた。しかし、SD12は掘立柱建物の規模及び柱穴の大きさと比較すると、平均的な区画溝としては大き過ぎると思われる。

溝埋土からは8世紀代の須恵器の环と脚付円面硯の破片（第70図4）が出土しており、掘立柱建物も後述するように8世紀代と推定されることから同時期に存在したことは間違いないが、本来は方墳の周溝であったものを、再利用した可能性も捨てきれない。古墳の主体部は残存していないが、下方の6区包含層から古墳時代前期の土器片が出土している（第92図1）。

③掘立柱建物跡 SB13（第68・69図）

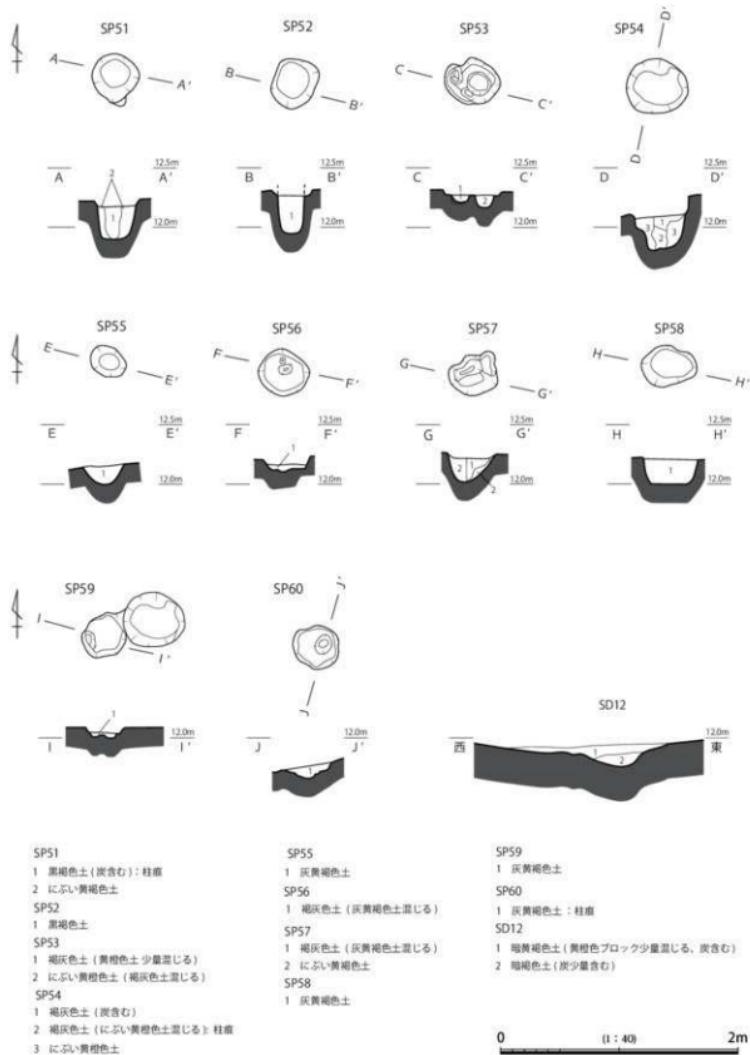
溝SD12に平行する掘立柱建物跡である。

C-C'ラインを見ると、西から柱穴SP51～54の4基が東西にならぶ。南は土が流されてC-



第68図 SD12とSB13・14遺構図

C' ラインに対応する柱穴列は残存しないが、SP54 の南に位置する SP60 は同一建物を構成すると考えられ、東西 3 間、南北 1 間以上の建物が想定される。柱間の芯々距離は SP51 - SP52 が 1.9m、



第69図 SB13・14 ピット及びSD12断面図

SP52 — SP53 が 2.15m、SP53 — SP54 が 2.15m、SP54 — SP60 が 2.05m である。

柱穴断面を観察すると、SP52 断面の 1 層と SP54 断面の 2 層は柱痕を示す層と判断される。

SP54 埋土からは奈良時代の須恵器が出土しているので、奈良時代か、それ以降の建物である。

④掘立柱建物跡 SB14 (第 68・69 図)

溝 SD12 に平行し、掘立柱建物跡 SB13 の南 0.2 ~ 0.3m に位置する掘立柱建物跡である。

D — D' ラインを見ると、西から柱穴 SP55 ~ 59 の 5 基が東西にならぶ。南は土が流されて D — D' ラインに対応する柱穴列は残存しておらず、東西 4 間以上の建物跡と想定される。柱間の芯々距離は SP55 — SP56 が 2.35m、SP56 — SP57 が 1.5m、SP57 — SP58 が 1.7m、SP58 — SP59 が 1.45m である。柱穴間距離が短い小型の建物であるが、SP55 はやや距離が離れている。

柱穴断面を観察すると、SP57 には縱方向の分層ができたが、他の 4 基の埋土は 1 層だけである。

時期の分かる遺物は出土していない。

(2) 遺物

①溝 SD12 (第 70 図)

1 ~ 3 は須恵器の环である。1 の器壁はやや丸味を帯び、2 の器壁は直線的なものである。3 は底部で、器壁は直線的に立ち上がり、内外面は回転ナデ、底部外面は糸切である。

4 は須恵質の脚付円面硯の脚部付近である。^基4 ヘラと手捏ねで作られており、内面の海部分がわずかに残る。

②ピット SP52 (第 71 図 1)

須恵器の环である。器壁は底部から丸みを帯びて立ち上がる。内外面は回転ナデ、底部外面は糸切である。底径 7.2cm。

③ピット SP57 (第 71 図 2)

土師質の土鍤である。端部の一方を欠損する。残存長 3.8cm、最大径 1.7cm、孔径 0.5cm。

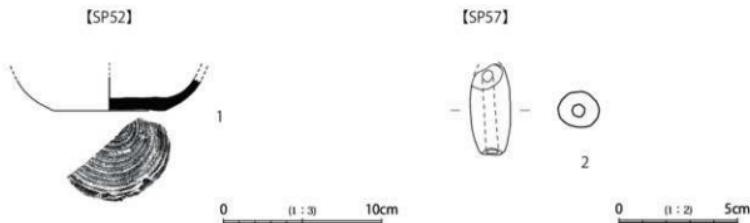
④遺構外 (第 72 図)

4 区の出土遺物は量が少なく、小さな破片が大半を占める。

1 は小ピット群の上層から出土した、須恵器の环である。壁は丸味を帯びている。



第 70 図 SD12 出土遺物



第71図 ピット出土遺物



第72図 4区遺構外出土遺物

5. 5区の調査

溝SD12の東側に位置する、標高10～13mの緩斜面である。

同一場所で切り合う3時期の加工段(SX15～17)と多数のピットを検出した。各加工段に伴うピットの分別は困難で、建物跡を復元することはできなかった。また、平面プラン正方形の性格不明の遺構4基(SX18～21)を検出した。南には近年まで丘陵へ上がる道があり、遺構の残りは悪かった。

(1) 遺構

①加工段 SX15 (第73図)

丘陵の傾斜と垂直な方向の、南北方向に地山を0.6m掘り下げて平坦面を造り出している。東の調査区外に続いているため、規模は不明である。

壁際溝は全面的にはみられないが、西端部では上端幅1.0m、下端幅0.6m、深さ15cmの溝を検出した。精査面で周囲の遺構を全て切っていたことから、3基の加工段の中では最も新しいものである。

②加工段 SX16 (第73図)

SX15と同じ位置に造られている加工段で、SX14より西に0.8m張り出している。中心部はSX15に切られていて分からぬが、西端には幅1.0m、下端幅0.8m、深さ5cmの溝がある。この溝の地山直上から、壊れた土製支脚(第79図3)が出土した。

③加工段 SX17 (第73図)

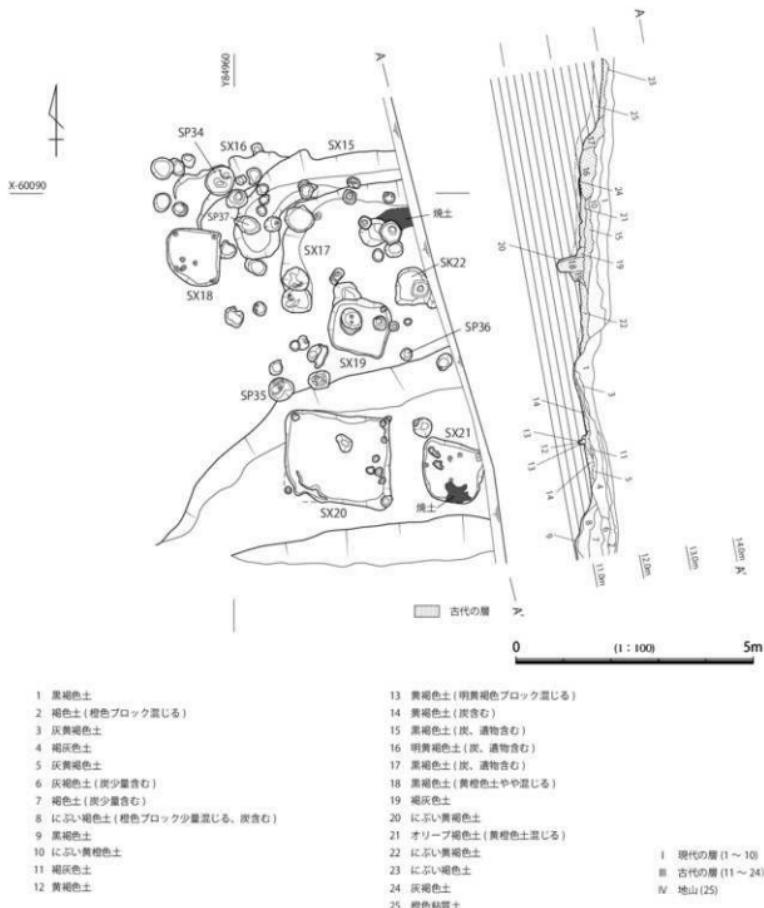
切り合う加工段の内、やや南に位置している。壁際溝はない。SX15より新しいが、SX16との新旧関係は不明である。

④ピット SP34～37(第74図)

SP34～36は8世紀初頭以降に掘られたもので、断面の土層は単純で柱の痕跡はみられない。

SP37は上端径35～45、下端径32cm、深さ25cmのピットで、断面に柱の痕跡はみられない。出土遺物から9世紀以降に掘られたものである。

ピット間には1世紀近い時期幅が存在すると思われ、建物跡は復元できていない。



第73図 加工段 SX15～17と周辺の遺構図

⑤性格不明の遺構 SX18 (第75図)

平面プランは正方形に近く、上端は東西 1.20m、南北 1.12m で、壁はほぼ垂直に下がり、下端は東西 1.04m、南北 1.08m を測る。最深部で深さ 0.2m を測るが、南西側では土が流れて浅くなっていることから、本来はもっと深いものであろう。底面は平坦で、3隅に径 10cm 前後の杭痕を検出した。南西の隅は底面自体が流れていたため、存在していたとしても検出できない状況である。土坑の各辺が直線であることから、壁に沿って横板を渡し、杭で固定していたと考えられる。

中央から南西にかけても杭痕 5 カ所を確認した。

埋土は、下から炭と焼土が混じる暗褐色土（2層）、炭を含む褐色土（1層）である。床面と壁面に被熱した痕跡は認められず、性格は不明である。

遺物は小さいものばかりであるが、奈良時代初頭～後半期のものと思われることから、奈良時代後半か、それ以降の遺構と推測される。

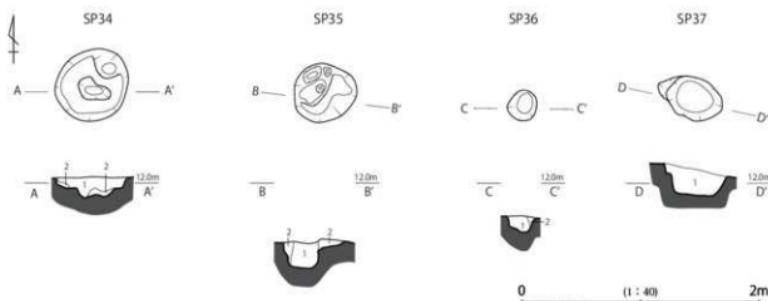
⑥性格不明の遺構 SX19 (第76図)

平面プランは正方形に近く、上端は東西 1.30m、南北 1.16m で、壁はほぼ垂直に下がり、下端は東西 1.15m、南北 0.96m を測る。最深部で深さ 0.24m を測るが、遺構は上面を南下りに削平されていることから、本来はもっと深かった可能性が高い。底面は平坦で、北東隅では径 10cm の杭痕を検出したが、他の 3 隅で杭痕は確認できなかった。

そのほか、底面で平面プラン円形の落ち込みを 2 カ所検出しているが、両方とも極めて浅いもので、この遺構と直接関連するものか不明である。

埋土は、下から炭と焼土ブロック（4層）、炭を多く含むにぶい黄褐色土（3層）である。床面と壁面に被熱した痕跡は認められず、性格は不明である。

遺物は比較的残りが良い奈良時代後半期の須恵器が出土していることから、奈良時代後半か、それ



SP34 1 暗褐色土(にぶい黄褐色土)

2 明褐色土

SP35 1 暗褐色土(炭含む)

2 にぶい褐色土

SP36 1 暗褐色土(にぶい橙褐色土、炭含む)

2 にぶい橙褐色土

SP37 1 暗褐色土(明褐色土混じる)

第74図 加工段周辺のピット遺構図

以降の遺構と推測される。

⑦性格不明の遺構 SX20 (第77図)

平面プランは正方形に近く、上端は東西 2.24m、南北 1.85m で、壁はほぼ垂直に下がり、下端は東西 2.06m、南北 1.69m を測る。最深部で深さ 0.36m を測るが、南西側では土が流れて浅くなっていることから、本来はもっと深いものであろう。底面は平坦で、土坑の 3 隅で径 13 ~ 20cm の杭痕を検出した。南西の隅は底面自体が流されているが、本来の土坑の隅と推測される場所で径 14cm の杭痕を検出した。土坑の各辺が直線であることから、壁に沿って横板を渡し、杭で固定していたと考えられる。

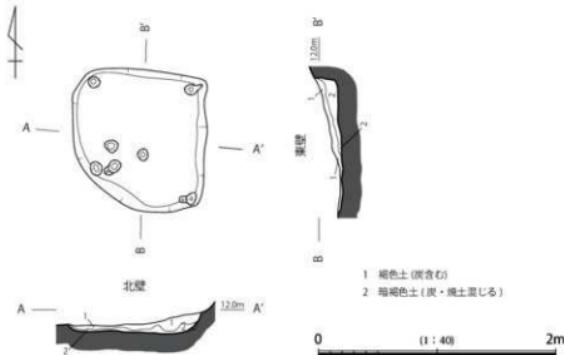
そのほか、東壁に沿うように 5 カ所の杭痕を確認した。東壁に渡した板材を補助的に支えるために杭を打った可能性がある。

埋土は、4 辺の壁に沿って木枠痕と思われる褐灰色土 (7 層) が確認でき、平面的には下から明黄褐色土が混じる黒褐色土 (5 層)、黄橙色ブロックと炭を含むにぶい黄褐色土 (4 層)、炭を含む褐灰色土 (3 層)、褐灰色土と黄橙色土が混じる黄褐色土 (2 層) である。床面と壁面に被熱した痕跡は認められず、性格は不明である。

遺物は小さいものばかりであるが、奈良時代初頭～後半期のものと思われる (第83図) ことから、奈良時代後半か、それ以降の遺構と推測される。

⑧性格不明の遺構 SX21 (第78図)

平面プランは正方形に近く、上端は東西 1.4m、南北 1.28m で、壁はほぼ垂直に下がり、下端は東西 1.14m、南北 1.12m を測る。全体的に削平を受けており、底の最深部は深さ 0.08m であるが、本来はもっと深いものであろう。底面は北西部で若干の凹凸がみられたが、南東では地山が被熱して焼土化しており、その表面は平坦である。杭痕は明瞭でないが、土坑の各辺が直線であることから、SX15 ~ 17 と同様、壁に沿って横板を渡していたと考えられる。

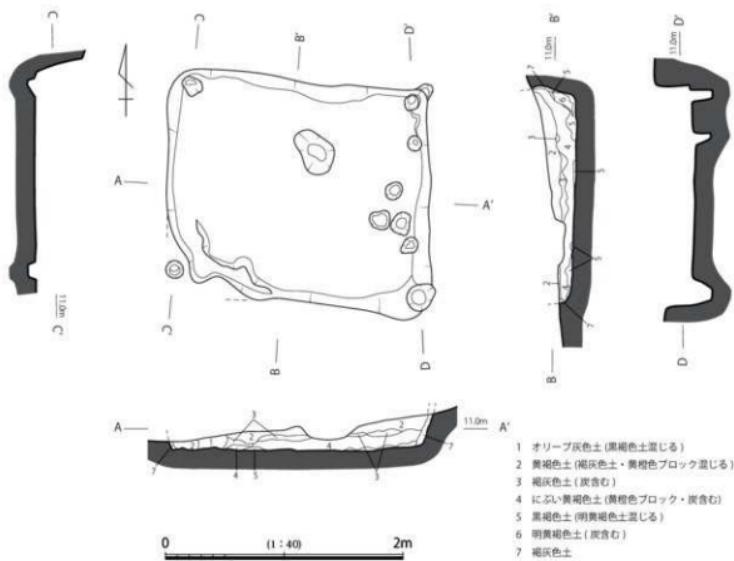


第75図 SX18 遺構図

埋土は、平面的には下から黄色土（2層）、オリーブ褐色土混じる灰色土（1層）である。床面が被熱しているわりには埋土に炭や焼土が混じっていない。性格は不明である。



第76図 SX19遺構図



第77図 SX20遺構図

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SX18～21の底面付近の埋土を水洗、ふるいにかけたところ、微細な鉄片を採取した。これらを分析にかけた結果、鍛冶作業がおこなわれた可能性を示す鍛治滓や鍛造剥片などの鍛冶関連遺物は確認されなかった。^{参3}

(2) 遺物

①加工段 SX15 (第79図)

地山直上付近から、須恵器破片を出土した。1、2は須恵器の环で、1は直線的に立ち上がる器壁である。2は高台の付く底部である。

②加工段 SX16 (第79図)

地山直上付近から、土師質の土製支脚を出土した。前面には2本の突起が斜め上に開き、背面は粘土紐を上下に渡して孔を設けたものである。底部中央はヘラで粘土を半球状に粗く搔きとっている。器高20.4cm、底径13.8cm。

③ピット SP34 (第80図1)

1の須恵器の蓋の破片が出土した。口縁端が垂直に下がるもので、8世紀初頭のもの。

④ピット SP35 (第80図2)

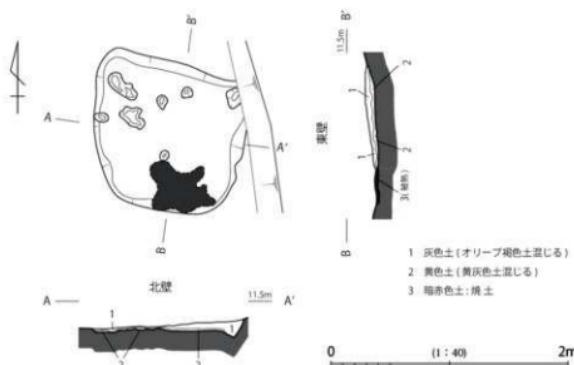
須恵器の蓋で、口縁端が下垂する。8世紀初頭のもの。

⑤ピット SP36 (第80図3)

須恵器の环の口縁部で、器壁は丸味を帯びている。口径12.8cm。8世紀前半期のもの。

⑥ピット SP37 (第80図4)

4は灰釉陶器の碗が出土した。底径6.8cm。9世紀代のもの。



第78図 SX21 平面・断面図

⑦性格不明の遺構 SX18 (第81図)

須恵器の小さな破片4点と移動式カマドの焚口付近の破片1点が出土した。

1～4は須恵器で、1は蓋の口縁端部、2は器壁が直線状に開く环、3は器壁が丸味を帯びる無高台の环、4は無高台の皿である。4点の須恵器には8世紀初頭～後半の時期幅がみられる。

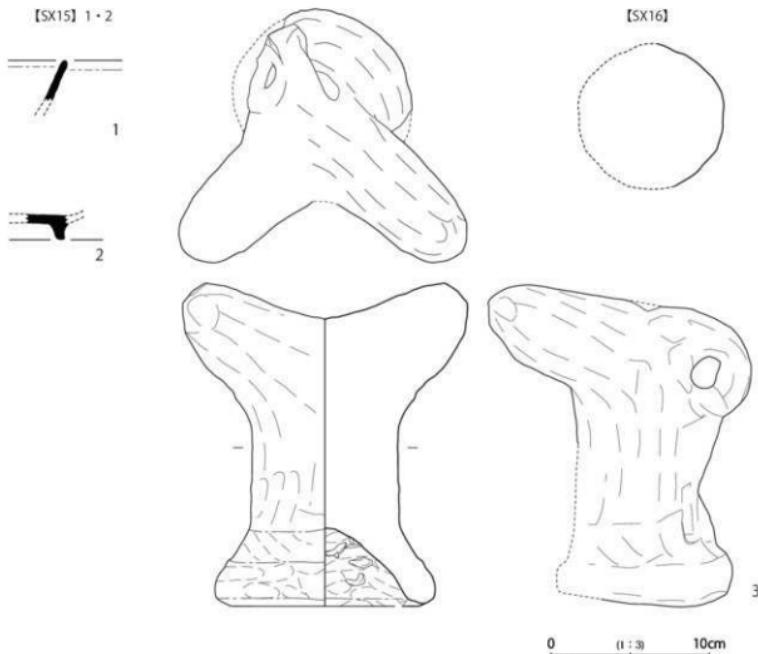
5は移動式カマドの焚口付近の破片である。内面は被熱している。

⑧性格不明の遺構 SX19 (第82図)

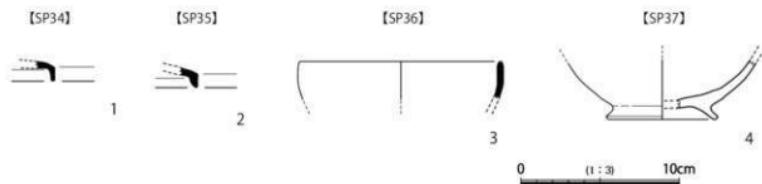
土師器片1点と、須恵器3点、土錐1点が出土した。このうち、須恵器の蓋は約半分強が残るものである。

1は土師器の甕の口縁部である。

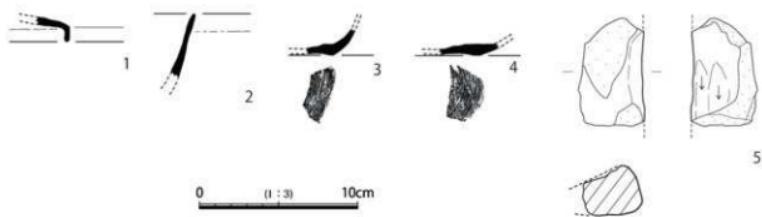
2～4は須恵器で、2は蓋である。つまみは扁平な宝珠状で、口縁端部内面に丸味を帯びた凹線がめぐり、断面はわずかにS字状を呈している。上面には糸切痕が顕著で、肩部は回転ヘラケズリが施されており、8世紀末頃のものである。つまみ径2.4cm、口径16.2cm、器高3.0cm。3は稜をもって口縁端部が外反する环で、口径13.2cm。4は底から器壁が直線的に開く低い环で、8世紀末以降のも



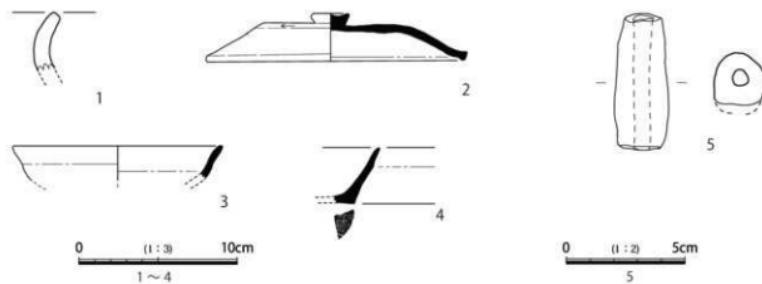
第79図 SX15・16出土遺物



第80図 ピット出土遺物



第81図 SX18出土遺物



第82図 SX19出土遺物



第83図 SX20出土遺物

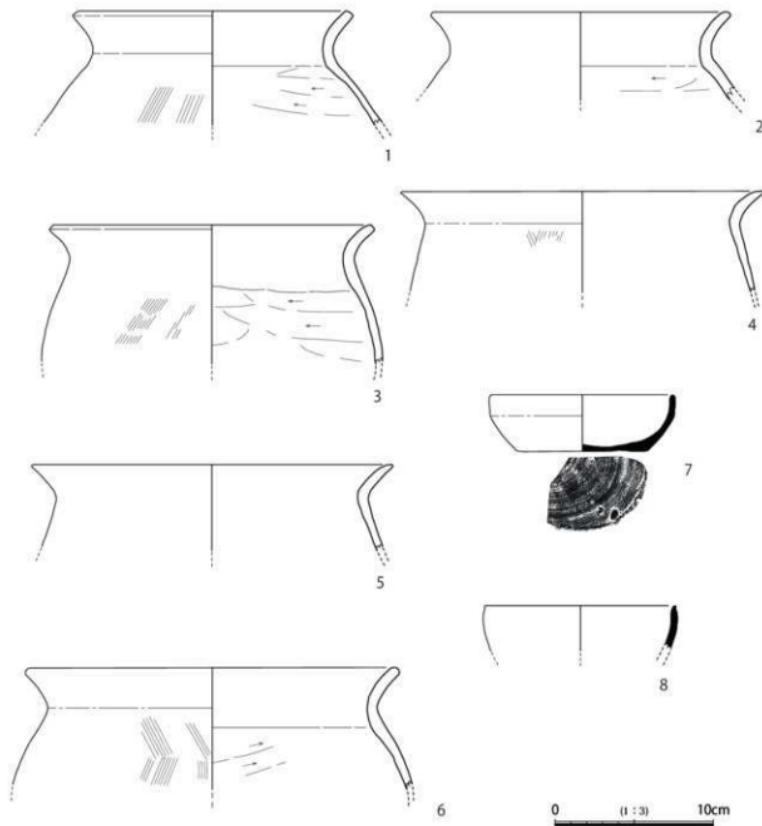
のである。器高 3.6cm。2 と 4 は、8世紀末～9世紀初頭のものである。

5 は手捏ねによる土錘で、長さ 5.8cm、最大径 2.3cm、孔径 0.6cm。

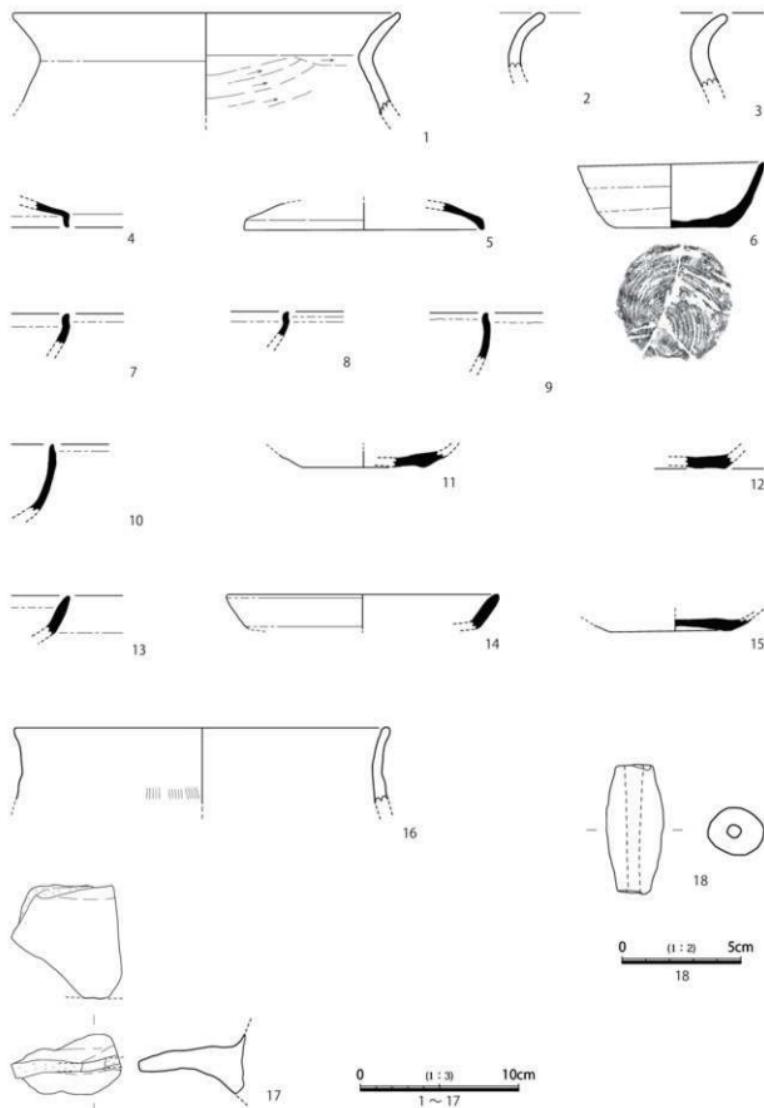
⑨性格不明の遺構 SX20 (第 83 図)

須恵器の小片 5 点が図化できた。

1～5 は須恵器である。1～4 は環で、1 は器壁が丸味を帯び、2 はさらに口縁端部が内傾するもので、8世紀前半。3 は器壁が直線的だが、口縁端部が内傾し、4 は器壁が直線的に開くもので 8 世紀後半以降のものである。5 は高环の脚部である。



第 84 図 SK22 出土遺物



第85図 5区遺構外出土遺物

⑩土坑 SK22 (第 84 図)

土師器、須恵器とも比較的大きな破片が出土している。

1～6は土師器の甕で、口縁から肩部にかけての破片である。4と5は器面の剥離が著しく定かではないが、その他の調整は口縁部が横ナデ、その下の外面は斜行するハケメ、内面はケズリである。外面には煤が付着している。1は口径 17.6cm、頸径 15.2cm。2は口径 18.8cm、頸径 16.5cm。3は口径 20.5cm、頸径 18.0cm。4は口径 23.0cm、頸径 19.9cm。5は口径 22.8cm、頸径 19.8cm。6は口径 23.6cm、頸径 20.9cm。

7、8は須恵器である。7は無高台の環で、底部外面が糸切、そのほかは回転ナデである。口径 11.8cm、底径 8.0cm、器高 3.6cm。8は環の口縁部で、内外面は回転ナデである。口径 12.1cm。

⑪遺構外 (第 85 図)

1～3は土師器の甕の口縁部で、1は口縁から肩部にかけての破片である。表面は剥離しているが、被熱による変色がみられる。口径 24.5cm、頸径 21.0cm。

4～15は須恵器である。4は蓋で、口縁端部が下垂する 8世紀初頭のもの。5は口縁端部が斜めに下がるもので、8世紀中葉頃のものである。6は完形の無高台の環で、器壁が丸味を帯びて立ち上がる。口径 11.7cm、底径 7.1cm、器高 4.0cm。7～10は环の口縁付近で、器壁は丸味を帯びている。11、12は环の底部付近で、器壁が丸味を帯びるタイプと思われる。11は底径 7.7cm。13～15は皿で、11と12は器壁が厚く、緩やかに立ち上がる。14は口径 17.2cm。15は極めて焼成が悪く土師質を呈し、表面はほとんど摩滅している。底部外面は糸切で、器壁は強く外反するものと思われ、9世紀に帰属する可能性がある。底径 7.6cm。

16、17は移動式のカマドである。16は受け部で、径 23.8cm。17は焚口上部の底部分で 6cm の張り出しがある。

18は土鍤である。長さ 5.4cm、最大径 2.4cm、孔径 0.5cm。

6. 6 区の調査

西と南に下がる標高 9.7～10.8m の緩斜面で、本来は低丘陵がさらに西へのびていたが、現道建設の際に法面カットがおこなわれ、調査時には西端が崖になっている。

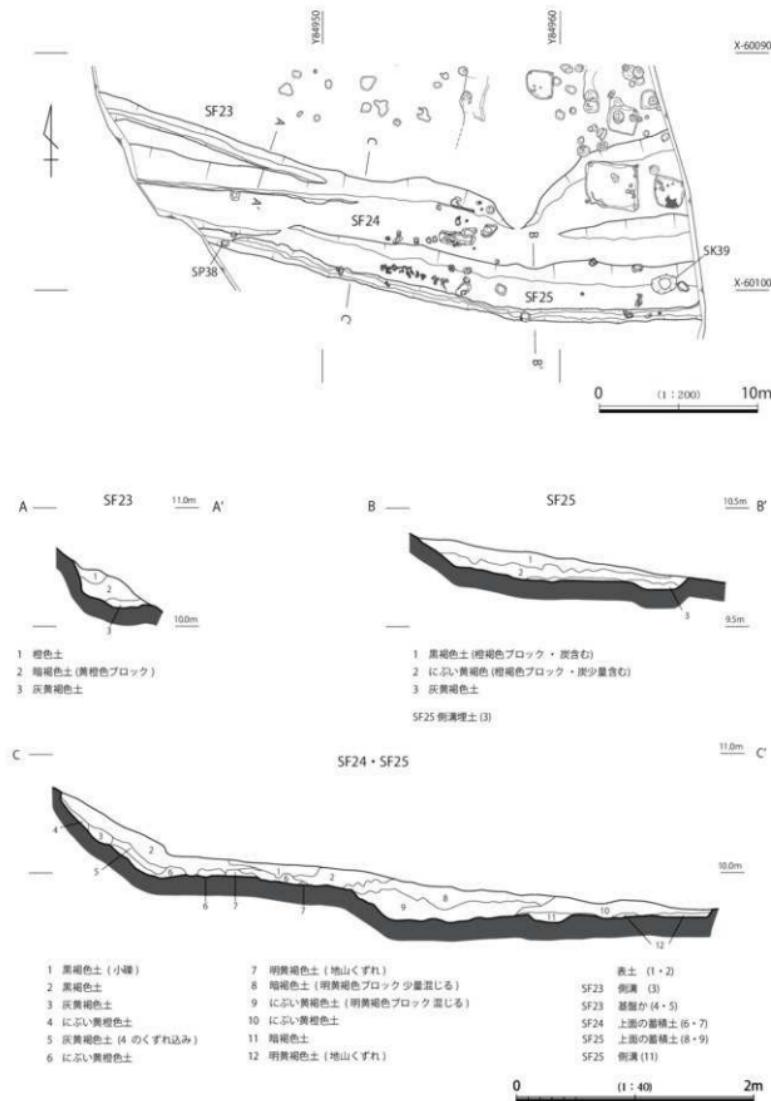
切り合う 3 本の道路遺構 (SF23～25) のほか、土坑とピットを検出した。

(1) 遺構

①道路 SF23 (第 86 図)

切り合う 3 本の道路の北西に位置し、路床標高 10.2m を測る。3 本の道路のうち最も路面標高が高く、南接する SF24 に大きく切られているため、残存する東西長は 10.5m、南北の道路最大幅 1.1m、地山切通しの上端から道路南端までは 1.6m を測る。

切土工法で造られた道路で、路床は地山を比較的平坦に削ったもので、路床の高さは西端で標高 9.8m、東へ 5m の地点で標高 10.13m を測り、若干東に向けて上がっている。北側の切通しの下端に沿っては地山を削った幅 40cm、下端幅 30cm、深さ 3cm 前後の直線状の側溝があり、その断面は極



第86図 SF23～25遺構図

めて浅い丸味を帯びたコの字状を呈している。路盤は残存しておらず、南側の側溝の有無は不明で、道路幅も不明である。

埋土中から古代の遺物は出土しておらず、近世の陶器片が1点出土したことから、近世の道路の可能性が高い。

②道路 SF24 (第86図)

調査区内を東西方向に貫く道路で、明治32年の空中写真に写り、調査前にも道の痕跡を確認することができた。

切土工法で造られた道路で、西端部は北と南の地山を切通しており、路床は標高8.8mと低いが、東に向かって急傾斜で上り、東5m地点で標高9.64mとなり、比高0.84mを測る。おそらく西側の現道から丘陵に上るために造られた道で、本来存在していた丘陵が現道工事に伴ってカットされた後に造られた道と考えられる。西端での切通しの下端幅は1.4mで、東の傾斜が緩やかなところでは1.6～1.9mを測る。道路の西側半分では、西の切通の下端に沿って、上端幅20cm、下端幅10cm、深さ7cm前後の側溝がある。

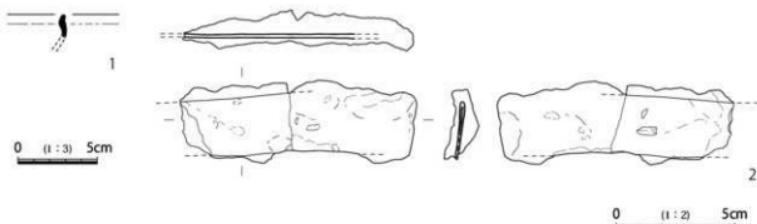
遺物は、鉄製品が1点床面から出土している。包含層から土器類も出土しているが、確実にSF24に伴うものとは断定できない。

③道路 SF25 (第86図)

切り合う3本の道路の南端に位置し、道路の高さは最も低い。北西端がSF24に切られているため、



第87図 SF23出土遺物



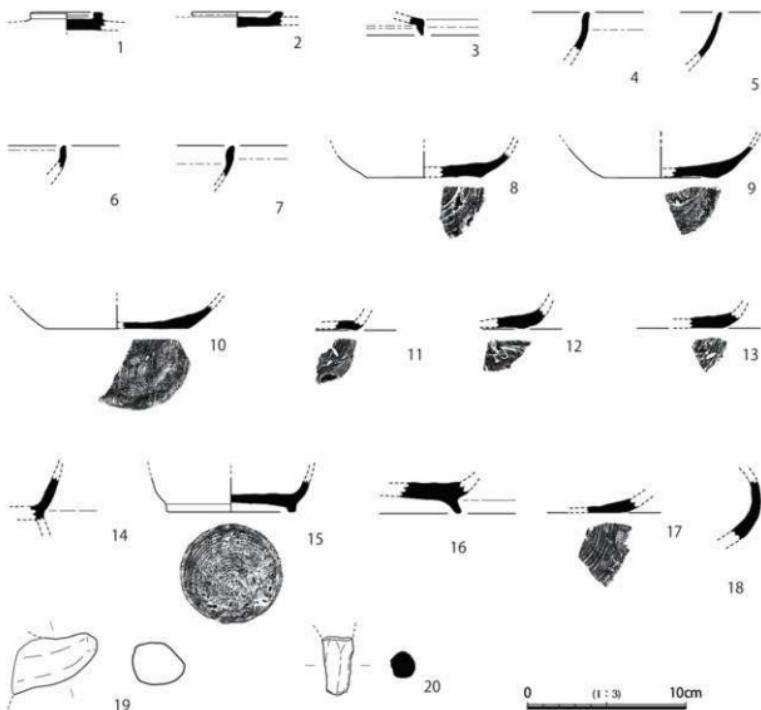
第88図 SF24出土遺物

残存する東西長は21mである。

切土工法で造られた道路で、北の切通は地形に沿って造られており、ルートは丘陵の等高線に沿つてやや南に張り出して弧を描いている。

路床の高さは、西半分が平坦で標高9.6mを測るが、東半分では東に向かっては緩やかに上がり、調査区東端では標高10.0m前後、比高は40cm程度でほぼ平坦な道路といえる。道路の南辺に沿つては幅30～40cm前後、深さ5～10cmの側溝が走るが、北辺では溝が検出されず、片側側溝となる。路盤と路面は残存していない。

側溝から8世紀の土器が出土していることから、8世紀以降の道と考えられる。包含層から土器類土器類が多く出土しているが、確実にSF25に伴うものとは断定できない。



第89図 SF25 埋土出土遺物

(2) 遺物

①道路 SF23 (第87図)

路床近くから、陶器が1点出土している。1は肥前系陶器の大皿の一部で、胎土は赤褐色を呈している。内面は刷毛目文様で、外面は大半が無釉のところに上から滴のように釉が垂れている。18世紀代に作られたものである。

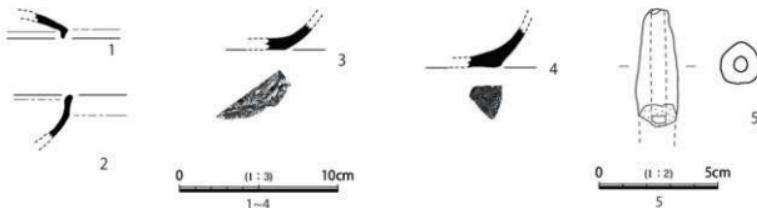
②道路 SF24 (第88図)

1は須恵器の环の口縁部小片である。

2は鉄製品で、片刃で基部が折り曲がることから、先端部を欠損した鎌の可能性がある。刃部は全体的に薄く作られている。刃部幅2.5cm。

③道路 SF25 埋土(包含層) (第89図)

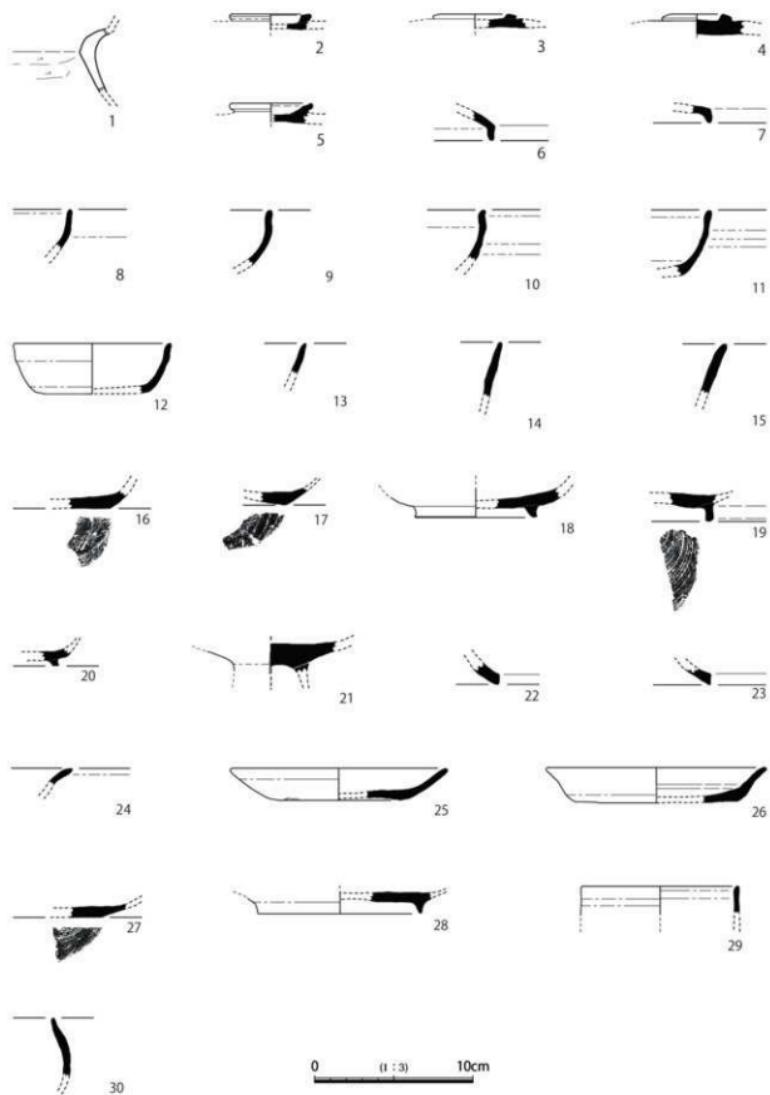
1～18は須恵器である。1～3は蓋で、1は輪状つまみはやや直立気味に低く立ち上がり、調整は内外面とも回転ナデである。内面は非常に滑らかで、転用鏡として使用されている。つまみ径4.6cm。2も低い輪状つまみが付くもので、調整は内外面とも回転ナデである。つまみ径5.7cm。3は口縁部で、端部が下垂するタイプである。いずれも8世紀初頭のもの。4～16は坏で、4～7は器壁が丸味を帯びた口縁部である。8～13は無高台坏の底部で、器壁が丸味を帯びて立ち上がり、底部外面は糸切、器壁内外面は回転ナデで調整されている。8は底径7.3cm、9は底径7.2cm、10は底径9.2cm。14～16は高台付坏の底部付近で、いずれも器壁が丸味を帯びて立ち上がるタイプである。15は底部外面の糸切後に低い高台をつけたもので、底径8.1cm。16は底部外面の糸切がナデ消されたもので、



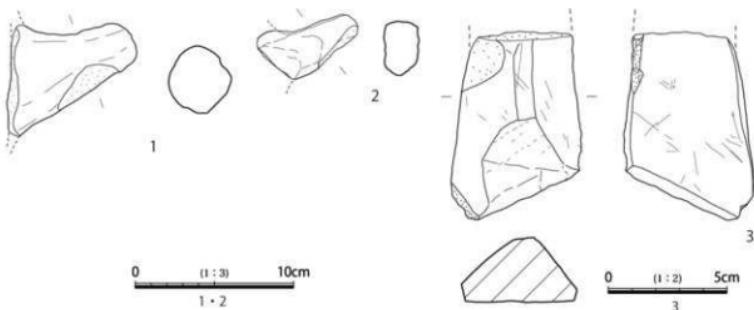
第90図 SF25側溝出土遺物



第91図 SP14出土遺物



第92図 6区遺構外出土遺物(1)



第93図 6区遺構外出土遺物

底に厚みがある。17は皿で、器壁はやや直線的に開いている。18は小型の壺と思われる。

19は土師質の把手で、軽か移動式カマドの一部である。

20は須恵質の土製品で、先細りの棒状を呈しており、先端は若干丸く仕上げてある。ヘラとナデで成形しており、土馬の脚部の可能性がある。径1.5cm。

④道路SF25の側溝(第90図)

土師器と須恵器の小片が出土しており、須恵器4点と土鍤を図化することができた。

第90図1～4は須恵器の环である。1は蓋で、口縁端部が屈曲して下がるタイプで、8世紀初頭。2～4は环で、2は無高台环の口縁部、3、4は底部付近で、器壁は回転ナデ、底部は糸切痕が残る。丸味を帯びて立ち上がる器壁は8世紀代である。5は土師質の土鍤である。一端を欠損するが、長さ5cm以上、最大径1.7cm、孔径0.5cm。

⑤ピットSP38(第91図1)

1は須恵器の高环の环部である。内外面とも回転ナデ調整で、口径16.6cm。

⑥土坑SK39(第91図2)

2は玉籠の剥片で、赤褐色を呈している。縦2.2cm、横2.2cm、厚さ2.5cm、重さ1.86g。

⑦遺構外(第92・93図)

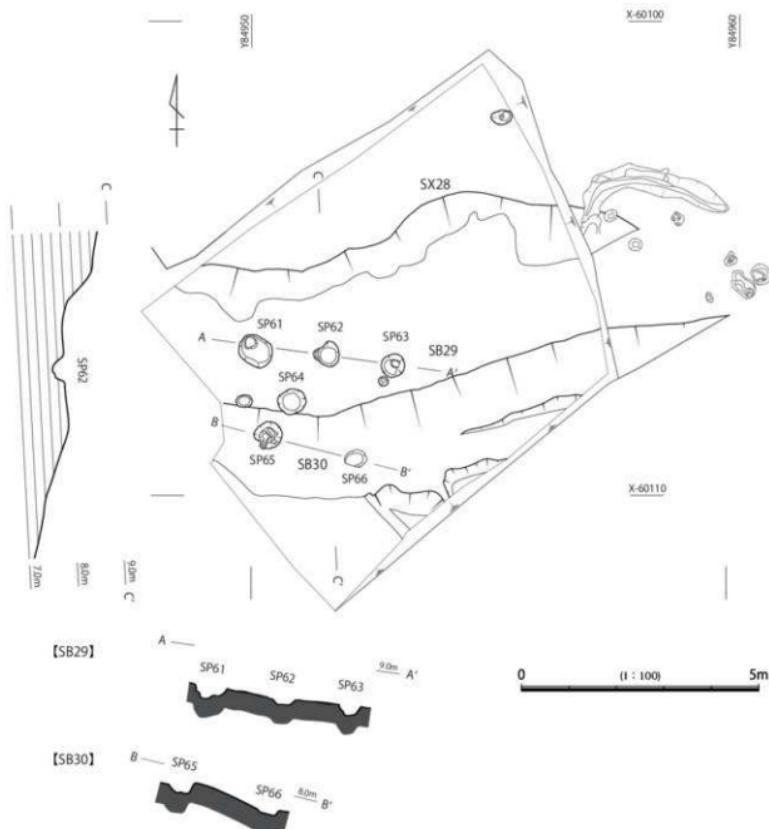
遺物は多量に出土しているが、大部分が小さな破片で、風化したものが多い。丘陵のもっと上の方にあったものが転落し、平坦な道路遺構の上に堆積したものが多いと思われる。

1は土師器の甕の破片である。古墳時代前期頃のものである。

2～30は須恵器である。2～7は蓋で、2～5は低い輪状つまみ部分で、6・7は端部が下垂する口縁端部で、8世紀初頭のものである。2はつまみ径5.2cm、3はつまみ径5.2cm、4はつまみ径4.3cm、5はつまみ径5.3cm。8～20は环で、8～12は器壁が丸味を帯びた口縁部、13～15は器壁が直線的に立ち上がるタイプである。12は口径10.0cm、底径6.0cm、器高3.2cm。16・17は無高台付の底部付近で、底部外面は糸切である。18～20は高台付の环で、器壁は丸味を帯びて立ち上がるもので、

底部は糸切後に高台を貼り付けている。18は底径7.6cm。21～23は高環で、21は環と脚の接合部、22・23は脚端部である。24～27は無高台の皿である。24～26は器壁が丸味を帯びて立ち上がっている。風化のため調整は不明である。25は口径13.7cm、底径8.7cm、器高2.0cm。26は口径14.0cm、底径10.1cm、器高2.3cm。28は高台付の皿で、風化が著しい。底径10.2cm。29は口縁部が直立するもので、器種は不明である。口径10.0cm。30は仏鉢形碗の口縁部分である。

第93図1・2は土師質の把手で、懶か移動式カマドの一部である。3は砥石である。断面は不整形な6角形で、全面が使用されている。一端を欠損しており、全長不明、幅5.3、厚さ2.7cm。

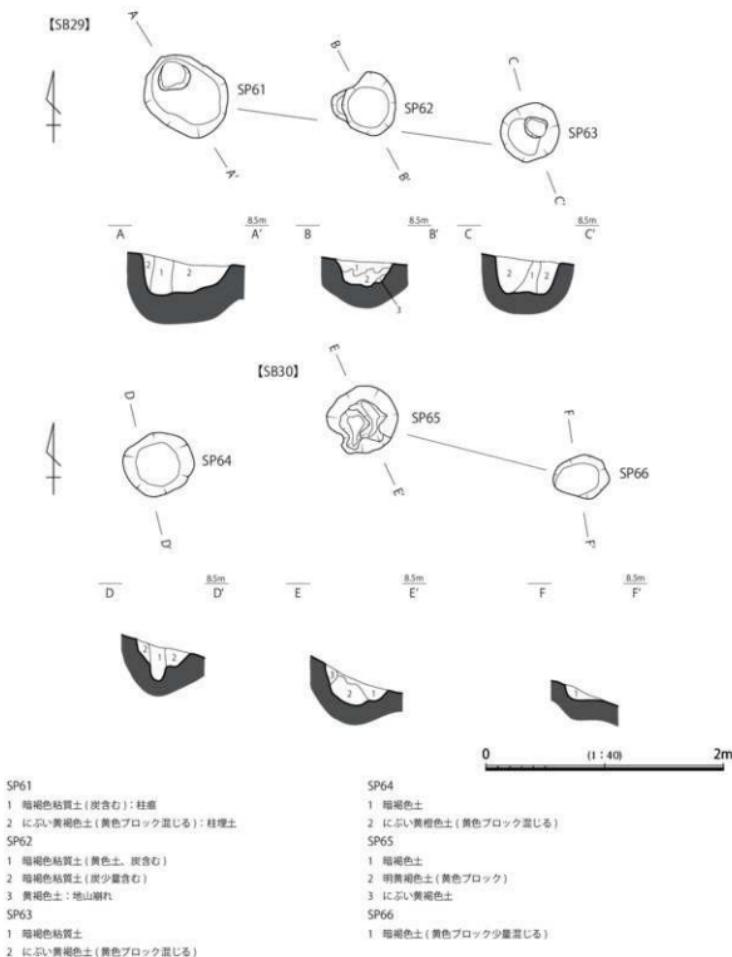


第94図 SX28とSB29・30遺構図

7. 7区の調査

道路SF23の南西部に位置する、標高7.0～9.5mの緩やかな傾斜地で、丘陵の裾部にあたり、現道の東に接した場所である。

西寄りの傾斜が緩やかなところで、加工段1カ所(SX28)と、SX28によって造られた平坦地で掘



第95図 ピット断面図

立柱建物跡(SB29)の一部、その南で掘立柱建物跡(SB30)の一部を検出した。そのほか、ピット4基(SP64ほか)を検出しているが、上部が削られて極めて浅い状況であった。

東寄りのやや傾斜が急な場所では、溝2本(SD26・27)とピット15基を検出した。

(1) 遺構

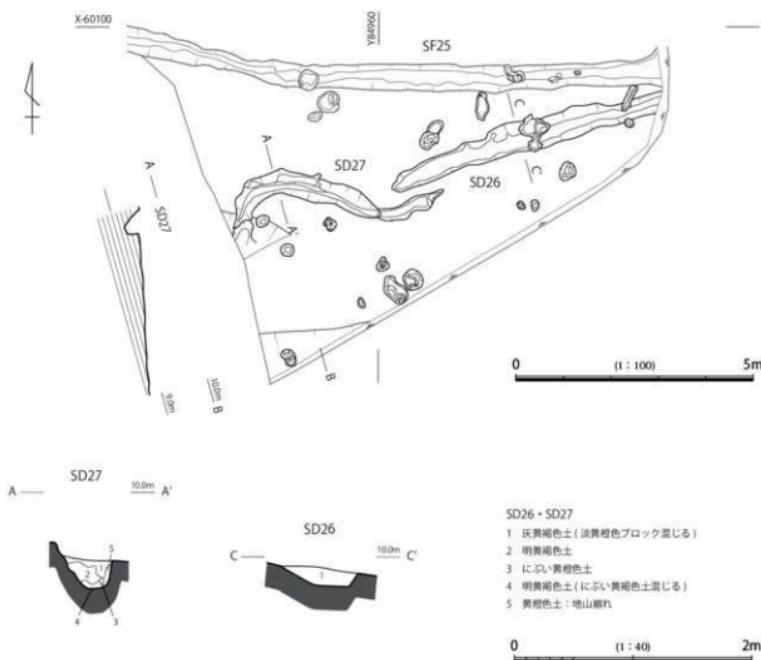
①加工段 SX28(第94図)

山手の地山を東西方向に0.5mカットして、標高8.0mの平坦面を造り出している。地山カットのラインは上端下端とも直線ではなく、特に下端は不規則な曲がりが著しく、壁際溝は見られない。南北幅は2.5m前後で、南は東西方向の直線的な地山カットがおこなわれている。

さらに西の調査区外に続いているが、西は現道建設のため既に削平されている。

②掘立柱建物跡 SB29(第94・95図)

SX28で造り出された平坦地のA-A'ライン上に、西からSP61~63の柱穴3基がならぶ。南は東西に地山がカットされており、対応する柱穴列は残存していない。柱間の芯々距離はSP61~SP62



第96図 SD26・27遺構図

が1.6m、SP62—SP63が1.4mである。東西2間以上の建物跡である。

柱穴の断面を観察すると、SP61、63に柱の痕跡があり、底部には柱の丸い圧痕がみられた。SP61、62の埋土から須恵器と土師器の小さな破片が出土した。詳細な時期は分からぬが、古代以降のものである。

③掘立柱建物跡 SB30(第94・95図)

掘立柱建物跡 SB29の東西ライン(A—A')に平行するピット2基(B—B')を検出した。A—A'に対応しないことから別の建物跡の可能性がある。両ピットは著しく削平されて柱痕は確認できないが、SP65—SP66の芯々距離は1.8mで、底部の標高がほぼ同じである。

遺物は出土していない。

④溝 SD26(第96図)

等高線と平行して掘られた、東西方向の直線的な溝で、6.1mを検出したが、さらに東の調査区外に続いている。上端幅64cm、下端幅28cm、深さ13cmを測り、埋土は灰黄褐色土1層で、風化した土師器の小片が出土した。

⑤溝 SD27(第96図)

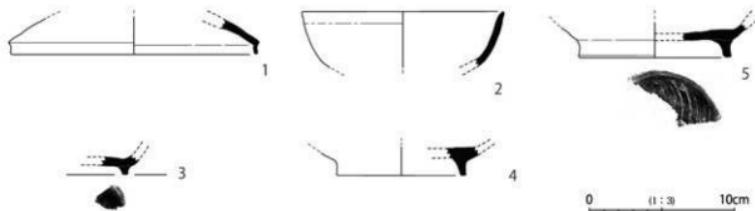
平面プランは山手に向かって張り出した、弧を描く溝である。全長4.5m、上端幅50cm、下端幅20cm、深さ35cmを測る。遺物は出土していない。

(2) 遺物

①遺構外(第97図)

上層では現代の陶磁器や瓦が多く出土し、その中に古代の土器の小片も混じて出土した。後世の搅乱の影響を大きく受けている。

1～5は須恵器である。1は蓋の口縁で、端部が下垂するタイプである。8世紀初頭のもの。口径15.6cm。2は壺の口縁部で、器壁は丸味を帯びている。口径12.8cm。3～5は高台付壺の底部付近である。3は高台から器壁が丸味を帯びて立ち上がるるもの。4は破片が小さくて分かりにくいが、高台からやや離れて器壁が立ち上がるるもので、器壁の形状は不明である。底径8.2cm。5は高台から器壁が直線的に開くもので、8世紀後半以降のもの。底径9.5cm。



第97図 8区遺構外出土遺物

第3節 総括

朝酌菖蒲谷遺跡は朝酌渡があった大橋川から程近い場所にあり、魚見塚遺跡で見つかった柱北道の推定ラインの東側に接する丘陵とその斜面に位置している。現在では現道敷設のため、西の丘陵端部が削平を受けているが、本来は低い丘陵がもう少し西へのびていたようである。

本遺跡を調査した結果、古墳時代前期と奈良～平安時代の遺構群を検出した。以下では今回の調査成果を時代別に要約記述するとともに、地域の歴史の中での位置づけや課題を整理しまとめたい。

1. 古墳時代前期

1区で古墳 SZ01 を検出した。

古墳 SZ01 は方墳の一隅を検出した状況で、墳丘の半分以上は東の調査区外にあって主体部は検出されなかった。地山の削り出しとわずかな盛土による築造状況が確認されたこと、墳裾にあたる位置で古墳時代前期の土器棺墓 3 基 (ST02～04) が集中して検出されたことを傍証として、古墳時代前期の古墳と考える。朝酌地域で初めて見つかった前期古墳である。⁽¹⁾

また、奈良時代の遺物が出土しているものの、4 区の L 字状の溝 (SD12) は、1 辺 12m 程度を測る方墳の周溝であった可能性が考えられる。

土器棺墓 3 基は必要最小限の掘り方に、土師器の壺を正位置で据えているところに特徴が見出せる⁽²⁾。土器棺に使用された土師器の壺はわずかに平底が残るもので、古墳時代前期の中でも早い時期に相当する。

2. 古代（奈良・平安時代）

2 区では東西方向の溝 (SD06)、3 区では 3 基の加工段 (SX07～09) を検出し、薄い包含層から 8 世紀前半を中心とする遺物が少量出土した。

4 区では溝 SD12 に囲まれた緩傾斜地で、同じ場所で建て替えが行われた掘立柱建物跡 2 棟を検出した。柱穴はどれも小さく、しっかりした建物ではないが、溝 SD12 から 8 世紀半ば～後半の須恵器と、脚付円面鏡の一部が出土した。

5 区では加工段が同一場所で 2 回造り直されている状況 (SX15～17) を確認した。加工段の半分以上は東の調査区外に続いているとみられ、これに伴う建物跡を復元することはできなかった。最も北西に張り出して造られた加工段 SX16 の壁際から土製支脚と 8 世紀前半の須恵器の壺が出土し、周囲に点在するピット 3 基からは 8 世紀初頭の須恵器が出土している。奈良時代前半にはここで生活が営まれていたと考えられ、5 区下方にある 6 区の道路遺構 SF25 の平坦面から同時期の須恵器の小さな破片が多量に出土している。

また、これらのほかに平面プラン正方形の性格不明の遺構 4 基 (SX18～21) を検出した。この内 SX21 では床面が被熱していることを確認した。SX18～20 では被熱は見られなかったが、遺構内は炭と焼土が充填されている状況を確認した。一般的な集落遺跡ではあまり見られない遺構で、現時

点では類例がなく、性格は不明である。SX18 からは 8 世紀初頭～9 世紀、SX19 からは 8 世紀中葉～9 世紀初頭、SX20 からは 8 世紀前半～8 世紀末の須恵器が出土しており、SX21 は遺物がみられない状況であった。したがって、SX18～21 は加工段 SX15～17 が埋没した後に造られた遺構であり、灰釉陶器が出土したピットが存在することからも、性格は分からぬが、9 世紀初頭頃にこの場所では一般住居とは異なる何らかの施設が存在していたと考えられる。

6 区では道路遺構 SF25 を検出した。北西部を現代の道に切られているが、比較的残りが良い。南側溝を持つ片側側溝の道路で、側溝埋土から 8 世紀初頭～中頃の須恵器が出土している。柱北道と同時期に存在した道路の可能性がある。^{註5}

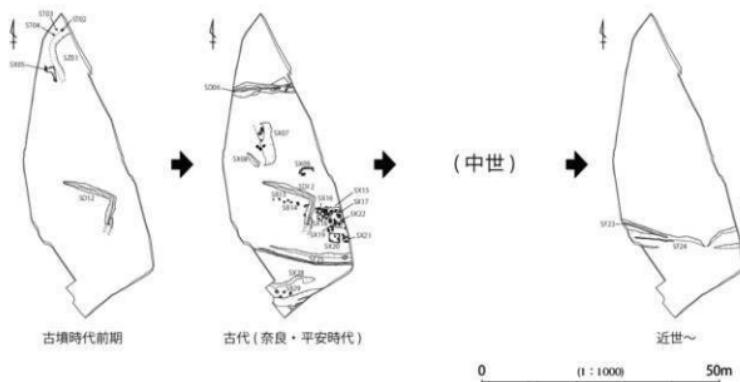
遺物としては、溝 SD12 から脚付円面鏡の脚付近の破片 1 点が出土したほか、包含層から輪状つまみを持つ蓋の内面を使用した転用碗 1 点が出土している。識字層や脚付円面鏡を所有できる階層の人々の居住もしくは往来を示すものである。

3. 近世以降

古代道路 SF25 とほぼ重複する位置で道路遺構 SF23 を検出した。大半を現代の道に切られ、北西部がわずかに残り、北側溝を持つものである。路床近くで 18 世紀の陶器が出土していることから、その頃には存在していた道路と考えられる。

この道の周辺で建物跡は検出してないが、SF23 は側溝を持つ道路であることから、この道路の東奥あたりの平坦地に住居跡が存在していた可能性がある。

遺物の出土量は少なく、陶磁器の破片少量と琉球通寶 1 枚が出土している。



第 98 図 朝酌菖蒲谷遺跡 遺構変遷図

3. 結語

今回の調査では、朝酌地域で初めて古墳時代前期の墓を確認することができた。また、古墳時代から古代に至る遺構を検出したが、明確に中世のものと言える遺構は検出されず、時代が下って江戸時代の遺構が検出された。このことは、中世にはこの付近での人々の活動が途絶えたことを示唆するものである。

この調査地で検出した遺構で、特に注目すべきものは、古代道の可能性が高いSF25(道路遺構)と、これに近接して存在する同時期の掘立柱建物跡群である。

調査地に隣接する魚見塚遺跡では、枉北道を検出しており(第46図)、これと同時期の可能性が高いSF25(道路遺構)は、枉北道に直交するように存在する。ただし、道路幅は上端幅約2.5mと狭く、山際のラインに沿ってカーブを描くように造られているため、直線で造られる規格的な官道とは形状が異なるものである。よって、SF25(道路遺構)が官道の一部である可能性は低いものの、SF25(道路遺構)に近接して同時期の掘立柱建物が存在することも含めると、枉北道の枝道のような役割を持つ可能性が考えられる。

今回の調査では、掘立柱建物群の西端部をわずかに検出しただけであり、この建物群はさらに東側の谷奥に道路遺構とともに続くようであった。

今回の調査を端緒として、さらに広い範囲での景観復元を試みることにより、古代の朝酌渡の様相が見えてくるであろう。^{註6}

【第4章 註】

1. 古墳時代前期には古墳の埴輪に土器棺を埋葬することが多く、松江市内では北小原古墳群、袋戸4号墳、大佐古墳群などに例がみられる。
2. 註1で列挙した遺跡の土器棺墓は、比較的大きな壺を完形もしくは頸部まである状態で使用し、大きな振り方の中で、横もしくは斜めにして埋葬している。
3. 日鉄住金テクノロジー株式会社 八幡事務所TACセンターに分析を委託した。
4. 脚付円面鏡は出雲国府跡出土例がある。
5. ただし、SF25の時期については、近世の遺物は出土していないが、調査指導にあたった大橋泰夫氏は近世以降の可能性を考えている。
- 6.『出雲国風土記』「島根郡条」に以下の記載がある。

「朝酌渡。広さ八十步許なり。国序より海邊に通ふ道なり。」

この朝酌渡の位置は明確にされていないが、島根県古代文化センター2014「朝酌渡」『解説 出雲国風土記』では、「確定するのは難しいが、出雲国府から延びる枉北道は矢田の渡しから井ノ奥地区にかけての辺りで渡河することにあると想定されるので、このあたりに朝酌渡が推定できるであろう。」としている。

魚見塚跡 遺物観察表

土 器

辨認番号	種類	器種	法量(cm)	胎 土	焼成	色 調	調査・手法の特徴	残 存	備 考
26-1	直鉢	釜	—	1mm前後の砂粒含む	良	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナダ、回転未切 内 回転ナダ	3%	
26-2	直鉢	釜	—	微細粒含む	良	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナダ、回転未切 内 回転ナダ後不定方向のナダ	10% 5%	
26-3	直鉢	坪	横径(0.60)	1mm前後の砂粒含む	良	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナダ、静止未切 内 回転ナダ	底部 10%	
26-4	直鉢	坪	横径(1.10)	1mm前後の砂粒含む	良	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナダ、静止未切 内 回転ナダ	底部 20%	
26-5	直鉢	坪	—	1mm前後の砂粒含む	良	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナダ、回転未切 内 ナダ	底部 5%	
26-6	直鉢	坪	—	1mm前後の砂粒含む	良	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナダ、回転未切 内 回転ナダ	底部 5%	
26-7	直鉢	坪	—	1mm前後の砂粒含む	良	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナダ、回転未切 内 回転ナダ	底部 5%	
27-1	陶器	瓶	—	衝	良	—	外 回転ナダ 内 砂粒	100% 10%	在地系
27-2	陶器	瓶	—	衝	良	—	外 砂粒 内 ストローピーク単位 12本	底部 5%	在地系
27-3	陶器	瓶	底径(0.30)	衝	良	—	外 高青はん離 内 砂粒	底部 15%	在地系 (右辺境)
27-4	罐	瓶	H径(0.4)	衝	良	—	外 回転ナダ (壁紋付) 内 完成	100% 5%	裏地 (左製造) 10日既成
28-1	直鉢	高台付坪	—	1mm前後の砂粒含む	良	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナダ 内 回転ナダ	底部 5%	
28-2	直鉢	壺	—	1mm前後の砂粒含む	良	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナダ、風化 内 回転ナダ、風化	40% 40%	
29-1	直鉢	坪	底径 2.0	1mm前後の砂粒含む	良	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナダ 内 回転ナダ	底部 40%	
30-1	直鉢	坪	底径(0.6)	1mm前後の砂粒含む	良	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナダ、回転未切 内 回転ナダ	底部 25%	
30-2	直鉢	坪	—	1mm前後の砂粒含む	良	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナダ、回転未切 内 回転ナダ	底部 5%	
30-3	直鉢	甕	—	微細粒含む	良	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナダ 内 回転ナダ	100% 底部 在地系 (自然離) 既成	
31-1	直鉢	坪	—	砂粒含む	良	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナダ、回転未切 内 ナダ	底部 5%	
31-2	直鉢	甕	—	微細粒含む	良	外 黄褐色 内 黄褐色	外 ナダ、タタキ 内 ナダ、タタキ	底部 5%	
32-1	陶器	壺	—	微細粒含む	良	—	外 砂粒 内 回転ナダ	底部 5%	

土 製 品

辨認番号	種類	器種	法量(cm)	胎 土	焼成	色 調	調査・手法の特徴	残 存	備 考
26-8	土陶器	(把手)	—	—	良	外 浅黄褐色 内 浅黄褐色	内 黄褐色 内 黄褐色	100%	

朝酌菖蒲谷遺跡 遺物観察表

土 器

辨認番号	種類	器種	法量(cm)	胎 土	焼成	色 調	調査・手法の特徴	残 存	備 考
25-1	玉製品	瓶	横 1.0 幅 1.6 厚 1.2 重 3.0	碧玉	—	翡翠色	—	100%	
57-1	土陶器	甕	横径(2.15) 底径(1.53) 高さ(3.22) 厚さ(4.1)	1mm前後の砂粒含む	良	外 浅黄褐色 内 浅黄褐色	外 硬ナダ、ハナメ、風化 内 硬ナダ、ケズリ	80%	
57-2	土陶器	甕	横径(2.15) 底径(1.53) 高さ(5.05) 厚さ(5.0)	1mm前後の泥石・石片 含む	良	外 浅黄褐色 内 浅黄褐色	外 硬ナダ、ハナメ、ハナメ硬ナダ、 風化 内 硬ナダ、ナシナシ、ケズリ	40%	
58-1	土陶器	甕	横径(2.15) 底径(2.74) 高さ(5.0) 厚さ(5.0)	1mm前後の砂粒含む	良	外 浅黄褐色 内 浅黄褐色	外 硬ナダ、ハナメ 内 ケズリ、風化	底部～腹部 40%	
58-2	土陶器	甕	横径(3.40)	1-2mmの砂粒含む	良	外 硬褐色 内 硬褐色	外 硬化 内 硬化	腹部～底部 50%	外端に削り付着
59-1	土陶器	甕	横径(2.02) 底径(1.52) 高さ(4.1)	1mm前後の砂粒含む	良	外 硬褐色 内 硬褐色	外 硬ナダ 内 硬ナダ	底部 5%	
61-1	直鉢	坪	横径(0.20) 底径(0.19)	微細粒含む	良坪	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナダ 内 回転ナダ	100% 10%	
65-1	直鉢	甕	横径(2.5) 底径(2.5) つまみ縁 6.0	1mm前後の砂粒含む	良坪	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナダ、回転ナダ底面ナダ、 回転ナダケズリ底面ナダナダ 内 回転ナダ	80%	外端に削れき裂、 底部
65-2	直鉢	坪	横径(0.4) 底径(0.39)	微細粒含む	中中	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナダ 内 回転ナダ	20%	
65-3	直鉢	坪	横径(0.4) 底径(0.39)	1mm前後の砂粒含む	中中	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナダ 内 回転ナダ	40%	
65-4	直鉢	高台付坪	—	1mm前後の砂粒含む	良	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナダ 内 ナダ、回転ナダ	5%	
65-5	直鉢	甕	—	1mm前後の砂粒含む	良	外 にひびき裂 内 黄褐色	外 回転ナダ 内 回転ナダ	5%	外端に削り付着
66-1	直鉢	甕	—	1mm前後の砂粒含む	良	外 にひびき裂 内 にひびき裂	外 硬化 内 硬化	100% 100%	外端に削り付着
66-2	直鉢	甕	つまみ縁 4.6	1mm前後の砂粒含む	中中	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナダ、回転ナダケズリ 内 回転ナダ後不定方向ナダ	30%	輪状つまみ
66-3	直鉢	坪	横径(0.4) 底径(0.39)	微細粒含む	良好	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナダ 内 回転ナダ	100% 20%	

遺物觀察表

標識番号	種類	器種	法量 (cm)	断土	構成	色調	調整・手法の特徴	現存	備考
66-4	漆器類	坪	1.05 (1.0)	1mm前後の砂粒含む	粗質	外 内 底面 側面	外 内 底面	1.04% 15%	
66-5	漆器類	坪	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
66-6	漆器類	坪	1.05 (1.3)	1mm前後の砂粒含む 底面 1.9	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
66-7	漆器類	漆桶付土器	1.05 (1.5)	1mm前後の砂粒含む 底面 1.9 高さ 14.0	粗質	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	内面にへら記号
70-1	漆器類	坪	—	細砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
70-2	漆器類	坪	—	細砂粒含む	粗質	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
70-3	漆器類	坪	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
71-1	漆器類	坪	底径 7.2	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 45%	
72-1	漆器類	坪	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
79-1	漆器類	坪	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
79-2	漆器類	高台付坪	—	1mm前後の砂粒含む	粗質	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
80-1	漆器類	塗	—	細砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
80-2	漆器類	塗	—	細砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
80-3	漆器類	坪	1.05 (1.2)	細砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
80-4	灰陶陶器	塗	底径 6.30	塗	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 20%	
81-1	漆器類	塗	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
81-2	漆器類	坪	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
81-3	漆器類	坪	—	1mm前後の砂粒含む	粗質	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 10%	
81-4	漆器類	坪	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
82-1	土師器	塗	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	表面に環状
82-2	漆器類	塗	底径 3.0 高さ 2.0 底径 2.4	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 50%	
82-3	漆器類	塗	1.05 (1.3)	細砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
82-4	漆器類	坪	底径 3.6	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
83-1	漆器類	坪	—	細砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
83-2	漆器類	坪	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
83-3	漆器類	坪	—	細砂粒多く含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
83-4	漆器類	坪	—	細砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
83-5	漆器類	高坪	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
84-1	土師器	塗	1.05 (1.7) 底径 5.0 高さ 1.5	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 15%	表面に環状
84-2	土師器	塗	1.05 (1.8) 底径 6.0 高さ 1.6	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 20%	
84-3	土師器	塗	1.05 (1.8) 底径 6.0 高さ 1.6	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 20%	表面に環状
84-4	土師器	塗	1.05 (2.0) 底径 1.9 高さ 1.9	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 50%	
84-5	土師器	塗	1.05 (2.2) 底径 2.0 高さ 1.9	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 50%	
84-6	土師器	塗	1.05 (2.6) 底径 2.0 高さ 2.0	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 30%	表面に環状
84-7	漆器類	坪	1.05 (1.8) 底径 8.0	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 30%	
84-8	漆器類	坪	1.05 (2.1)	1mm前後の砂粒を多く含む	粗質	中 外 底面	外 内 底面	1.04% 20%	
85-1	土師器	塗	1.05 (2.5) 底径 2.1 高さ 2.0	1~2mmの砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 20%	
85-2	土師器	塗	—	細砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
85-3	土師器	塗	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
85-4	漆器類	塗	—	細砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
85-5	漆器類	塗	1.05 (1.5)	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 10%	
85-6	漆器類	坪	1.05 (1.7) 底径 7.1 高さ 4.0	細砂粒含む	粗質	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 80%	
85-7	漆器類	坪	—	細砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
85-8	漆器類	坪	—	細砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
85-9	漆器類	坪	—	細砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
85-10	漆器類	坪	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 5%	
85-11	漆器類	坪	底径 7.7	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 底面	外 内 底面	1.04% 25%	

探査番号	種類	器種	法長(cm)	胎 土	焼成	色 調	調整・手法の特徴	残 存	備 考
85-12	灰陶器	坪	—	1mm前後の砂粒含む 中空 粗質	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	外 内 外 回転ナダ 回転ナダ 回転ナダ	既存 5%	
85-13	灰陶器	皿	—	微砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 5%	
85-14	灰陶器	盆	C径 17.2	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 10%	
85-15	灰陶器	皿	底径 7.6	1mm前後の砂粒含む 微質	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	
85-16	土器器	甕	C径 23.8	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
87-1	陶器	大盆	—	微砂粒含む	—	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
88-1	灰陶器	坪	—	微砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
89-1	灰陶器	蓋	つまみ径(4.8)	微砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
89-2	灰陶器	蓋	つまみ径(5.7)	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
89-3	灰陶器	蓋	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
89-4	灰陶器	坪	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
89-5	灰陶器	高坪(片茎)	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
89-6	灰陶器	坪	—	微砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
89-7	灰陶器	坪	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
89-8	灰陶器	坪	底径(7.3)	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
89-9	灰陶器	坪	底径(7.2)	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
89-10	灰陶器	坪	底径(9.2)	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
89-11	灰陶器	坪	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
89-12	灰陶器	坪	—	微砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
89-13	灰陶器	坪	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
89-14	灰陶器	高台付坪	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
89-15	灰陶器	高台付坪	底径 8.1	微砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
89-16	灰陶器	高台付坪	—	微砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
89-17	灰陶器	皿	—	微砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
89-18	灰陶器	小型壺	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
90-1	灰陶器	蓋	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
90-2	灰陶器	坪	—	微砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
90-3	灰陶器	坪	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
90-4	灰陶器	坪	—	微砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
91-1	灰陶器	高坪	C径(16.8)	1～2mm程度の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
92-1	土器器	甕	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
92-2	灰陶器	蓋	つまみ径(5.2)	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
92-3	灰陶器	蓋	つまみ径(5.2)	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
92-4	灰陶器	蓋	つまみ径(4.3)	微砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
92-5	灰陶器	蓋	つまみ径(5.3)	微砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
92-6	灰陶器	蓋	—	微砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
92-7	灰陶器	蓋	—	微砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
92-8	灰陶器	坪	—	微砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
92-9	灰陶器	坪	—	微砂粒若干含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
92-10	灰陶器	坪	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
92-11	灰陶器	坪	—	1～2mmの砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
92-12	灰陶器	坪	C径(10.0) 底径(8.0) 高さ(2.2)	微砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
92-13	灰陶器	坪	—	微砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
92-14	灰陶器	坪	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
92-15	灰陶器	坪	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
92-16	灰陶器	坪	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存
92-17	灰陶器	坪	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外 内 外	灰褐色 灰褐色 灰褐色	既存 既存 既存	既存 既存 既存

遺物觀察表

標識番号	種類	器種	法量 (cm)	胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	残存	備考
92-18	実測器	高台付耳	底径 (7.8)	細かい岩石・石英含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 回転ナメ 内: ナメ	既述 30%	
92-19	実測器	高台付耳	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 回転ナメ 内: 回転ナメ	既述 5%	
92-20	実測器	高台付耳	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 回転ナメ 内: 回転ナメ	既述 5%	
92-21	実測器	高耳	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 回転ナメ 内: ナメ	既述 5%	形状落し-4ヶ所
92-22	実測器	耳	—	微細粒含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 回転ナメ 内: ナメ	既述 5%	
92-23	実測器	耳	—	微細粒含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 回転ナメ 内: ナメ	既述 5%	
92-24	実測器	耳	—	微細粒含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 回転ナメ 内: ナメ	既述 5%	
92-25	実測器	皿	口径 (13.2) 底径 (8.7) 高さ (2.0)	1-2mmの砂粒含む 微細粒含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 風化 内: 風化	既述 30%	
92-26	実測器	皿	口径 (14.8) 底径 (10.1) 高さ (2.3)	微細粒含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 風化 内: 風化	既述 20%	
92-27	実測器	皿	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 回転ナメ 内: 回転ナメ, ナメ	既述 5%	
92-28	実測器	高台付耳	底径 (10.2)	微細粒含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 回転ナメ 内: ナメ	既述 20%	
92-29	実測器	平頭	口径 (10.0)	1mm前後の砂粒含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 回転ナメ 内: 回転ナメ	既述 5%	
92-30	実測器	圓筒形土器	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 回転ナメ 内: 回転ナメ	既述 5%	
97-1	実測器	蓋	口径 (15.6)	微細粒含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 回転ナメ, 滅廻り 内: ナメ	既述 10%	外側に垂れ付きの痕跡
97-2	実測器	耳	口径 (12.8)	1mm前後の砂粒含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 回転ナメ 内: ナメ	既述 10%	
97-3	実測器	高台付耳	—	微細粒含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 回転ナメ, 回転ナメ	既述 3%	
97-4	実測器	高台付耳	底径 (8.2)	1mm前後の砂粒含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 回転ナメ 内: ナメ	既述 20%	
97-5	実測器	高台付耳	底径 (9.5)	1mm前後の砂粒含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 回転ナメ, 回転ナメ後不定 内: ナメ	既述 20%	

土 製 品

標識番号	種類	器種	法量 (cm)	胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	残存	備考
59-2	土師質	カマド	高さ (4.0)	1mm前後の砂粒含む	良好	外: 明褐色 内: 明褐色	外: 陶土え、ナメ 内: 陶土え、ナメ	既述 2%	
66-8	土師質	(把手)	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 風化 内: 風化	既述 100%	
70-4	実測器	縦耳円筒形	—	微細粒含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 回転ナメ 内: 回転ナメ	既述 5%	
71-2	土師瓶	土瓶	底径 (3.8) 高さ (1.7) 内径 (2.2)	微細粒含む	良好	外: 黄褐色 内: 淡黄色	外: 手づくね 内: 手づくね	既述 90%	
79-3	土師質	土製支輪	底径 (20.4) 高さ (13.8)	1mm前後の砂粒含む	良好	外: 明褐色 内: 明褐色	外: ナメ 内: 土造平底支輪に利害	既述 50%	
81-5	土師質	カマド	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外: 明褐色 内: 明褐色	外: ケズリ、風化著しい 内: ナメ	既述 3%	
82-5	土師質	土瓶	高さ (5.8) 内径 (2.3) 底径 (0.6)	1mm前後の砂粒含む	良好	外: 陶土褐色 内: 陶土褐色	外: 陶土褐色 内: 陶土褐色	既述 90%	
85-17	土師質	カマド	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外: 陶土褐色 内: 陶土褐色	外: 風化 内: 風化	既述 3%	
85-18	土師質	土瓶	高さ (5.4) 内径 (2.4) 底径 (0.5)	1mm前後の砂粒・細かい 石英含む	良好	外: 陶土褐色 内: 陶土褐色	外: 手づくね 内: 手づくね	既述 100%	
89-19	土師質	(把手)	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外: 陶土褐色 内: 陶土褐色	外: 風化著しい 内: 風化著しい	既述 90%	
89-20	実測器	土器か	目 1.5	微細粒含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: ナメ 内: ナメ	既述 1本	
90-5	土師質	土瓶	底径 (4.0) 高さ (1.7) 内径 (0.5)	細かい岩石・石英含む	良好	外: 陶土褐色 内: 陶土褐色	外: 手づくね 内: 手づくね	既述 80%	
93-1	土師質	(把手)	—	1mm前後の砂粒含む	良好	外: 明褐色 内: 明褐色	外: 風化著しい 内: 風化著しい	既述 100%	
93-2	土師質	(把手)	—	微細粒含む	良好	外: 明褐色 内: 明褐色	外: 風化著しい 内: 風化著しい	既述 80%	

石 製 品

標識番号	種類	法量 (cm・g)			石材	色調	備考
91-2	剝片	幅 2.2 厚 2.5 幅 1.86			玉髓	暗赤褐色	
93-3	砥石	幅 7.9 厚 5.3 幅 2.7 重 120.54			石英	浅褐色	

金 屬 製 品

標識番号	種類	材質	法量 (cm・g)			備考
05-6	セリガシナカ	鉄	長さ 2.0 厚 0.5 重 892			
88-2	鍔か	鉄	目さ 2.9 厚 1.0 重 46.04			

錢 貨

標識番号	種類	直 径 (cm)	孔 径 (cm)	厚 さ (cm)	質 量 (g)	残存率 (%)	質 量 / 直 径	備 考
66-9	圓環通貫	4.9	0.7	0.3	22.80	100	0.46	

写真図版



第1次調査区で検出した道路遺構（南から）



魚見塚遺跡周辺 空中写真（南東から） *写真右上の山が和久羅山



魚見塚遺跡周辺 空中写真（北から） *写真中央奥の山が茶臼山

図版2 魚見塚遺跡（第1・2次調査区）



魚見塚遺跡 俯瞰写真（写真右が北方向）



魚見塚遺跡 調査前風景（北から）



魚見塚遺跡 調査終了後全景写真（南から）

図版4 魚見塚遺跡（第1・2次調査区）



魚見塚遺跡 遺構検出状況（南から）



SD02、SX01 検出状況（南から）



T0201 遺構検出状況（西から）



SX01 波板状凹凸面検出状況(西から)



SX03、SD02 検出状況(南から)

図版 6 魚見塚遺跡（第1・2次調査区）



調査区北半部検出状況（南西から）



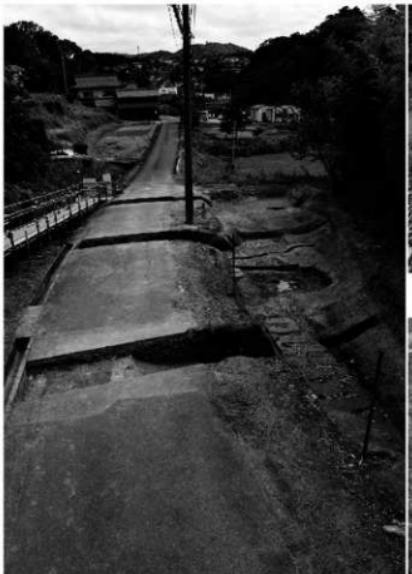
T0202 遺構検出状況（西から）



T0202 遺構検出状況（東から）



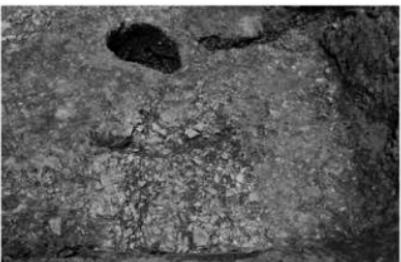
SD08、SD05、SX03 検出状況（南から）



T0201～T0203 断割状況（北から）



SX03、SD05 土層断面検出状況（南東から）



SD10・SE13 検出状況（南から）

図版 8 魚見塚遺跡（第3次調査区）



T0304 北壁土層断面検出状況（南東から）



T0305 北壁土層断面検出状況（南西から）



T0306 北壁土層断面検出状況（南東から）



T0407 検出状況（西から）



T0408 検出状況（西から）



T0409 検出状況（南東から）

図版 10 朝酌菖蒲谷遺跡



朝酌菖蒲谷遺跡 調査完了後全景写真(南から)



朝酌菖蒲谷遺跡 1区北壁土層断面検出状況（北西から）



1区 ST02 検出状況（南から）



1区 ST03 検出状況（北から）

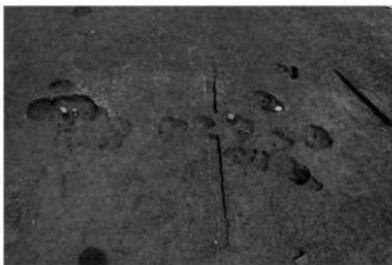


1区 ST04 検出状況（北から）

図版 12 朝酌菖蒲谷遺跡



2 区 SD06 検出状況 (西から)



3 区 SX07 検出状況 (西から)



3 区 SX07 遺物 [65-1] 出土状況 (南から)



3 区 遺構完掘状況 (西から)



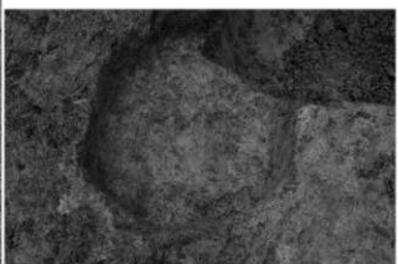
4区 SD12、SB13、SB14 完掘状況(南から)



4区 SX11 検出状況(西から)



4区 SB13-SP52[71-1] 出土状況(南から)



4区 SB14-SP59 完掘状況(南から)

図版 14 朝酌菖蒲谷遺跡



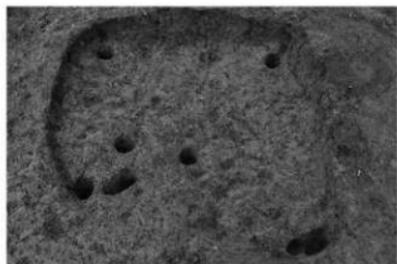
5 区 遺構完掘状況(南から)



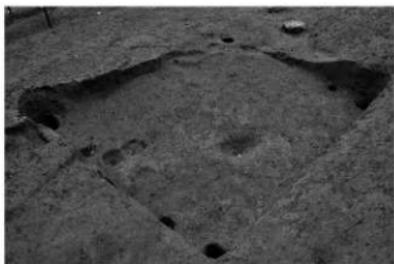
5 区 SX18 土層断面検出状況(南から)



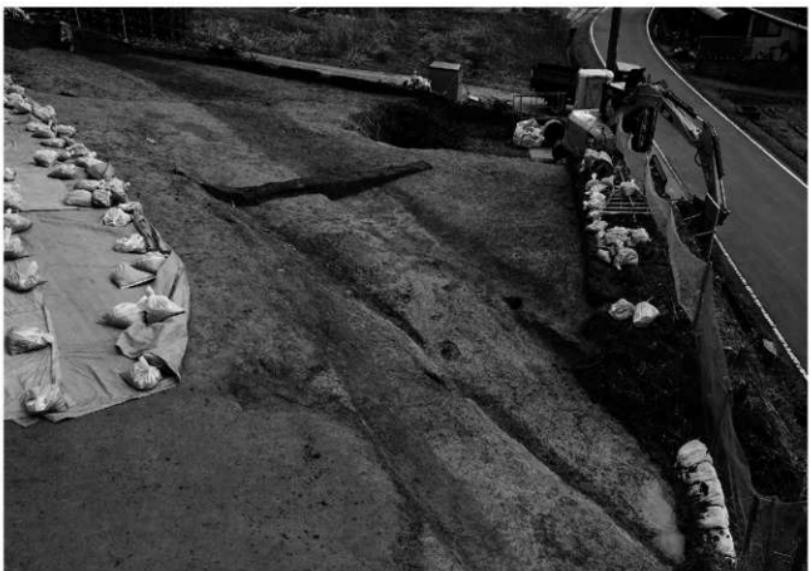
5 区 SX20 土層断面検出状況(東から)



5 区 SX18 完掘状況(南から)



5 区 SX20 完掘状況(北東から)



6区 SF23～SF25 検出状況(北から)



6区 SF24、SF25 東半部 完掘状況(北西から)

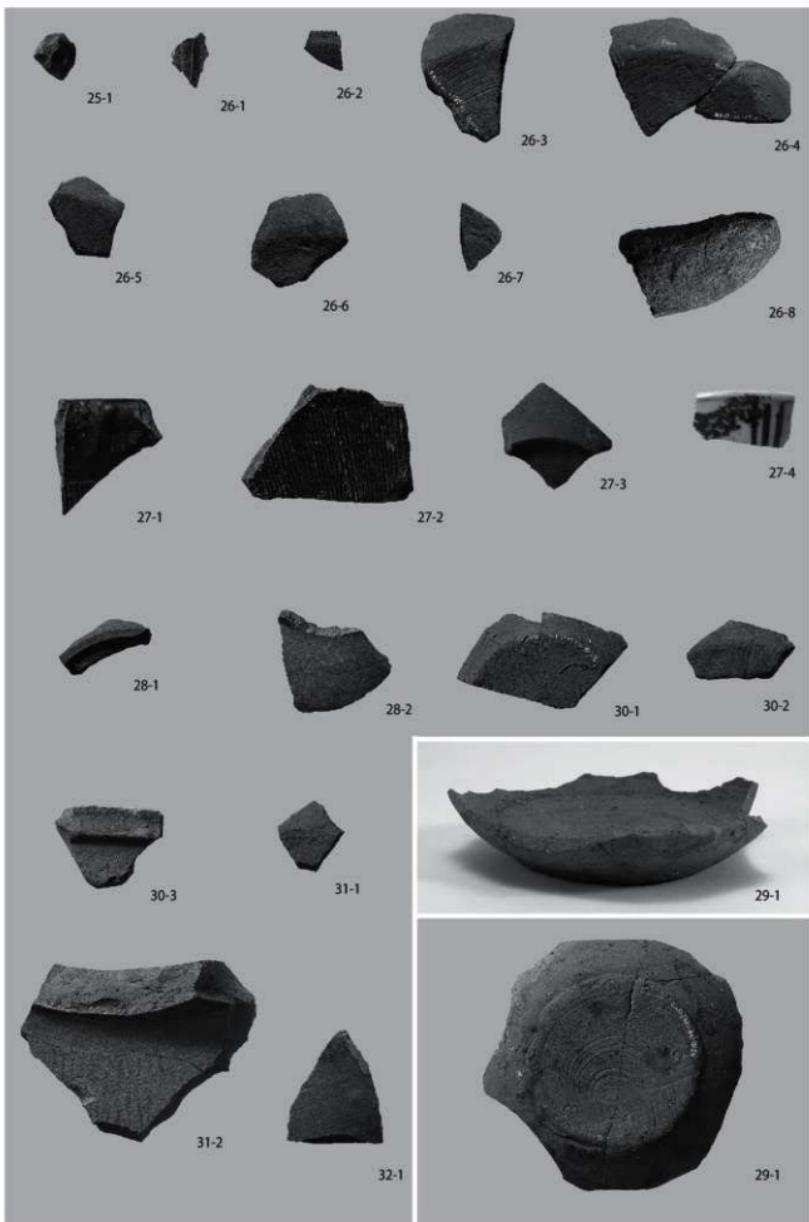
図版 16 朝酌菖蒲谷遺跡



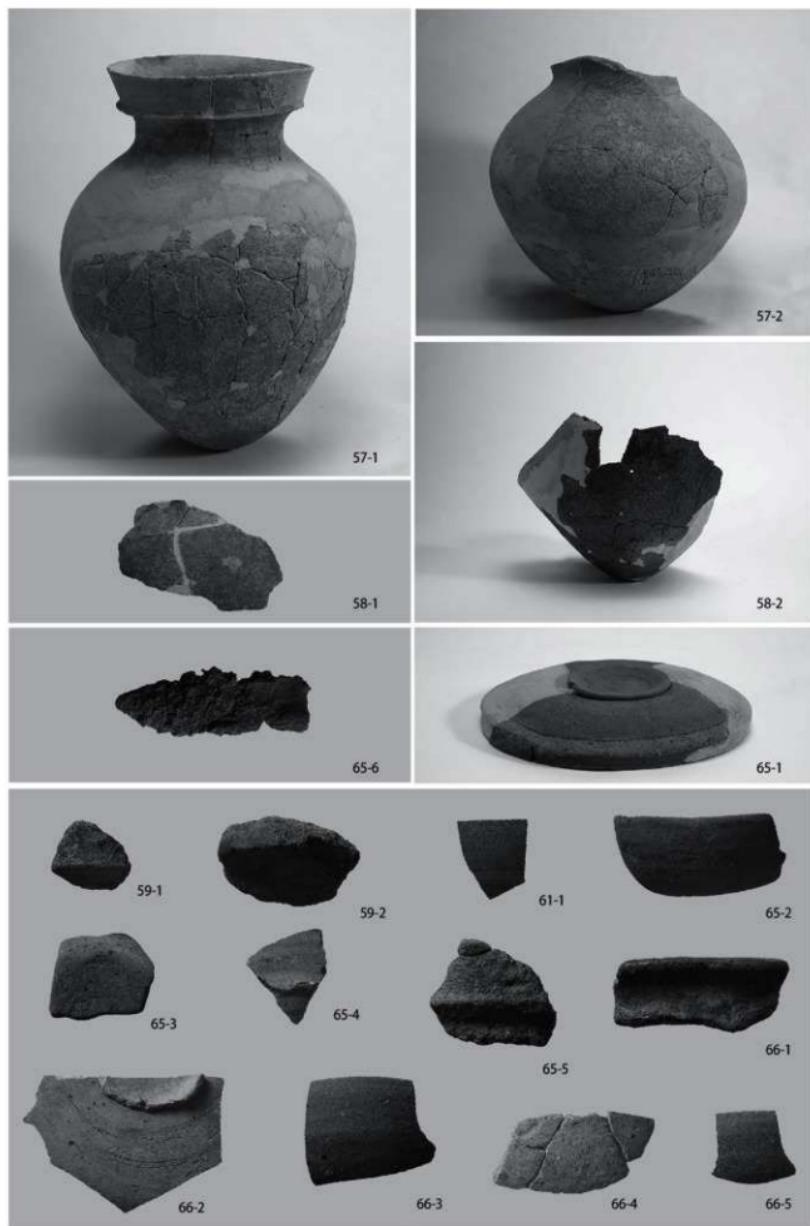
7区 SD27 完掘状況(南から)

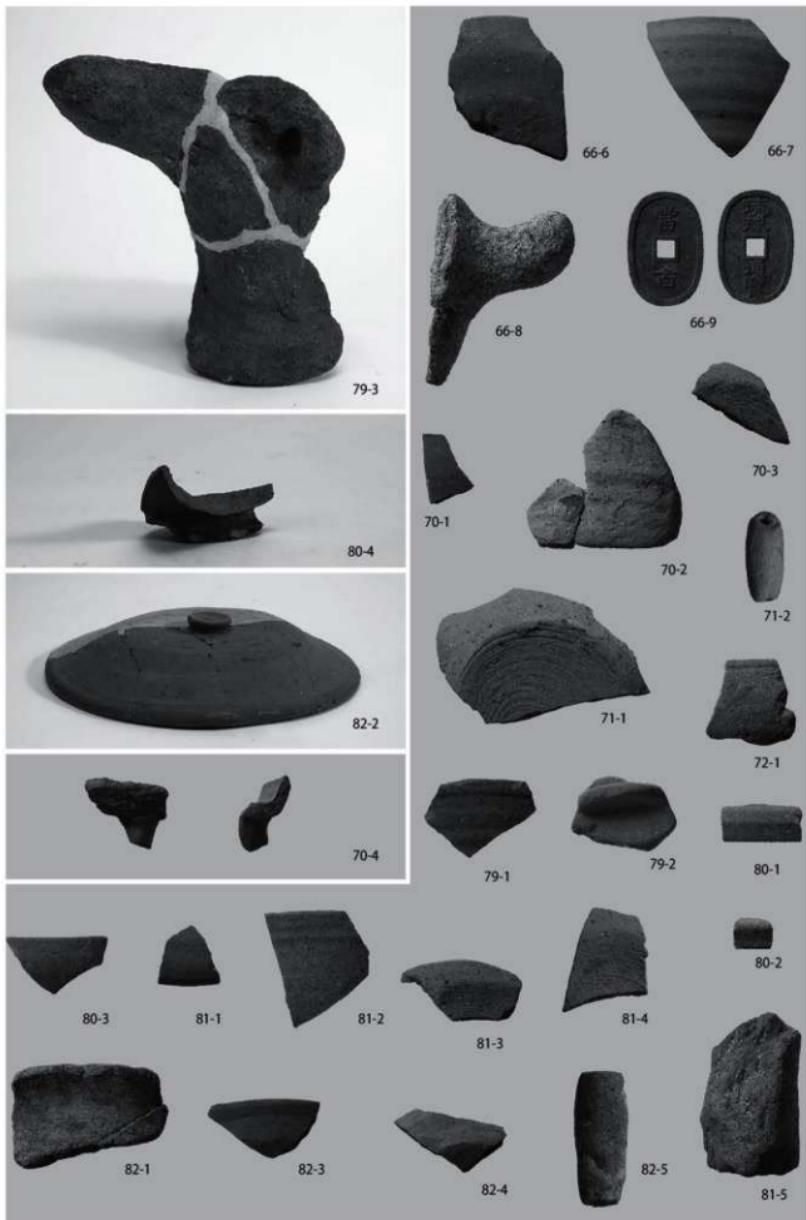


7区 SX28、SB29、SB30 完掘状況(西から)

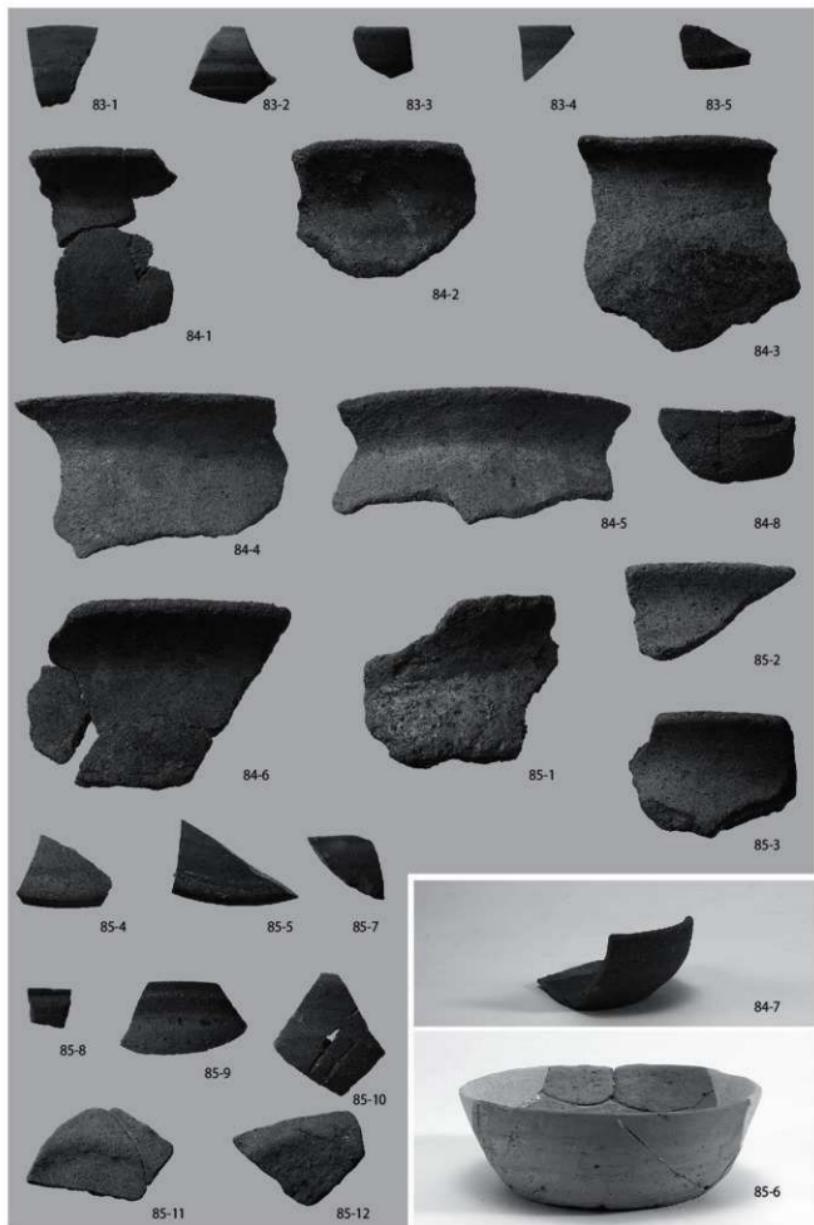


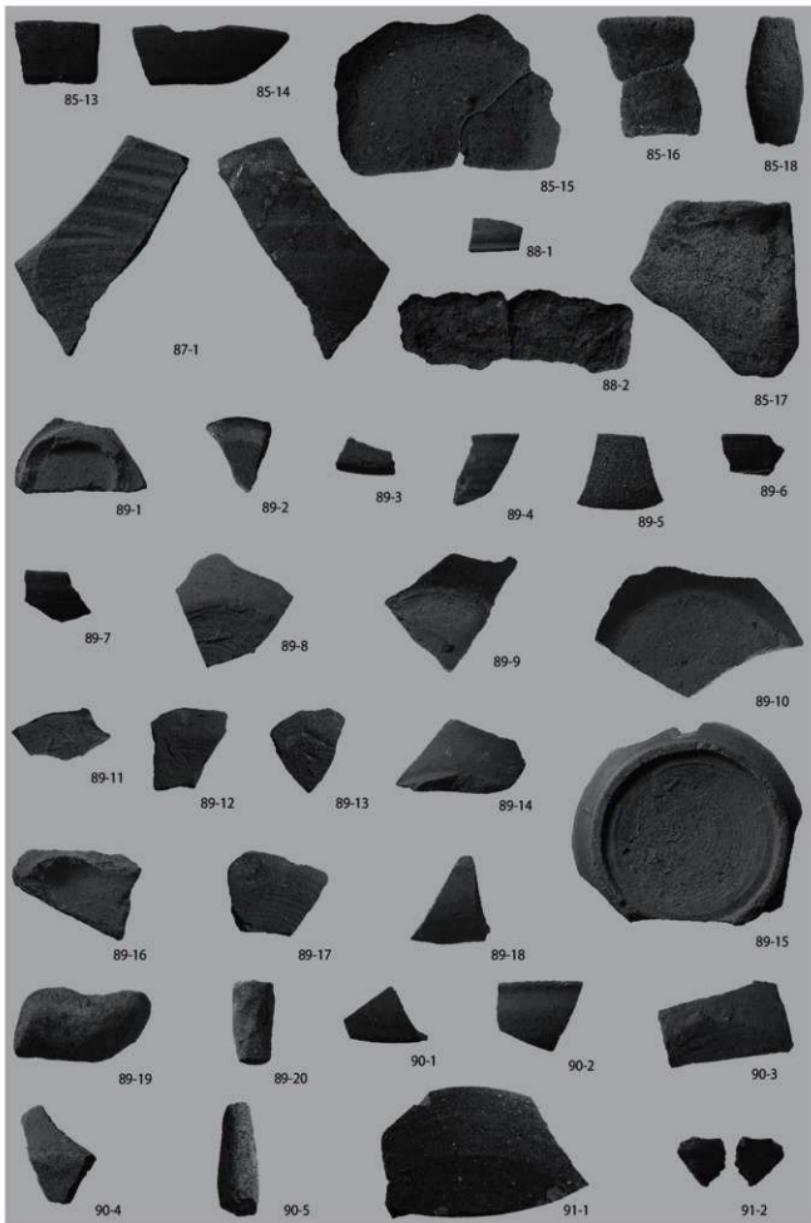
図版 18 朝酌菖蒲谷遺跡



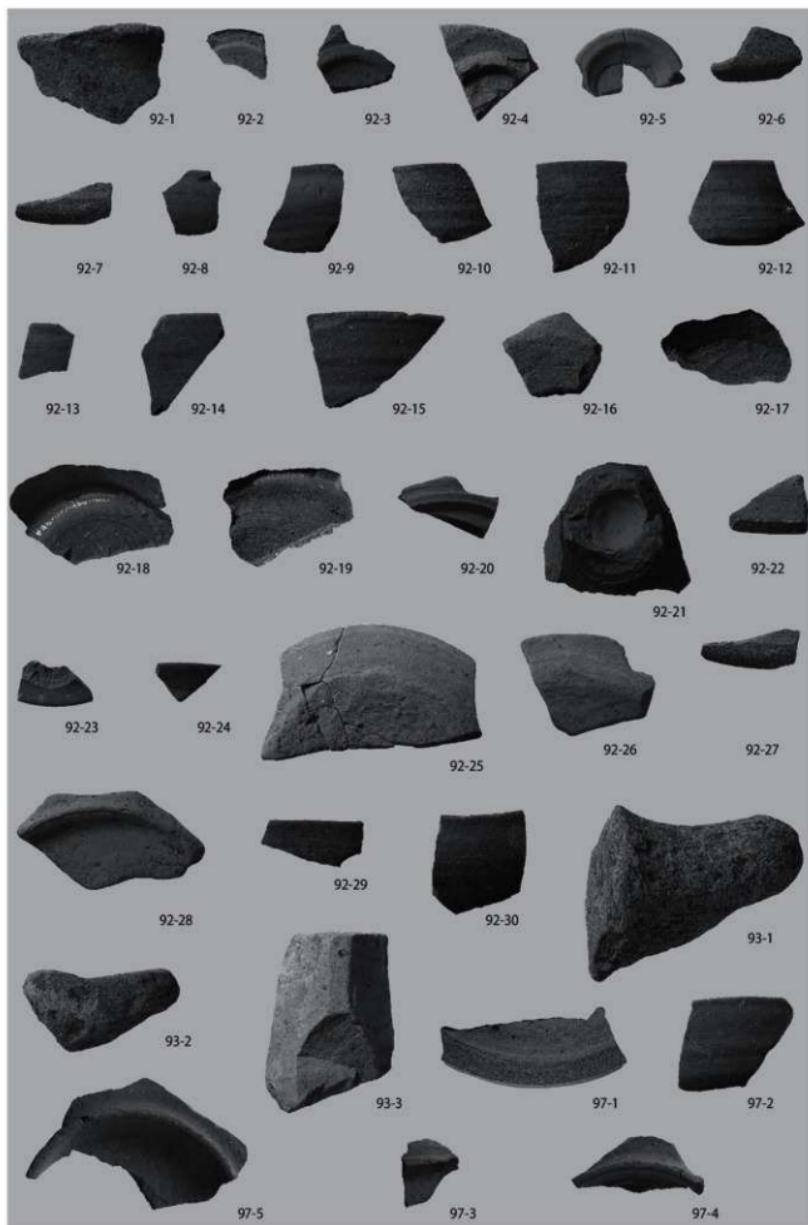


图版 20 朝酌菖蒲谷遺跡





图版 22 朝酌菖蒲谷遺跡



報告書抄録

ふりがな	うおみづかいいせき・あさくみしょうぶだにいせき								
書名	魚見塚遺跡・朝酌菖蒲谷遺跡								
副書名	市道西尾大井線道路整備事業に伴う発掘調査報告書								
卷次									
シリーズ名	松江市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第181集								
編集者名	江川幸子 徳永隆								
編集機関	松江市教育委員会 (松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室) 〒690-8540 島根県松江市末次町 86 番地 TEL: 0852-55-5284								
	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団(埋蔵文化財課) 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀 1263-1 TEL: 0852-85-9210								
発行年月日	2018年3月								
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因		
市町村		遺跡番号	東経						
魚見塚遺跡	島根県松江市 朝酌町 940-2,941-2,942-1 942-2,960-1,972-3	32201	D-1151	35° 27' 23"	20160512 ~ 20160921	207.9m ²	道路整備		
				133° 06' 09"					
朝酌菖蒲谷遺跡	島根県松江市 朝酌町 999-1 外	32201	D-1150	35° 27' 17"	20161215 ~ 20170524	1001.8m ²			
				133° 06' 09"					
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
魚見塚遺跡	道路	奈良時代 ~ 江戸時代	道路	土師器 須恵器 陶器 磁器	『出雲国風土記』に記載された 「枉北道」推定ルート上で古代 の道路遺構を検出した。				
朝酌菖蒲谷遺跡	墓 集落跡 道路	古墳時代 ~ 江戸時代	土器棺墓 溝 加工段 掘立柱建物跡 道路溝	土師器 須恵器 陶器	古墳時代の土器棺墓と奈良時代 の集落跡を検出した。 このほか、道路遺構を検出して いる。				

松江市文化財調査報告書 第181集

市道西尾大井線道路整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

魚見塚遺跡・朝酌菖蒲谷遺跡

平成30(2018)年3月

編集・発行 島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財團

印 刷 有限会社 高浜印刷